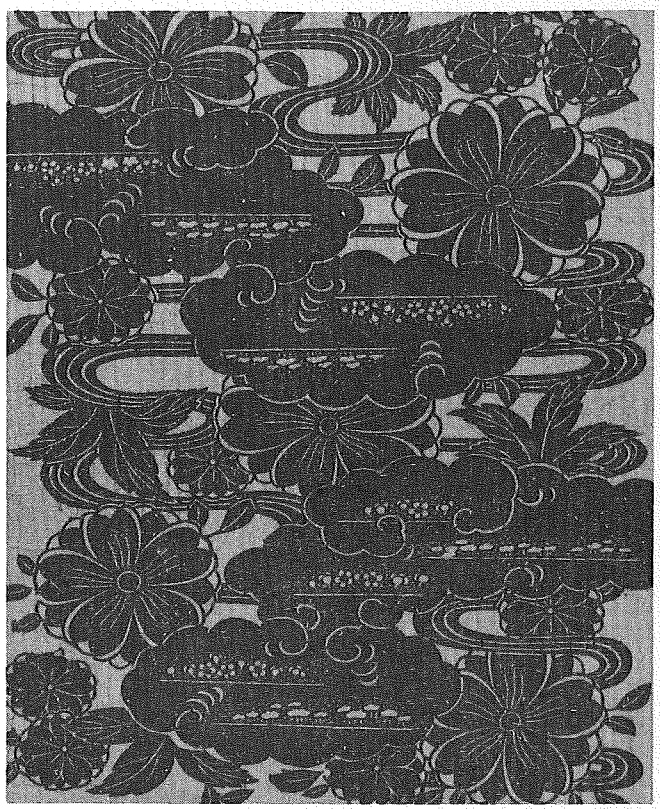
贈呈

琉球政府立博物館

館　　報

No.3



1970年

目　　次

序

沿　革 …… 1

博物館案内図 …… 2

機構及び職員構成 …… 3

博物館運営協議会委員名 …… 3

予算の推移及び所蔵資料現在高 …… 4

資料購入点数の推移及び当館所蔵の文化財 …… 5

施設使用状況 …… 6

入館者数 …… 8

主なる来館者 …… 9

来館学校団体名 …… 9

主なる新収蔵品写真 …… 12

新収蔵資料 …… 14

新収蔵図書 …… 16

月別消費電力量及び水道使用量 …… 18

博物館主催行事について …… 19

1. 当館所蔵厨子甕展 …… 19
2. 当館所蔵拓本展 …… 20
3. 楽童子展 …… 21
4. 安谷屋正義遺作展 …… 22
5. 琉球染織展 …… 23
6. 指定文化財展 …… 24

職員の活動状況 …… 25

案　　内 …… 26

研究及び調査報告

女性の二つの運搬用具について …… 上江洲　均 …… 27

戦後沖縄空手古武術の推移 …… 宮城篤正 …… 41

琉球の屋根獅子 …… 大城精徳 …… 60

当館所蔵石器の紹介 …… 玉城盛勝 …… 77

※ 表紙写真：紅型型紙「菊水に桜模様」

序

１９７０年の博物館館報をお送りするにあたり、新館長として、一言ごあいさつを申しあげます。

かえりみますれば、博物館が尚家跡に新築移転してから、早や４年もたってしまいました。その間「日本古美術展」「これが沖縄だ展」「サントリー美術館沖縄染織展」等々大きな展示会が、沖縄と日本本土でそれぞれ華々しく催され、その他にも数々の行事が矢つぎ早やに行われ、いきつく間もなく今日に至りました。

これらの行事は、館報の創刊号と第２号に詳しく紹介し、沖縄の各学校や関係機関・寄贈者に配布し、さらに、本土の博物館や各種団体にも送付しましたところ、その反響は意外に大きく、あちこちから送付依頼状をいただいた次第です。またこれと引換えに、各地の博物館からも種々の貴重な資料が寄せられ、館報の果たす役割りがいかに大きいかということを、職員とともに切実に感じさせられました。それで、今回第３号の作成に当っては、前回よりも一層充実したものにすべく、館員の若い力が結集されました。

申すまでもなく、琉球博物館は、戦後灰燼の中から文化財を蒐集して創設されました。そして、琉球の文化財を保存し、展示し、かつ、内外に顕揚したいとの創設者の方針が、歴代の館長によって今日まで受け継がれてきました。従って、歴史博物館的な性格をもって運営され、館員の努力と多くの人々の協力により今日の如き発展を見るに至りました。

このような方針は今後も持続されると思いますが、私は、その上にさらに、琉球の歴史や文化をもっと深く知るには、かって琉球と関係のあった国々の文化を研究し、調査し、出来ればそれらの国々の文化財をも蒐集し、展示する必要があり、今後はこの方面にも力を入れるべきだと思っております。このことは、博物館が社会教育の機関であり、かつ文化の殿堂たると同時に、学問研究の場でもあらねばならぬと思うからであります。その意味で、今回は展示活動と同時に、調査報告、研究の面に特にスペースを多くとり、かつ研究が多方面にわたっていることは、博物館のみならず内外の研究者にとっても、大いに喜んでいただけるものと思っております。

次に博物館は、予算の都合で、いまだに環境整備がなされておりませんが、それかと云ってそのままいつまでも手をこまねいてばかりもおれませんので、今後は早急に環境の整備に取りかかりたいと思います。

凡そ欧米では、他国を旅行したら、まず最初にその国の博物館を訪問するのが礼儀とされ、それが一般の常識となっているようです。このことは博物館が一国の文化機関として、如何に重要な位置をしめているかを物語っております。そのため博物館では、それらの来客を迎えるべく、何処の国においても立派な環境の下におかれていることを私も欧米の博物館を巡って見分しました。琉球博物館もいまや年間１０万余の内外の客を迎え、さらに今後のことを思えばなおさら環境の整備は急を要すべきだと思います。その上に施設を一層充実させるべく、館員とともに努力を積み重ねていきたいと思います。

何卒今後も御協力下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

琉球政府立博物館長

外　間　正　幸

沿　革

（１９６９年１月～１２月）

１月１０日　写真展「沖縄戦とその直後の生活」を開催（１ヶ月間）

３月　４日　始めて博物館学実習生を受け入れる

３月１２日　「琉球の厨子甕」特別展を開催（１ヶ月間）

７月　９日　「楽童子展」を開催（１８日間）

７月２９日　「安谷屋正義遺作展」を開催（２０日間）

９月　２日　琉球染織研究会と共催で染織特別展と「染織についての講演会」を開催

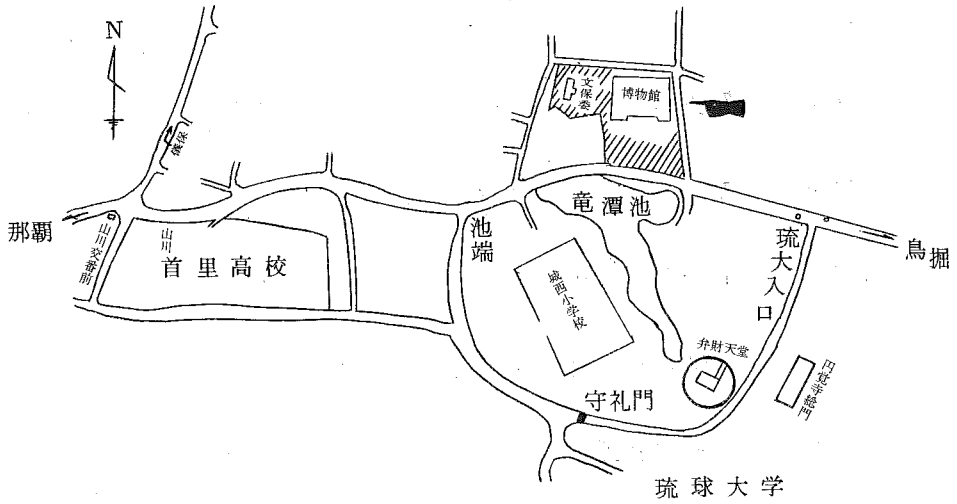
１１月初　旬　文化財保護強調週間に因み、文化財保護委員会共催で「指定文化財」の特別展を開催

１１月１２日　大城知善館長勧奨により退職

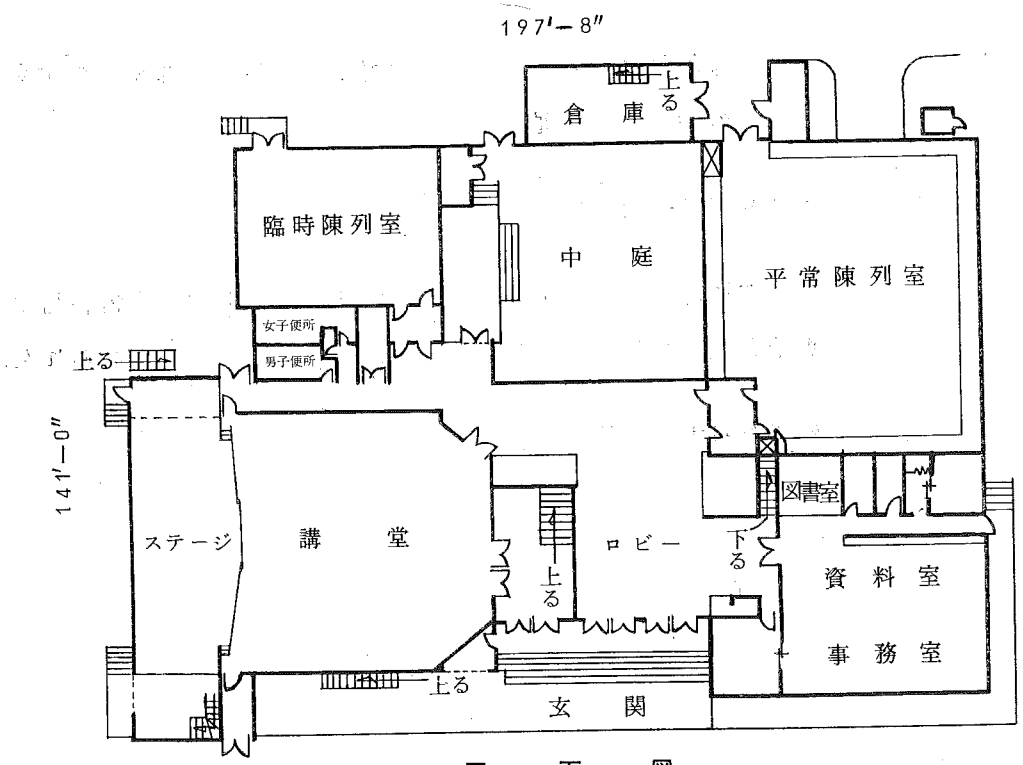
１１月３０日　裏千家沖縄大会が当館ホールで開催され、大会中、当博物館に裏千家より寄贈されることになった茶室の目録贈呈が行われた。

１２月　１日　外間正幸主事が館長に就任

博物館案内図



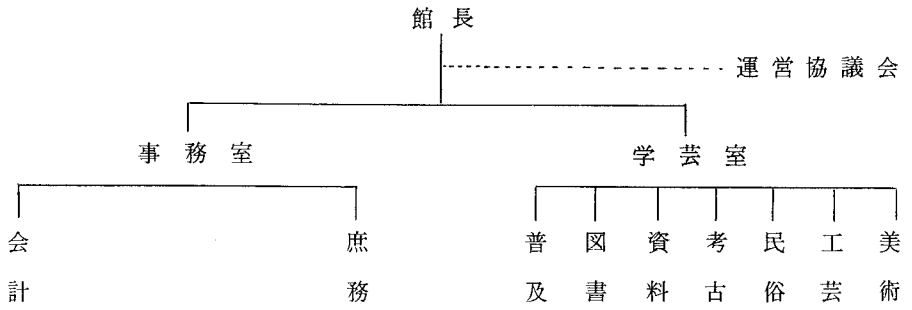
見　取　図



平　面　図

機構及び職員構成

1 機　　構



2 職員構成

職　名	職員数	職　員　名	
館　長	1	外間正幸	
学芸職	4	大城精徳（美術）	上江洲　均（民俗）
		玉城盛勝（考古）	宮城篤正（工芸）
事務職	4	阿波連本敬	知念朝健
		大城美椰子	欠員（１人）
電気職	1	黒島　惇	
作業職	1	与儀ウシ	

3 職員の移動状況

退　職　大城知善　野崎真美

転　出　上江洲キク（文教局経理課へ）　新垣綾子（文教局高校教育課へ）

昇　任　外間正幸（館　長）

転　入　宮城篤正（仲西中学校より）　阿波連本敬（文教局経理課より）

大城美椰子（文教局保健体育課より）

4 博物館運営協議会委員

学校教育関係	末吉安久	（首里高等学校教諭）
	大山盛幸	（首里山川町自治会長）
	国吉順質	（那覇連合区教育委員会教育次長）
社会教育関係	比嘉松吉	（文教局社会教育課長）
	徳山清志	（南部連合区教育委員会社会教育課長）
学識経験者	池村恵興	（文教局指導部長）
	源　武雄	（琉球政府文化財保護委員長）
	山元恵一	（琉球大学美術工芸科助教授）
	山城善三	（沖縄観光協会専務理事）
	阿波根朝松	（興南高等学校長）

予算の推移（過去10年間）

単位：ドル

年度	定員	予算額	内容		
			運営費	資料購入費	事業費
1960年度	7人	$ 12,029	6,029	6,000	—
1961	7	10,005	6,785	3,220	—
1962	7	8,339	7,339	1,000	—
1963	7	10,420	9,220	1,200	—
1964	7	11,584	9,734	1,850	—
1965	7	12,265	10,613	1,652	—
1966	7	13,769	12,419	1,350	—
1967	7	41,683	18,683	1,500	21,268
1968	11	36,235	29,645	700	5,890
1969	11	67,961	41,761	1,200	25,000

所蔵資料現在高

（図書資料を除く）

1969年6月30日現在

分類＼収蔵別	購入	寄贈	蒐集	計
陶磁器	360	384	223	967
漆器	161	76	14	251
染織	722	86	5	813
書画	350	171	35	556
石彫	0	15	56	71
木彫	8	17	24	49
金工	19	80	27	126
歴史	10	19	10	39
考古	0	28	0	28
貨幣	20	2	0	22
楽器	3	16	0	19
建築	0	2	0	2
民俗	80	78	4	162
装身具	19	8	0	27
自然	0	7	0	7
その他	315	14	29	358
計	2,067	1,003	427	3,497

資料購入点数の推移

（過去10年間）

分類 / 年度	陶磁器	漆器	染織	書画	木彫	金工	その他	計
1960	0	6	5	25	0	1	135	172
1961	6	10	4	16	0	0	7	43
1962	0	2	1	13	1	0	0	17
1963	0	0	0	6	0	0	0	6
1964	1	11	5	40	0	0	0	57
1965	3	11	2	0	0	1	1	18
1966	0	3	0	1	0	1	1	6
1967	2	10	2	0	0	1	1	16
1968	21	3	0	0	2	0	1	27
1969	14	2	0	0	0	0	21	37
計	47	58	19	101	3	4	167	399

当館所蔵の指定文化財

特別重要文化財

名称	種別	指定年月日	備考
木彫円覚寺白象並びに趣意書木札	彫刻	1958. 3. 14	全長 120cm　頭高 61.2cm　胴廻り 93.9cm
世持橋勾欄羽目	〃	〃	高さ 33.3cm　横 80.6cm
志多伯開鐘（三味線）	工芸	1955. 5. 23	全長 77.2cm　糸蔵 3.5cm　重量 440g
旧首里城正殿前梵鐘	〃	1958. 3. 14	高さ 154.5cm　口径 94cm　重さ 600 kg
評定所格護定本おもろそうし	典籍	〃	22 巻
評定所格護定本混効験集	〃	〃	縦 25.5cm　横 20cm　枚数 227 枚

重要文化財

名称	種別	指定年月日	備考
玉陵石彫獅子	彫刻	1956. 12. 14	2基　各高さ 1.17 m　胴廻り 1.21 m
聞得大君御殿雲龍黄金簪	工芸	〃	全面黄金張 全長 28.4cm　直径 11cm　重量 21 g
黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	〃	〃	高さ 16cm　縦 41cm　横 31cm　重さ 2.29kg
黒塗堆錦山水絵大文庫	〃	〃	高さ 14cm　縦 40.8cm　横 31.7cm　重さ 3.45kg
黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀	〃	〃	3口　高さ 11.8cm　重さ 160 g　直径 12 cm
三味線「江戸与那」	〃	〃	全長 80cm　心長 21.6cm　糸蔵 4.8cm　重量 503g
宮古島下地の首里大屋子への辞令	古文書	〃	縦 28.5cm　横 82.5cm
評学所格護定本中山世鑑	典籍	〃	6 巻
評定所格護定本中山世譜	〃	〃	19 巻

施設使用状況

1. 講堂

1969年1月～12月

月日	使用目的	使用者名	人員
1. 8	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	350
24 ～ 25	全沖縄家庭クラブ研究発表会	全沖縄家庭クラブ連盟	700
2. 12	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	200
13 ～ 16	演劇教室	劇団たんぽぽ	3,150
18	組踊記録映画試写会	文化財保護委員会	150
28	学習発表会	城西小学校	2,520
3. 1 ～ 2	学習発表会	城西小学校	1,260
12	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	200
20	関西地区大学生への講演	博物館	80
25	新入生オリエンティション	琉球大学	600
29	国・自費学生壮行会	琉球育英会	600
4. 9	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	55
24	新入生歓迎のための演劇会リハーサル	首里高校	50
27	新入生歓迎会のための演劇発表会	首里高校	400
5. 14	組踊の試写会	文化財保護委員会	20
31	映画観賞と講演会	南風原村字与那覇寿会	40
6. 7 ～ 8	よい映画による親と子の対話	沖縄自主上映委員会	1,400
15	演劇公演	劇団沖縄たんぽぽ	1,260
21	民俗芸能の舞台げいこ	文化財保護委員会	20
28 ～ 29	演劇発表	演劇集団創造	2,400
7. 13. 15	児童合唱のけいこ	城西小学校	60
20	那覇地区小・中校音楽合唱コンクール	那覇地区小・中校音楽会	500
25 ～ 26	九州高校理科教育研究会沖縄大会	沖縄県高校理科教育研究協議会	800
8. 3	民俗研究発表会	琉大民俗クラブ	100
5 ～ 6	全国高校定時制通信教育振興会	沖縄県高校定・通制振興会	1,260
16	中南部地区高校英語弁論大会	那覇青年会議所	100
23. 24. 28	古典舞踊のけいこ	宮城能造舞踊研究所	30
9. 2	染織についての講演会	織物研究会・博物館	
3 ～ 4	古典舞踊のけいこ	宮城能造舞踊研究所	40
9	映画試写会	博物館	200
13	全琉高校英語弁論大会	沖縄青年会議所	150
21	考古学会総会	沖縄考古学会	150

月　日	使　用　目　的	使　用　者　名	人員
9. 6	国際婦人会議報告会	中今八重子	200
28	西部合唱コンクール	西部合唱連盟沖縄支部	630
11. 1～9	映写会・民俗芸能・組踊の公開	文化財保護委員会	2,000
11. 14	芸能祭沖縄舞台けいこ	沖縄歌舞団	60
12	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	400
14	沖縄の旋律試聴会	沖縄プロムジカ	30
15	南部支部家庭クラブ研究発表会	家庭科教育研究会	630
16	池ノ坊映画観賞会	沖縄淡交会	50
30	茶道裏千家沖縄大会	茶道裏千家沖縄支部	400
12. 2	英語劇リハーサル	琉大英語クラブ	25
4	箏曲リハーサル	琉大箏曲クラブ	20
9. 12	人形劇リハーサル	琉大児童文化クラブ	40
10	沖縄の文化講演会	国際婦人クラブ	70
13～14	琉大祭公演	琉球大学	1,400
16～17	よい映画による社会科学習会	沖縄県自主上映委員会	200
24	琉大民俗クラブ講演会	琉大民俗クラブ	70
25～26	全沖縄高校家庭科クラブ研究発表会	全沖縄家庭クラブ連盟	630

2　臨時陳列室

1969年1月～12月

年月日	使　用　目　的	主　催　者　名
1.10～2.9	写真展「沖縄戦とその直後の生活」	博物館
3.12～4.27	厨子がめ展	〃
5.10～7.6	拓本展	〃
7.9～27	楽童子展	〃
7.29～8.17	安谷屋正義遺作展	〃
8.26～31	洋画二人展	翁長自修・稲嶺成祚
9.2～7	琉球染織展	織物研究会・博物館
9.25～10.19	模型展「琉球の船のいろいろ」	西宮真栄
10.23～11.7	洋画個展	城間喜宏
11.11～22	赤土会展	赤土会
11.28～30	茶道具展	小橋川永昌
12.2～7	創斗展	創斗会
12.16～27	洋画二人展	喜久村徳男・新垣輝夫

3　そ　の　他

年　月　日	使　用　目　的	主　催　者	開催場所
4.17～　23	切　手　展	郵　政　庁	ロ　ビ　ー
11. 1～　7	指　定　文　化　財　展	文保委・博物館	平常陳列室
11. 1～　4	首里文化祭演芸大会	首里文化祭事業局	前　庭
11.25～12. 7	南　蛮　二　人　展	小山富士夫・中川伊作	ロ　ビ　ー

入　館　者　数

1　参観者統計（1960～1969）

年　別	人　数	備　考
1960	74,010	
1961	94,097	
1962	119,437	
1963	119,281	
1964	150,935	
1965	89,593	
1966	135,386	1966年11月3日　新館開館　　10月休館
1967	229,464	日本古美術展開催　1月・2月で13万人
1968	97,062	
1969	100,110	
計	1,209,375	

2　月別参観者及び入館料（1969. 1～1969. 12）

月＼項目	大　人	学　生	生　徒	計	開館日数	1日平均	入　館　料	備　考
1	3,866	408	1,625	5,899	23	256	$ 416.55	
2	5,777	405	4,791	10,973	24	457	534.88	
3	5,283	1,712	936	7,931	25	315	666.02	
4	3,991	402	1,217	5,610	24	233	414.81	
5	3,950	277	3,751	7,978	24	332	425.78	
6	3,515	137	1,873	5,525	24	230	362.46	
7	2,895	1,310	1,511	5,716	27	211	381.14	
8	6,452	2,705	2,475	11,632	25	465	779.30	
9	2,412	227	760	3,399	23	147	248.04	
10	4,877	323	5,117	10,317	26	393	524.78	
11	7,615	883	13,601	22,099	25	883	995.56	
12	2,046	474	511	3,031	23	131	327.31	
計	52,679	9,263	38,168	100,110	293	4,053	6,076.63	

主 な る 来 館 者

（1969年1月～12月）

1月　社会開発青年奉仕隊団長牧原満男氏外27名、文部省三木彰氏、井内慶次郎氏、日米琉諮問委員会調査官島田治氏、文部省文化財管理指導官室尾晃氏、文部技官田村晃一氏、日本古文書学会会長伊木寿一氏

2月　画家中川伊作氏、日本民芸館々長浜田庄司氏、沖縄郷土文化研究会長有川董重氏

3月　科学技術庁政務次官平泉渉氏、文部省社会教育課長補佐北橋氏、イギリスの陶芸家バーナードリーチ氏夫妻、日本民芸館長浜田庄司夫妻、文部省総務課岩間徹三氏、竜谷大学教授小野勝年博士、ベナージー駐日インド大使

4月　文部省大臣官房岡本昭氏、横須賀市立博物館長羽根田彌太氏、ランパート高等弁務官、千葉県文化財専門委員与世里盛春氏、山崎草木染研究所山崎陽夫氏、作家石野径一郎氏、名古屋市立女子短大教授高橋春子女史

5月　裏千家々元千宗室氏、松井宗新氏、

6月　静岡県教育次長大石良彦氏、画家中川伊作氏

8月　ハワイ・ビショップ博物館教育係W.モアー氏、染織研究家柳悦孝氏

9月　陶磁器研究家小山富士夫氏、東京国立博物館東洋美術室長長谷部楽爾氏、大阪教職員組合執行委員長東谷敏雄氏、総理府事務官岡野雄浄氏、ランパート高等弁務官

10月　武蔵野美術大学教授宮本常一氏、NHK教養部谷尾嚢氏、倉橋清一氏

11月　静岡県副知事永原稔氏

12月　大阪市立博物館長平山敏治郎氏、韓国嶺南大学総長李瑄根氏、衆議院文教委員会調査室石田幸男氏、衆議院逓信委員会東哲氏、天理大学教授佐藤虎雄博士、日本民芸館長浜田庄司氏、東京大学教授大内力博士

来 館 学 校 団 体 名

（1969年3月1日～12月31日）

月	学校団体名	人数
3月	大里村大里南小学校	140人
	読谷村喜名小学校	94
	糸満町兼城小学校	38
	北大東村北大東中学校	54
	那覇市神原中学校	27
	豊見城村良長幼稚園	39
	那覇市大道幼稚園	210
	読谷村読谷高校（定時制）	125
	崎本部村崎本部小学校	44
	大里村船越小学校	85
	宜野湾市嘉数小学校	39人
	糸満町糸満小学校	41
	国頭村楚洲中学校	6
4月	Pacific Junior High School	152
	Camp Hauge Elementary School	59
	Port WheeL Junior High School	36
	浦添村神森小学校	209
	与那城村宮城中学校	85
	与那原町与那原小学校	180
	西原村西原中学校	554

月	学校団体名	人数
	Camp Hauge School	25
	知念村久高小学校	34
	石川市宮森小学校	120
	那覇市識名小学校	200
	西原村西原小学校	130
	那覇市高良小学校	240
	国頭村佐手中学校	94
	大宜味村喜如嘉中学校	40
	中城村中城中学校	336
	久米島具志川中学校	130
	宜野湾市嘉数中学校	400
	国頭村北国中学校	44
	国頭村国頭中学校	160
6月	屋部村北部農林高校	31
	金武村金武中学校	200
7月	座間味村座間味中学校	53
	渡嘉敷村渡嘉敷中学校	74
	渡名喜村渡名喜中学校	45
	石垣市石垣中学校	200
8月	与那城村伊計中学校	23
	与那城村宮城小学校	58
9月	伊平屋村伊平屋中学校	83
	伊是名村伊是名中学校	155
	崎本部村崎本部中学校	41
10月	糸満町兼城中学校	125
	大里村大里中学校	200
	金武村金武小学校	300
	本部町伊野波中学校	43
	本部町瀬底中学校	52
	読谷村読谷中学校	300
	嘉手納村嘉手納中学校	320
	本部町浜元中学校	34
	宜野座村漢那小学校	22
	西原村坂田小学校	72
	東風平村東風平中学校	254

月	学校団体名	人数
	勝連村浜中学校	42
	久志村久志中学校	80
	本部町本部中学校	230
	恩納村恩納中学校	93
	那覇市開南小学校	220
	中城村中城小学校	327
	北中城村北中城中学校	160
	糸満町真壁小学校	150
	与那城村宮城中学校	79
	具志川市兼原小学校	380
	宜野座村宜野座中学校	120
	恩納村山田中学校	52
	恩納村山田小学校	98
	宜野湾市宜野湾小学校	250
	金武村中川小学校	60
11月	具志川市あげな小学校	413
	羽地村真喜屋小学校	54
	国頭村安田中学校	48
	与那城村与那城小学校	287
	読谷村古堅中学校	230
	コザ市島袋中学校	100
	勝連村勝連小学校	100
	石川市伊波小学校	127
	屋我地村屋我地中学校	84
	コザ市越来中学校	280
	宜野湾市普天間小学校	510
	那覇市壺屋小学校	223
	Zukeran Middle School	78
	羽地村羽地小学校	78
	具志川市高江洲中学校	150
	今帰仁村天底小学校	84
	美里村美里中学校	300
	糸満町糸満小学校	180
	屋我地村屋我地小学校	80
	具志頭村新城小学校	169

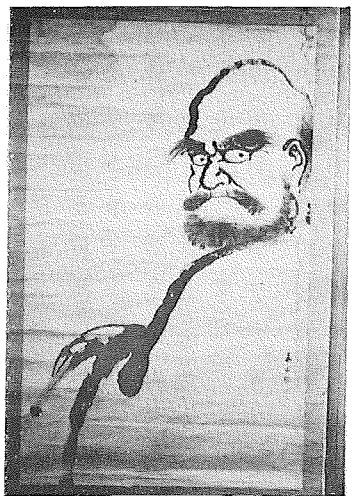
月	学校団体名	人数
	北谷村 北谷小学校	144
	屋部村 屋部中学校	90
	宜野湾市 大山小学校	159
	具志川市 具志川中学校	314
	大里村 大里北小学校	48
	久志村 久辺中学校	74
	石川市 石川中学校	420
	東風平村 東風平小学校	200
	コザ市 山内中学校	250
	美里村 美里小学校	260
	美里村 北美小学校	80
	名護町 名護中学校	400
	恩納村 安富祖中学校	206
	本部町 本部小学校	213
	与那城村 桃原小学校	20
	石川市 城前小学校	204
	糸満町 兼城小学校	125
	名護町 瀬喜田中学校	48
	名護町 東江小学校	130
	糸満町 高嶺小学校	113
	今帰仁村 兼次中学校	90
	糸満町 米須小学校	71
	那覇市 若狭小学校	26
	東村 有銘中学校	33
	与那城村 与勝中学校	500
	東村 東中学校	57

月	学校団体名	人数
	宜野湾市 普天間第二小学校	130
	恩納村 喜瀬武原小学校	58
	上本部村 上本部中学校	154
	羽地村 源河小学校	34
	恩納村 喜瀬武原中学校	39
	玉城村 百名小学校	68
	糸満町 喜屋武小学校	75
	北谷村 北玉小学校	310
	美里村 高原小学校	110
	今帰仁村 湧川小学校	50
	大宜味村 大宜味中学校	41
	コザ市 コザ中学校	400
	今帰仁村 湧川中学校	49
	具志頭村 具志頭小学校	110
	玉城村 玉城小学校	125
	羽地村 稲田小学校	39
	国頭村 奥間小学校	50
	玉城村 船越小学校	75
	大宜味村 塩屋中学校	50
12月	今帰仁村 今帰仁中学校	200
	今帰仁村 今帰仁小学校	99
	本部町 伊豆味中学校	56
	屋部村 安和小学校	55
	勝連村 津堅小学校	60
	羽地村 羽地中学校	157

主なる新収蔵品写真



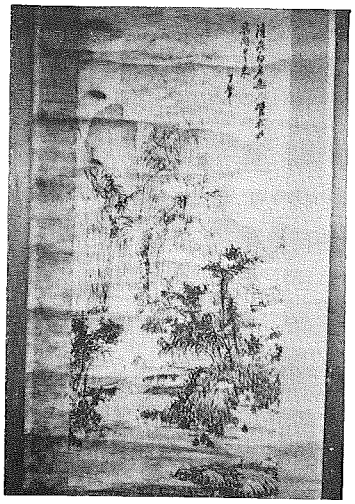
比嘉華山筆「関帝王」



比嘉華山筆「達磨之図」



朱塗御供飯



王韋筆「山水図」



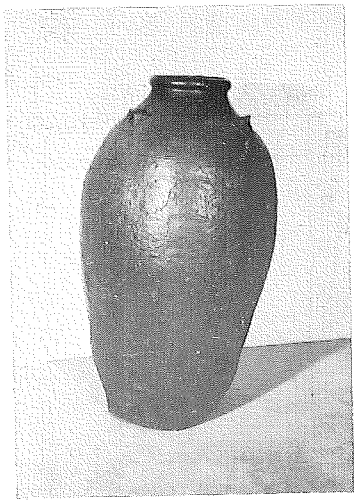
錫びん



藤づる編菓子器



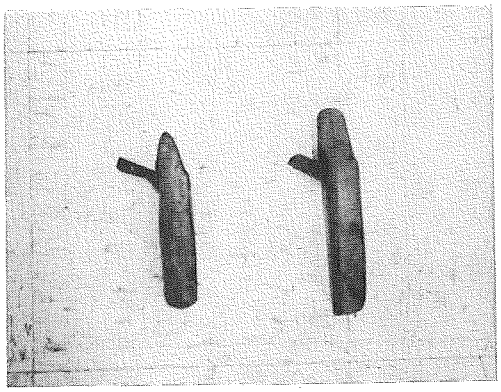
上焼厨子がめ



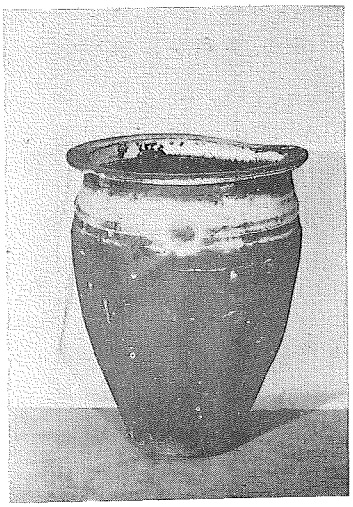
壺屋焼釘彫り模様入りがめ



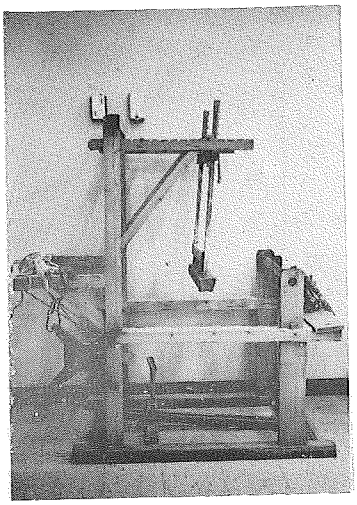
碗



イララ（粟刈りがま）



ハンドゥーがめ



高機

新収蔵資料

1 購入の部

1969. 3. 1～12. 31

分類	品目	数量	備考
陶器	耳つき味噌がめ	1	
〃	三つ耳つき味噌がめ	1	
〃	ハンドウ（水がめ）	1	
〃	ハンドウ（水がめ）	1	
〃	油壺（黒釉）	1	
〃	南蛮がめ（壺屋焼）	1	
〃	南蛮素焼大がめ（壺屋焼）	1	
〃	南蛮酒がめ（シャム）	1	
〃	飴釉あらまかい	2	
〃	染付八角碗	1	
〃	火とり（タバコ盆用）	1	
〃	サバ焼中型がめ	1	
〃	南蛮小壺	1	
漆器	小長持	2	
〃	藤づる編菓子器	1	
民俗	ニクブク	1	
〃	高機	1	
民俗	クシチー（こしき）	1	
〃	ウーン（斧）	1	
〃	鍬	1	
〃	オーラー（もっこ）	1	
〃	マーグ	1	
〃	イーゼー	1	
〃	ウーハーラー（芭蕉糸入れかご）	1	
〃	イールかき（糸巻き）	4	
〃	シリウーシ	1	
〃	カシカキ（たて糸巻き）	1	
〃	古和ダンス	1	
〃	アンディル	1	
〃	車棒	1	
〃	手斧	1	
〃	豆腐箱	1	
その他	羅針盤（中国製）	1	

2 寄贈の部

分類	品目	数量	寄贈者（敬称略）
陶器	小壺	1	与那城村 長堂 察
〃	フチュクル瓶他	2	那覇市 新垣恒徳
〃	厨子がめ	6	那覇市 多和田真亮
〃	からから	1	具志川村 田原昌康
〃	ミジクブサー	1	那覇市 大味謝恒雄
〃	香炉	1	多良間村 垣花良香
〃	香炉	2	平良市 岡本恵昭
漆器	御供飯	1	具志川村 喜友村寛栄
〃	琉球産菓子盆	5	小谷次男
金工	スズビン	2	石垣市 新本米
〃	ジーファー	1	美里村 金城徳
〃	あぶみ	1対	与那城村 長堂察
書跡	尚貞王書（写）	1	岡山県 原田禹雄

分類	品目	数量	寄贈者（敬称略）
書跡	土一揆拓本	1	奈良県　保仙純剛
〃	ACCOUNT OF A VOYAGE OF DISCOVERY 他	2	Theodore F. Beresford
絵画	日蓮上人像	1	勝連村　田中武助
〃	山水図（王翬筆）	1	鹿児島県　島袋盛範
〃	二十四孝の図 他	3	那覇市　比嘉盛徳
民俗	椰子グワー	1	具志川村　又吉昌哲
〃	ナンティ	1	東京都　岸上興一郎
〃	オーダー 他	2	与那城村　浦添昭次
〃	ファグェー 他	4	国頭村　宮城安真
〃	ソーキ 他	2	国頭村　宮里潜
〃	フタバーキ	1	国頭村　比嘉ノブ
〃	ガンシナ	1	粟国村　山内カマ
〃	フツ	1	石垣市　高屋英信
〃	なべのふた	1	石垣市　島袋ウナリ
〃	豆腐箱	1	石垣市　前津太郎
〃	シチキ	1	石垣市　岸本ヨボシ
〃	ほうき	1	石垣市　南風野英三
〃	くばつるべ	1	与那国町　後間加名
〃	弁当箱	1	与那国町　根本長昭
〃	アンディル 他	4	与那国町　本舛真加良
〃	チンタ 他	3	与那国町　新嵩シゲ
〃	イララ	2	竹富町　東里哲三
〃	ガイジ	1	竹富町　貝敷文雄
〃	マグ 他	2	平良市　岡本恵昭
〃	ティーン	2	与那城村　兼城賢和
〃	ティル	1	大宜味村　平良ノブ
〃	バーキ 他	3	羽地村　玉城源春
写真	明治末期風俗の絵はがき	17	久米島　仲原善秀
〃	平家物語（録音テープ付）	1	東京都　光和スライドＫＫ
〃	古写真（戦前の沖縄複写）	143	琉球新報社・デパート・リウボウ
〃	日本の地方史（沖縄編）スライド	1	東京都　光和スライドＫＫ
その他	寛永通宝	6	大里村　玉城栄徳
〃	琉球通宝 他	3	鹿児島県　保勇
〃	トイファ 他	2	名護町　中村茂
	計	243	

新収蔵図書

購入の部

書名	数量
全国遺跡地図（沖縄）	1
沖縄の犯科帳	1
琉球の神話	1
方言学講座第4巻九州、琉球方言	1
日本城郭全集15態本鹿児島 沖縄	1
日本庶民生活史料集成	1
沖縄童謡集	1
標音評訳琉歌全集	1
医師　仲地紀仁	1
新講沖縄 — 千年史　上・下	各1
沖縄経済史	1
近世沖縄文化人列伝	1
劇聖　玉城朝薫	1
黎明期の海外交通史	1
日本考古学辞典	1
日本の紙	1

書名	数量
沖縄仏教史	1
沖縄の古代部落マキョの研究	1
八重山の明和大津波	1
八重山民謡史	1
沖縄郷土歴史読本	1
海東小国記	1
琉球科律紀明法条	1
沖縄の歳月	1
琉球文学序説	1
沖縄の仏教と迷信	1
沖縄の芸能	1
沖縄現代史	1
琉球文学発想論	1
琉球の自然と風物	1
沖縄に君臨した平家	1
沖縄風土記全集　第2・3・5巻	3

寄贈の部

書名	部数	寄贈者
琉球新報縮刷版	41	名渡山愛拡
那覇市統計書　1968	1	那覇市役所
沖縄民俗同好会報　10	1	沖縄民俗同好会
琉歌集	3	琉球文学方言研究
八重山民謡集	1	新本米
北海道美術館所蔵品目録	1	北海道立美術館
郷土	1	沖縄大学学生文化研会
豊高郷土史第2号	2	豊見城高校郷土研究クラブ
沖縄県史 15, 19	2	沖縄県史編集所
日本のふるさと—琉球—	1	与世里盛春
和漢洋書増加目録	1	琉球大学附属図書館
読谷村誌	1	読谷村役所

書名	部数	寄贈者
太宰府天満宮史料　巻5	1	太宰府天満宮
岡山民俗　83	1	岡山民俗学会
那覇市勢要覧	1	那覇市役所
紀州和歌山と琉球（沖縄との関係	1	内畑弘
MUSEUM総目録1～200号	1	東京国立博物館
ひめゆりの国	1	石野径一郎
常滑のやきもの	1	石川県美術館
浮世絵名作展	1	〃
三重県方言第24号	1	三重県方言学会
鳥羽、志摩漁撈調査報告書	1	倉田正邦
花と鳥	1	山種美術館
近代日本画の巨匠　他2	3	〃

書名	部数	寄贈者
丹波－国史と民俗－	1	丹波民俗学会
沖永良部島民俗誌	1	沢田四郎作
民俗資料緊急調査報告	1	保仙純剛
版画沖縄	1	儀間比呂志
沖縄の安国山樹華木之記碑の研究	1	平田栄三郎
琉球年代記	1	山田政忠
日本歴史大辞典9み～わ	1	河出書房
日本陶磁総覧	1	小山富士夫
唐宋の青磁	1	〃
天目	1	〃
徳之島採集手帖 №7・8	2	徳之島郷土研究会
民俗採訪学	1	井之口章次
米子の歴史	1	米子市教育委員会
福市遺跡	1	〃
近畿民俗 №48	1	沢田四郎作
沖縄の文化財	1	国仲基夫
沖縄救済論集	1	金城唯仁
葛飾北斎展	1	北海道立美術館
MUSEUM	9	東京国立博物館
第16回全国博物館大会報告書	1	日本博物館協会
THE JAPAN. EXPEDITION	1	スミソニアン博物館
日本の舞踊衣装の構成	1	高橋春子
全国科学博物館施設一覧	1	国立科学博物館
北海道立美術館年報	1	北海道美術館
歴史の訓え	1	稲嶺一郎
十年のあゆみ	1	琉球電信電話公社
博物館要覧1968他3	4	外間正幸
博物館研究	2	日本博物館協会
DIRECTORY OF ASIN. PACIFIC MUSEUMS	3	BISPHOP MUSEUM
民俗文化	4	滋賀民俗学会

書名	部数	寄贈者
あるく、みる、きく	4	近畿日本ツーリスト
図書館年報 1968	1	琉球大学附属図書館
美術館だより	2	和歌山県立美術館
湖城	1	滋賀県立琵琶湖文化館
近江の消像画	1	〃
日田市博物館報	1	日田市立博物館
日田文化	1	〃
MOUSEION	1	立教大学
岡山県総合文化センター館報	3	岡山県総合文化センター
群馬県立博物館報	2	群馬県立博物館
徳島県博物館の姿	1	徳島県立博物館
神奈川県立博物館 他2	3	神奈川県立博物館
石橋美術館々報	1	石橋美術館
釧路市立博物館概要	1	釧路市立博物館
京急油壺マリンパーク水族館年報 1968	1	京急油壺マリンパーク
神戸市立森林植物園年報 1968	1	神戸市立森林植物園
北海道	1	世界文化社
英訳琉歌集	1	平良文太郎
国立歴史博物館々刊他15	16	中華民国国立博物館
守礼の光	10	米国民政府
今日の琉球	10	〃
中世の障屏画（目録）	1	京都国立博物館
横須賀市博物館研究報告	3	横須賀市博物館
薩摩の田の神	1	三宅忠一
東京国立博物館紀要第4号	1	東京国立博物館
オキナワグラフ	10	オキナワグラフ社
第2回学芸員研究集会報告	1	日本博物館協会

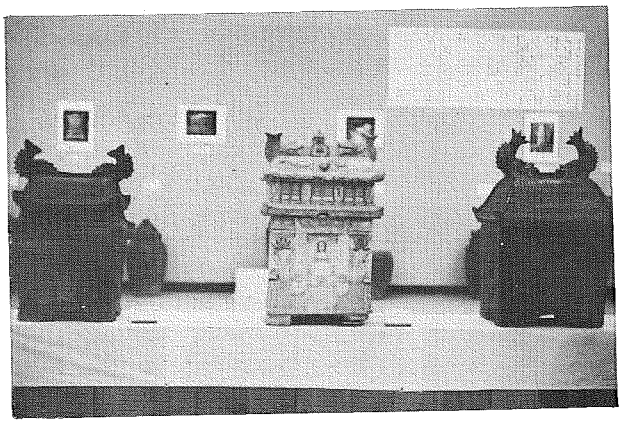
月別消費電力量及び水道使用量

月	電　気　KWH	水　道　M³
1	6,450	20
2	5,600	20
3	5,150	20
4	5,860	20
5	5,730	20
6	11,840	20
7	14,201	51
8	15,670	51
9	16,990	55
10	13,150	54
11	9,930	25
12	78,100	21

博物館主催行事について

当館所蔵厨子甕展

期間：１９６９年3月12日～4月27日
場所：臨時陳列室



展示品の一部

厨子甕とは、死者の骨を洗骨して収め、墓内に安置する甕である。古来沖縄では祖先の霊魂を崇拝する念が強く、遺骨を大切にする風習があった。そのために、立派な骨甕が使用されたのであった。

厨子甕には、石製と陶製がある。石製厨子は年代的により古く、閃緑岩製はおおかた王家において使用され、地方では石灰岩が使用された。

陶製の厨子は、形や釉薬が多種多様である。発生的には丸型の甕が古く、御殿をかたどったウドゥン厨子は１８世紀ごろからさかんに作られだしている。初期のころは釉薬もなく、素焼きであるが、時代が下るにつれて装飾が多くなり、色彩も豊かになっている。丸型にも何の装飾もない質素なものから、蓮華や龍の紋様を全面に施した手のこんだのもある。

厨子甕は、民俗学上あるいは陶芸史上においてもきわめて貴重な資料である。時代の推移とともに、このような風習も改められ、現在では用いられることも少なくなっている。したがって立派な厨子甕を作ることも少なく、今回の展示は厨子甕の変遷を知る上で、また陶芸史にもふれることとして喜ばれた。

これらの厨子甕は、那覇市の都市計画で撤去した墓からの寄贈が主である。展示室には、浦添ようどれ石棺の写真１１点をかざった。なお、年代的に古いのは石厨子の崇禎９年(１６３６年)のもので、新しいのは昭和１０年ごろのものである

出　品　目　録

○ 石　厨　子　１６３６年　首里崎山の御拝領墓より、凝灰岩
○ 石　厨　子　１６８８年　那覇市銘苅の御拝拝領墓より、石灰岩
○ 石　厨　子　年代不詳　石灰岩
○ 石　厨　子　年代不詳　石灰岩
○ 素　焼　壺　年代不詳　宮古から
○ 素　焼　壺　年代不詳　大宜味村から
○ ぱなり焼壺　年代不詳　八重山から
○ ぱなり焼壺　年代不詳　八重山から
○ 壺型素焼厨子甕　18世紀
○ 〃　18世紀
○ 〃　1819年
○ 〃　1866年
○ 〃　19世紀
○ 素焼御殿型厨子甕　1776年
○ 〃　1776年
○ 〃　18世紀中期
○ 素焼御殿型厨子甕　19世紀初期
○ 〃　19世紀中期
○ 〃　1840年
○ 上焼御殿型厨子甕　19世紀初期
○ 〃　19世紀初期
○ 〃　1846年
○ 〃　1856年
○ 〃　1867年
○ 〃　1868年
○ 〃　19世紀中期
○ 〃　19世紀中期
○ 〃　1897年
○ 〃　1928年
○ 〃　1935年
○ 〃（子供用）1935年
○ 彩色石厨子　19世紀中期

※　年代は厨子かめ内部に書かれている洗骨の年月日による。

当館所蔵拓本展

期間：1969年5月10日～7月6日
場所：臨時陳列室



真珠湊碑文

石造建物の多い沖縄は、石碑もかなりの数を有していた。ところが、戦争の破壊によってその多くを失い、かろうじて「崇元寺下馬碑」(二つのうち一つ)や「玉陵碑」などの少数の石碑が戦禍をまぬかれたにすぎない。

当館では、これら石碑の戦前の拓本を展示することにより、失われたものをあらためて見る機会をつくる意味あいで、2ヶ月の長期展示を行なった。

沖縄最古の石碑といわれる「安国山樹華木之碑」をはじめ、現存の「玉陵碑」や「崇元寺下馬碑」、ひらがなの美しい文学の「真珠湊碑」、新しいのでは宮古の「ドイツ皇帝博愛記念碑」の22点を展示した。

その他、浦添ようどれの英祖王陵内の石棺浮彫もかざり、一般の参観に供した。

出品目録

○安国山樹華木之碑　宣徳2年(1427年)　沖縄最古の石碑といわれ、首里園比屋武御嶽の裏にあった。破損しているのを当館に保存中

○円覚禅寺記　弘治10年(1597年)　現存しない。残欠は当館に保存中

○玉陵碑　弘治14年(1501年)　玉御殿の墓庭に現存特別重要文化財

○尚真公観察　弘治14年(1501年)

○真珠湊碑文　嘉靖元年(1522年)。首里から真玉橋へ至る道路及び真玉橋架橋の由縁を書いている。守礼之門近くにあったが現存しない。

○国王頌徳碑　嘉靖元年(1522年)　守礼之門近くにあった。残欠は当館に保存中

○上里墓之銘　嘉靖4年(1525年)　識名の上里墓の屋根にある。

○崇元寺下馬碑　嘉靖6年(1527年)　特別重要文化財

○ようどれの碑文　万暦48年(1620年)　浦添ようどれ墓庭の碑

○極楽山之碑文(裏)　万暦48年(1620年)　浦添村にあったが現存しない。表には琉球文、裏には漢文が書かれていた。

○本覚山壊文　天啓4年(1624年)　首里山川の西の玉御殿にある。

○琉球新建儒学碑文　康熙58年(1719年)　戦災で破損し、残欠は当館にある。

○総官野国由来記　乾隆16年(1751年)

○円覚寺に題す　金魁書　金魁は1756年尚穆王の冊封正使として来琉した。

○蔡氏の墓碑文　道光10年(1830年)

○源遠流長　道光9年(1838年)　首里城龍樋泉近くにあったが現存しない。これを書いた林鴻年は尚育王の冊封正使。

○鄭元偉(湖城親方)扁額「徳高」の跋　嘉永5年(1852年)薩摩商人の依頼により揮毫した扁額で、1968年9月太宰府天満宮から寄贈され、当館ロビーに展示。

○霊脈流芬　同治5年(1866年)　作者の趙新、干光甲は尚泰王の冊封使。残欠は当館に保存中。「源遠流長」や徐葆光の「中山第一」と同様、首里城龍樋泉近くにあった。

○ドイツ皇帝博愛記念碑(表)　明治9年(1876年)。宮古平良市にある。暴風で難破したドイツ商船を救助したのを記念してドイツ皇帝ウイルヘルム一世が建てさせた。表の上方には独文、下には漢文がある。史跡。

○同(裏)　漢文のみ

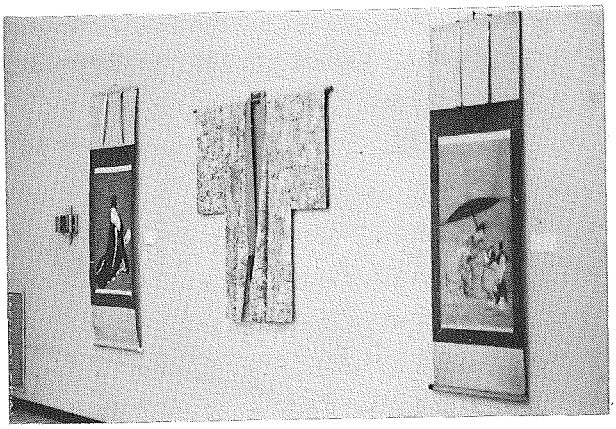
○琉球館跡　鹿児島にある元琉球館の跡を表示したもの。

○浦添ようどれ英祖王陵内の石棺浮彫　製作年代不詳

楽　童　子　展

――― 当館所蔵資料による ―――

期間：１９６９年７月９日～７月２７日
場所：臨時陳列場



楽童子の絵と衣裳

楽童子とは首里城下の上級士族の子弟の中からえらばれ、舞楽をもって王府に仕えた美目秀麗の少年達であった。彼等は舞楽のほか書や詩もよくし、きわめて高い教養を身につけていた。

彼等はまた琉球王府から慶賀使あるいは謝恩使と呼ばれる琉球の使節団が江戸に派遣される際は、それに随行して、徳川将軍の前でも琉球の舞楽を演じたものである。当時の琉球の使節団一行の行列を描いた絵の一つに楽童子について次のように記述したのが残っている。

「これは大かたは美少年なり、１４才より１６才まで唐織のかぎりなき美服を着す。すべて琉球高貴の若殿なり、雲上の席にて座楽をつとむ、わけて音律にくはし、皆能書にして、かたわら詩歌をよくす」。と

このような楽童子はまたよく絵の素材としてとりあげられ、当館にも楽童子の描かれた巻物や軸物数点が所蔵されている。またこれらの絵のほか彼等自身の揮毫による書跡、あるいは着用したと考えられる紅型の衣裳など１０数点も保存されている。これだけで楽童子というものの全容を浮彫にするには必ずしも充分な資料とはいえないが、一応全関係資料を網羅して、あらゆる面から楽童子というものはどういうものであったかみてもらおうと企画されたのがこの展覧会であった。

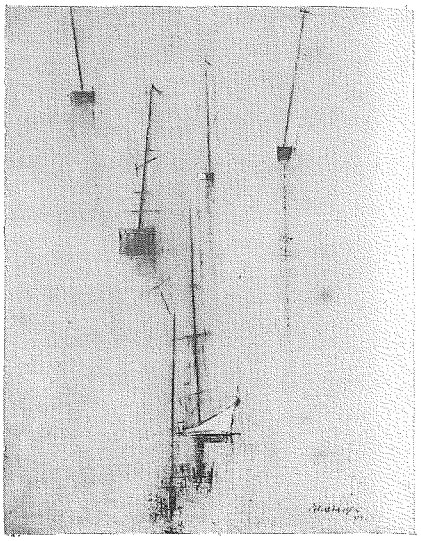
この特別展に陳列された資料は上記の当館所蔵資料のほか、江戸上りの際楽童子等が使用した楽器類（名古屋徳川美術館所蔵）の写真も１０数点陳列し、鑑賞の一助とした。

出　品　目　録

1. 楽童子の図、政演筆
2. 琉球人行列図
3. 楽童子とその従者之図、作者不詳
4. 琉球人舞楽絵巻
5. 楽童子の衣裳(紅型)
6. 楽童子毛経藩書(２幅)
7. 木版画、琉球人行列図
8. 木版画琉球人行列図
9. 中山楽童子、毛徳昌書
10. 楽童子、通福書
11. 楽童子、幸地里之子馬文英書(３幅)
12. 魏学賢書(４幅)
13. 琉球古楽器の写真18葉(これは寛政10年の江戸上りの際に使用された琉球楽器の写真で、現物は当時江戸上りの帰途尾洲候の面前で演奏し、のち記念として一括献上したものを現在名古屋の徳川美術館に保存されている。)

安谷屋正義遺作展

期間：1969年7月29日～8月17日
場所：臨時陳列室



航　跡（F30号）　1960年作

安谷屋正義氏は、生前琉球大学美術工芸科教授として郷土の美術教育面で活躍するほか、中央画壇では春陽会々員として、また個展など開催し多くの作品を発表、ギリギリにはりつめた知性と豊かな感性を反映させたその作風は各方面から注目をあび、春陽会賞受賞、朝日ジャーナル表紙に2度も掲載されるなど郷土画壇に大きな刺激を与えた。また郷土にあっては、「沖展」運営委員、創斗会々員、国際美術連盟会長などのほか、文化行政面では文化財保護委員、美術館建設委員等の要職にあって活躍、そのすぐれた識見と才能をもって郷土の教育・文化の向上に多くの業績を残した画家であった。

この遺作展は、このように同氏が沖縄画壇に残した大きな足跡を今一度ふり返り、その偉業を偲ぶとともに、後進を激励する意味で計画されたものであった。出品された作品は総計35点、遺族に残された数十点の中から、最もピークにあった頃の作品を中心に選定されたものである。

出品作中には第34回春陽会で春陽会賞を受賞した作品のほか、春陽会選抜新人展に出品された数点も展示され多くの反響を呼んだ。

遺作の中には油絵のほかに水彩で描かれた1,000余のエスキースがあるが、今回は会場のスペースの都合で発表できなかった。

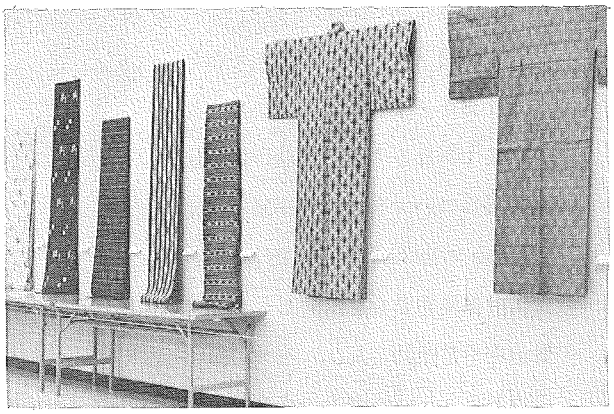
なお、この遺作展開催にあたって準備委員として当館から依嘱された安次嶺金正氏、安次富長昭氏、星雅彦氏、神山泰治氏、名渡山愛拡氏、翁長自修氏、城間喜宏氏、高江洲盛一氏、上原浩氏9氏の物心両面の協力が当館に寄せられたことを特記しておきたい。

安谷屋正義画伯の画歴

1953年4月	第30回春陽展初入選。以後毎年連続出品し入選する。
1957年4月	第34回春陽会賞受賞。
1958年4月	春陽会準会員推挙　以後毎年連続出品。
同年6月	「抽象絵画の展開」展出品国立近代美術館。
同年11月	安井賞候補新人展出品　国立近代美術館。
1959年2月	春陽会選抜新人展出品　日本橋高島屋8階ホール。
1960年7月	第37回春陽展出品　作品「港」　朝日ジャーナル表紙に掲載される。
1961年	第38回　同　「街の灯」朝日ジャーナル表紙に掲載さる。
1960年7月～同年12月	米国ロックフェラー財団基金により、アメリカ・イギリス・フランス・イタリーの諸都市の美術を視察する。
1963年12月3日～同月7日	個展（第1回）於フォルム画廊。
1966年11月15日～19日	第二回個展　於フォルム画廊。
1967年2月14日	第一回沖縄タイムス芸術選賞大賞授与さる。
1967年7月29日	急逝

琉　球　染　織　展

期間：1969年9月2日～9月7日
場所：臨時陳列室



展示品の一部

琉球の染織品は、琉球王朝時代の特異な歴史的背景のもとにその息吹きをみせ今日まで発展してきた。染としての紅型は京友禅の系統を組むといわれ、また読谷山花織は南方的要素をとどめていると考えられてきた。

地域的にも織物に特色がみられ、旧藩時代には那覇・首里の町方を中心に手縞・絣があり、地方からの上納布として久米島紬・八重山上布・宮古上布がみられ、また一般庶民の日常衣としての芭蕉布等の発達をみた。

繊維は絹・木綿・芭蕉を主とし、亜熱帯の特色を生かした苧麻や竜舌蘭の繊維の利用もみられる。

染料には赤色に生臙脂（古くは中国より輸入）、朱・洋紅（主として紅型を染めるに使用される）、紅花。黄色は福木、ブリシギー（八重山アオキ）、クルボー（ナカハラ黒木）。褐色はクール（ソメモノイモ）、ヤマムム（楊梅）、ティカチ（ホソバシャリンバイ）、グール（沖縄サルトリイバラ）等が使用された。

今回の展示会は織物研究会（代表者　大城清助氏）との供催によるもので新・旧の染織品を一堂に集めて供覧し、染織技術の向上、発展を期す目的で行なわれ、多くの方々の賛同を得た。

また展示会の初日には日本女子美術大学教授柳悦孝氏の「沖縄の工芸の特質について」の講演会が行なわれた。

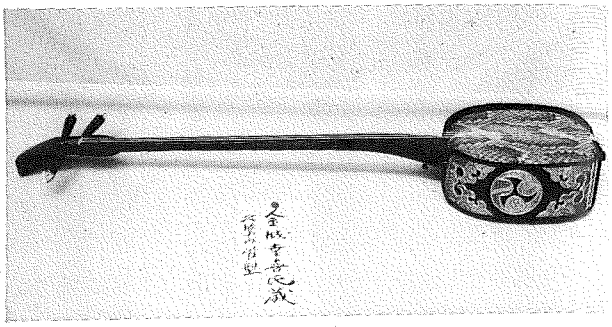
出　品　目　録

麻（クジリゴーシ）	博物館所蔵	ムルドゥツチリー	大城広四郎作
白地木綿絣	〃	紬（蘇枋染め）	大城志津子作
手縞胴衣	〃	紬（花合せ）	〃
木綿絣つぎはぎ	〃	黒地手縞	桃原　厚助作
木綿浅地	〃	福木染め絣着尺	〃
朱絣	〃	帯地（花織り）	宮平　初子作
八重山上布	〃	帯地（ロートン織り）	〃
手縞打かけ	喜久山添采氏蔵	平絹（藍染め）	大城　清助作
芭蕉布（ニーガシー）	〃	紬	〃
芭蕉布	〃	ククヌチ・ムチリー	大城　誠光作
麻苧（白絣）	〃	木綿（藍染め）	〃
紺地芭蕉布	〃	紅型	名渡山愛拡作
木綿（白絣）	〃	紅型	渡嘉敷貞子作
朱綾桐板	〃	紅型	屋宜　元六作
白絣桐板	〃	紅型	城間　栄喜作

指　定　文　化　財　展

文化財保護強調週間行事

期　間　：　1969年11月1日～11月7日
場　所　：　平常陳列室・ロビー



重文　三味線「久葉の骨型」（金城幸喜氏蔵）

文化財保護強調週間行事として毎年11月1日から「文化の日」をはさんで7日まで行なうもので前回の琉球伝統工芸展についで当館では3回目の催しである。今回からは共催で行ない琉球文化財保護委員会が指定した文化財の展示を平常陳列室及びロビーにおいて平素見られない特別重要文化財、重要文化財の当館所蔵品や民間所蔵品を一堂に集め供覧出来るようにした。

また週間中、講堂では琉球文化財保護委員会所蔵の映画「御冠船踊」、組踊「執心鐘入」、「花売りの縁」、「女物狂い」、「銘苅子」、当館所蔵の「琉球の民芸」、「琉球の風物」が上映され、組踊りの実演も行なわれた。



重文　螺鈿雲龍文椀（博物館所蔵）

出　品　目　録

名　称	種　別	所有者名（敬称略）
木彫円覚寺白象並びに趣意書木札	特別重要文化財	博物館
世持橋勾欄羽目	〃	〃
玉陵石彫獅子	〃	〃
自了筆（白沢之図）	重要文化財	米須　清嘉
三味線「翁長開鐘」	〃	野原　昌彦
三味線「志多伯開鐘」	特別重要文化財	金城　紀光
三味線「湧川開鐘」	〃	高宮城弘陽
旧首里城正殿前梵鐘	〃	博物館
聞得大君御殿雲竜黄金簪	重要文化財	〃
黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	〃	〃
黒塗堆錦山水絵大文庫	〃	〃
黒塗螺鈿雲竜文内金箔蓋付椀	〃	〃
三味線「江戸与那」	〃	〃
〃「南風原型」	〃	久田　友栄
〃「知念大工型」	〃	奥間　盛正

名　称	種　別	所有者名（敬称略）
三味線「久場春殿型」	重要文化財	新崎　盛亀
〃「久場春殿型」	〃	伊波　義雄
〃「南風原型」	〃	金城　幸輝
〃「久葉の骨型」	〃	〃
〃「与那型」	重要文化財	久保田清栄
田名文書	特別重要文化財	田名　真章
評定所格護定本おもろさうし	〃	博物館
評定所格護定本混効験集	〃	〃
評定所格護定本中山世鑑	重要文化財	〃
評定所格護定本中山世譜	〃	〃
宮古島下地の首里大屋子への辞令書	辞令書　〃	〃
屋嘉比朝寄の作「工工四」	〃	琉大図書館
蔡温の書	〃	長田　紀秀
程順則の書	〃	大嶺　薫

職員の活動状況

- １９６９年１月１９日　南部・中部・北部の屋根獅子調査（大城主事）
- １月２２日～２７日　久米島における資料購入及び調査（上江洲主事）
- ４月　５日　与那城照間の調査及び資料購入（大城、上江洲主事）
- ５月１２日～１６日　久米島で「サバ焼甕、南蛮甕」その他の購入（上江洲、玉城主事）
- ５月２２日～６月１日　全国民芸大会（岐阜県飛弾高山市）へ出席（外間主事）
- ８月２３日～９月１日　台北中華学術院にて第２回国際学術会議に出席（外間主事）
- １０月８日～10月29日　宮古、八重山の民俗資料調査（上江洲主事）
- １２月25日～70年1月7日　「辺土宇佐浜遺跡」の発掘調査に参加（玉城主事）

（案　　内）

名　　称　　琉球政府立博物館

所 在 地　　沖縄那覇市首里大中町１－１（電話：２－２２４３）

開　館　日

日・火・水・木・金・土

午前９時～午後５時

（但し、入場券の発売は午後４時半まで）

休　館　日

毎月曜日・公休日その他陳列替等による

臨時休館日

入　館　料

大　　人……１０仙

学　　生（大学生）……５仙

児童生徒（高校及び小中学生）……２仙

※　なお、２０名以上の団体見学は２割引とする。

研究及び調査報告

女性の二つの運搬用具
について……上江洲　均……(27)
戦後沖縄空手
古武術の推移……宮　城　篤　正……(41)
琉球の屋根獅子……大　城　精　徳……(60)
当館所蔵石器の紹介…玉　城　盛　勝……(77)

女性の二つの運搬用具について

——— ティルとガンシナ ———

上江洲　均

1. はじめに
2. 二つの運搬法の分布
3. ティルの名称と形態
4. ガンシナの名称の分布
5. おわりに

1. はじめに

女性のものを運ぶのに、肩に担う方法、引っぱる方法、腰にくくりつける、または両手で腰の横に固定する方法、じかに手に持ち、または抱く方法などいろいろあろうが、それらの中で最も比重の大きいのが輪を用いての頭上運搬と頭から紐で背負う方法である。

この二つの運搬法の分布はどうなっているか。おおかたの人々は、頭背負の運搬法が山と関係あると説明する。両手が自由に使えるから山での運搬や段畑にもよいのだという。

はたしてそうなのか。

また柳田先生は「……たとえば沖縄本島ではあの島の最も細くなっているあたりが一つの境で、これから南では荷物は頭の上に載せる(註1)」と石川、仲泊を結ぶ線が境界だと考えておられた。これも併せて確かめたいことの一つであった。

名護からや羽地伊差川(イザシチャ)や一里
真喜屋兼久(マギヤ)までや二里のつもり

と古歌にある羽地村伊差川は名護からは近距離にあるが、女性の物を運ぶ点において ——— 特にティル（ティール）を背負うのと背負わないのとの境界になっていると私はみる。かって名護や屋部の子どもたちは、ティル（ティール）を背負う女性を見れば例外なく「羽地マーマー」と呼んで珍しがったという。それと逆なことが、羽地村以北の村々にもあって、その辺では頭上運搬の代表者は糸満女性であると決めつけていたようである。

これの分布状態について調べていて、偶然にもう一つの分布状態がおもしろいことに気がついた。稲の脱穀用管がそれである。

マーニを二つ折りにして用いる宮古の例を別とすれば、沖縄中が二つに大別できる。呼称はクダ、クーダ、クーラ、フーラ、クラグー、クラグシ、フドース、つまり管系が多いが、芭蕉から糸をとる竹をイエービと呼ぶのと同じ呼び方をしている所もあり、波照間のスモーリなどは珍しい例である。形態の上でその一つは箸の長さほどの管を二本結んだもの、あとの一つは約4～5センチの管二本を藁しべを孔につめて連結したものである。前者は沖縄本島大宜味村塩屋、東村以南と伊平屋、伊是名、

久米島などの離島と奄美では与論（沖永良部もたぶんそうだろう）に分布し、後者は八重山全域、沖縄本島大宜味村字大宜味以北を占め、さらに奄美大島トカラ列島へと続いているようである。どちらが古いものか、あるいは進んだ方法かはわからない。運搬法とは直接の関係はないが、その分布状態がおもしろい。国頭のあの一帯は時々このような現象をおこすものらしい。

しかしここでこれらを論じつくすことは不可能で、私にできることは問題提起 ——— と言えば大げさになるが、身近かにある「もの」をかえりみる態度だけはこの際つちかいたいと願うものである。

なお、この調査の大半は友人の宜保栄治郎氏の協力によって行なわれたものであることを書き添えたい。

2. 二つの運搬方法の分布

頭上運搬は、日本の所々に残っているということである。沖縄では宮古、八重山がすべてこれで、沖縄本島では久志村の辺野古、名護、本部以南まで、離島の伊江島、久米島、粟国、渡名喜、慶良間列島も頭上運搬で、久志村の二見、大浦以北は頭と背をつかった運び方である。羽地、今帰仁は両者の接触地点ながら存在し、大宜味、国頭、東は頭背負のもっとも顕著なところで、伊平屋、伊是名へ連なり、与論、沖永良部を除いて徳之島、奄美大島へと連っているようである。与論、沖永良部は頭上運搬である。（第1図参照）

頭上に物を載せることをカンミユン（首里ではカミユン）といい、カンミ荷、カンミわざなどとつかうこともある。この運搬法をカベリ、イタダキ、ササグなどと呼んでいるそうである。カベリ系には広島・山口・香川・愛媛・熊本・大分・鹿児島の諸県に分布しているということであるが[註2]、沖縄もこの中に入るとみられる。

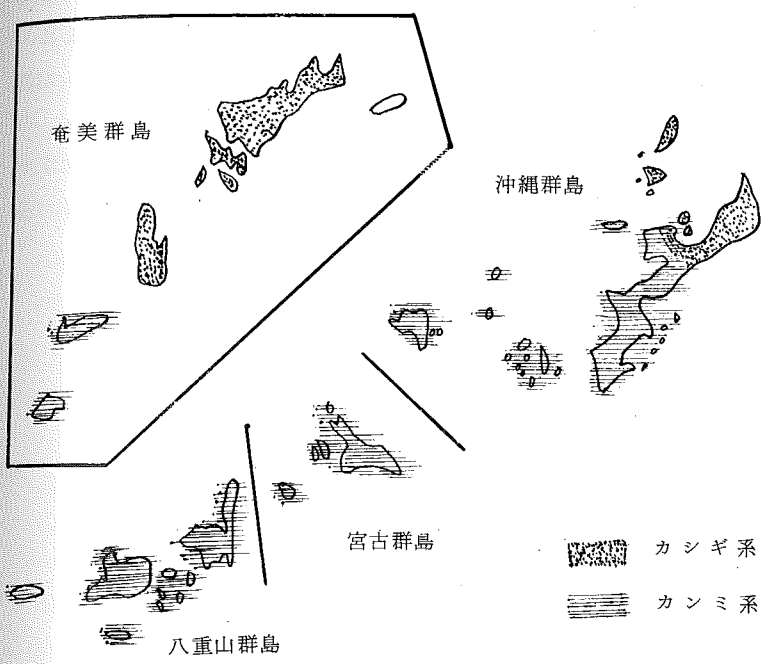
頭上から紐をたらして背に負うことをカサギ（ハサギ）ユン、カシギユンという。カサギは妊娠することをもそう呼び、カサギユン（〜する）、カサギトーン（〜している）、カサギンチュ（〜している人）等とつかう。荷を持つ方法からきた語であろう。孕むという語は今では人間には使わない。

「カンミる」は、牛が角でつくことをチチカンミユン（チチカミーン）、胃けいれんのことをチムグチがカンミラリン（カミラリン）という表現がある。また他人から物をいただくという表現にもつかう。頭の頂に物を載せること、転じておしいただくこと、あるいはそれに似た方法で下からつき上げることを云うことばであるらしい。以上のことからすれば、どうやらこの二つの運搬方法は「カミる（カンミる）」と「カサギる」で区別できそうである。カンミ、カサギというように連用中止法的使い方はないが、ここでは便宜上そういう方法で区別したい。

カンミとカサギの相違点は、カンミが輪を用いて頭上だけで物を持つのに対し、カサギは紐を用いて頭と背を用いて物を持つことである。両者とも頭頂より少し前の部分を用いる。カサギは、額で紐（カサギンナ（縄）またはハサギンナ）をささえると考えるのは誤りで、もう少し上の方であるらしい。久志村辺野古では、その籠のことをピチェハ・バーキという。元来辺野古はこの運搬法がなく、そのため額に持つと誤解してしまったようである。物の入っていない籠を持つばあいは、片方の肩に掛けるとか、両肩にカサギンナを掛け、先端を胸の方でささえるなどあるが、重いのは額の上でなければ力が入らないのであろう。

カサギは背もつかうので、カンミより多くの荷を持つことができ、国頭地方の女たちは百斤くらい

は持ったという。カンミは重荷のばあい人手がなければ持ちあげるのが困難なのに比べ、これはちょっとした台や石があれば自力で持ちあげられるという利点がある。



第１図　女性の運搬法分布図（その１）

図で示した通り、名護と羽地の間に運搬法の相違が生じているが、この調査の経過から述べることにする。国頭村の調査は昨年９月に行なっていたので、それ以外の金武・宜野座・久志・東・大宜味・羽地・今帰仁・屋部・本部・恩納・屋我地の調査を１１月・１２月そして正月休みの幾日かをこれについやした。

接触地点を知るために石川市東恩納から調査を始め、金武村の屋嘉・金武・宜野座村の惣慶・松田・久志村の久志・辺野古・二見・大浦・瀬嵩・汀間・嘉陽・天仁屋と北上した結果、辺野古までは完全に頭上であり、二見から以北はカサギになっている。辺野古と二見の間の山が大きな差異を生ぜしめる結果となったのだろうか。

西側はどうなっているかを知るべく、こんどは恩納から調査をはじめ、同村の名嘉真、名護町喜瀬・許田・数久田・世富慶・城・屋部村屋部・本部町崎本部・上本部謝花・具志堅と北上してみた。その結果、最後の具志堅だけはカンミとカサギが併存し、他はすべてカンミの頭上運搬であることがわかった。段畑で有名な名護の数久田・世富慶においてさえ伝統的な運搬法は頭上だったのである。あえてこれを強調したい理由は、これまでカサギの運搬法がすべて山と関係づけて説明されていたからである。全く山岳と無関係とは言いきれないが ―― というのは、山の多い国頭地方に行なわれた運搬法だけに、地勢との関係は当然問題にされる可能性があるからである。

しかしながら、調査をすすめるにつれて名護町で感じた山との関係のほとんど無縁に近いことを感じさせられた。今帰仁・羽地に行なわれている薪運搬が頭上のカンミだったことが、それを実証してくれると思う。山で便利なら頭に載せて持つはずなのに、逆に薪だけはカンミ運搬をするとは、どうしたことであろう。宮本馨太郎氏は「頭上運搬」を次のように述べている。「運搬物資は主として水・魚・薪などであるが、元来、頭上運搬は山坂道の運搬、とくに水など液体の運搬に適するといわれている。」(註3)

これも併せ考えるといっそう結果ははっきりすると思う。

今帰仁村親泊・玉城・呉我山・湧川・羽地村呉我・古我知・我部祖河・伊差川・田井等・振慶名・仲尾次・真喜屋・稲嶺・源河・屋我地村饒平名と調査が進むにつれ、今帰仁村と羽地村が西方の接触地点であることがわかってきた。（第２図参照）羽地村真喜屋以北は完全にカサギ地帯で、逆に名護町大北区の小字吉留（キチル）あたりまでは西方の接触地点である。しかし吉留がカサギになったのは、昭和10年代とのことで、これは分布図の中ではさほど問題にしたくはないが、運搬法の変遷過程の一つの資料にはなると思う。上本部村具志堅でも同様に、３０～４０年前まではカンミが多かったといい、今帰仁・羽地の幾箇所かでそれが聞けた。前にも述べたとおり、これらの接触地点では、いまだに薪や草の運搬はもっぱらガンシナを用いての頭上運搬である。（久志村嘉陽でも数十年前までは、薪は頭上運搬だったといわれ、なお調査の必要がある。）



第２図　女性の運搬法分布図（その２）

しかし、真喜屋以北及び屋我地村全域、それに伊是名・伊平屋ではガンシナの名称さえ存在しないくらいである。ただ、物とは分離して名称だけが入っている例はある。やはりガンシナと発音するが、名護や羽地の所々で言っているガンサナの方が、物と共に用いられただろう土着性を感じるのである。

ところで、そういう地方――――カサギ系の地方でも、漁婦は魚をたらいに入れて運ぶ関係上、頭上に物を敷いて運ぶことがまま行なわれているようである。ここではそういうごく少数の例は除くことにする。というのは、名護町でカサギ運搬があるというので調べてみたところ、それが久志村や東村から嫁に来た婦人であったり、戦後新たにやり出したなどで、伝統的なものではなかったのである。辺野古でも２～３そういう現象のあることを聞いたし、久志村二見などは首里那覇からの寄留民だと

言われており、本来はカンミ運搬だったのが、いつの間にかカサギ圏に入ったと考えられる。したがって本来の分岐点は、まだ北の方にあったはずである。今帰仁や羽地にも同じことが言えるのではなかろうか。

カサギ運搬が、頭上運搬から背負運搬に移る過渡形式であるとするならば(註4)、カサギはカンミより進んだ方法だと言うことができようし、静かに勢力圏を広げて行くこともうなずけるように思う。してみると。今帰仁、羽地の例は完全に移りきっていない状態にあると言えるのではなかろうか。

3. ティル（ティール）の名称と形態

竹籠の種類を大別して、だいたい4つあげることができると思う。バーキ（バキ）、ソーキ、ハラ（ハーラ）、ティール（ティル）がそれであるが、沖縄語辞典からこれらの語意をひろってみる。

バ　ー　キ――――底が四角で、底を中心に丸く竹であみあげたざる。

ソ　ー　キ――――竹をたてよこに編み、回りを縮めた丸いざる。底が丸い。

ハ　ー　ラ――――芭蕉糸をつむいで入れるのに用いる竹であんだかご。

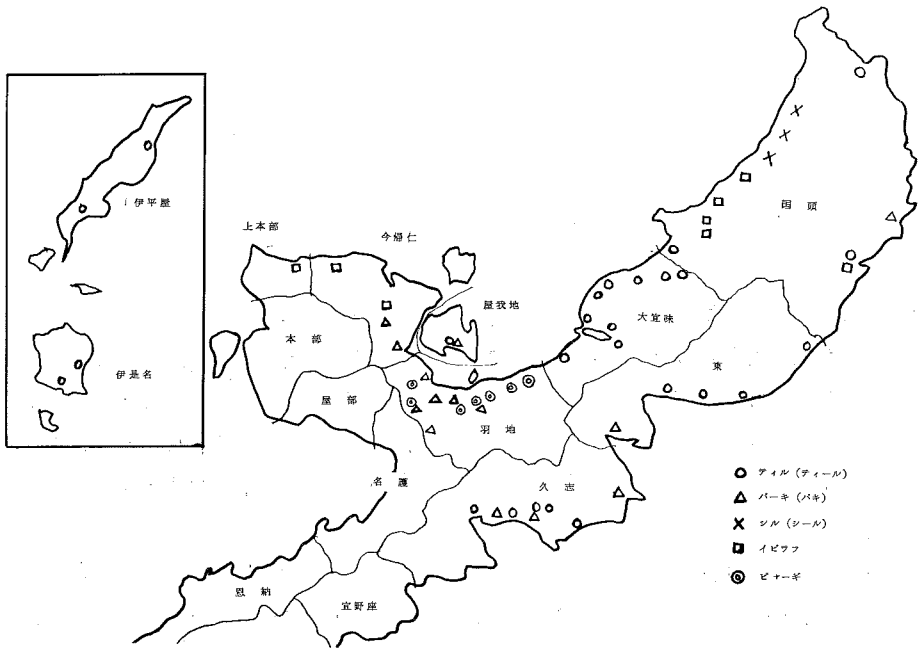
ティール――――手かご、手にさげて持つかご。または手のついたざる。

ハーラは、芭蕉糸を入れるウーバーラー、鶏を飼育する目の大きいミーバーラーである。ここで顕著な相違点を持つのはバーキとソーキで、形態的にティールはバーキに近いと思う。バーキは芋洗いの粗いものから、米入れの細かいものまである。また大小さまざまで、変化に富んでいる。ソーキは野菜洗いなどによく用いられているが、ミーゾーキー、手ゾーキー、または下げゾーキーなど名称の上ではソーキの中に入る。

沖縄全体として、竹製品をながめてみると、種類の面でも手器用さの面でも沖縄本島は先島にまさっている。竹製品の少ない先島は、保管用・運搬用としてかやをクーズ（とうづるもどき）で編んだ入れ物を用いていて、これがよく発達している。これを石垣市川平ではガイジバラ、竹富島ではガイジル、波照間ではガイズ、与那国ではガディ、宮古では一般にマグ、ただ口縁部が小さくくびれ蓋のついたものをツヅカサと呼んで区別している。保管用、運搬用の他に芭蕉糸入れに作って、ティーツカサと呼んでいる例（竹富）もある。八重山は、与那国や小浜島など竹が豊富であるが、その竹で床にし、垣根にしている例が多いわりには、竹細工は発達しなかったものらしい。宮古は下地あたりで竹細工があったといわれるが、やはり八重山同様「かや」の恩恵が大きい。すすきをたたいて繩をつくり、マカヤを用いてマグやツヅカサを作る。そしてアダンの気根の繊維をよく利用し、わらじをつくり、繩をない、それで手あみをつくり、芋掘りや芋洗いに用いる。沖縄諸島が竹をよく用いたのに対し、先島はかやととうづるもどき、クバをよく用いてきた。とうづるもどき、クバだけでなく、黒つぐなども現在にいたるまでよく用いている。

マグは、沖縄諸島ではマーグとも呼んで利用されたようだが、竹製品をおさえるまでにはいたっていなかったらしく、蓋をつけたもので、女性がきれ地や下着入れとして嫁入の時、持って行った道具である。奄美地方のマグも沖縄本島よりはよく利用された形跡がある。マグは籠を意味することばであると思うが、八重山川平のガイジバラはかやのハーラ、竹富のガイジルはかやのティルと解釈することができそうに思う。（マグは、かや製のみとはかぎらず、竹製ののもあることが、北部や奄美の分布から察しられる。）

九州は日本でも竹細工の発達した所といわれるが、名称や形態の上での影響はあったにちがいない。たとえば、沖縄のミーゾーキーは箕とソーキをいっしょにしてできたような名称であるが、これを鹿児島ではバラと呼んでいる(註5)。バラとは平たいかごであるという。してみると、伊計島でミーゾーキを呼んでいうテーバーラや国頭村安波・安田のムイバーラ、大宜味村謝名城のムイバラはこれに類似していると言えよう。これは、形態的に前にあげたソーキの条件とは多少相違があると私は考える。



第3図　背負用かごの名称分布図

背負用かごの名称分類表

名　　称	部　　落　　名
1. テ　ィ　ル（ティール）	奥、浜（国頭村）、田嘉里、謝名城、喜如嘉、大宜味、大兼久、塩屋、津波、田港、大保（大宜味村）、平良、川田、高江、慶佐次、宮城（東村）、二見、三原、大浦、瀬嵩、汀間、嘉陽（久志村）
2. バ　ー　キ（バキ）	安田（国頭村）、仲尾次、振ケ名、田井等、伊差川、我部祖河、呉我（羽地村）有銘（東村）、呉我山、湧川（今帰仁村）、瀬嵩、天仁屋、三原（久志村）
3. シ　　ル（シール）	宇嘉、辺野喜、謝敷（国頭村）
4. イ ビ ラ フ	与那、辺土名、奥間、比地、安波（国頭村）、具志堅（上本部村）、玉城、親泊（今帰仁村）
5. ピ ャ ー ギ	我部祖河、古我地、振ケ名、仲尾次、真喜屋、稲嶺、源河（羽地村）

九州の技術がどれほど入ったかは知ることはできないが、国頭地方では、与論のソーキは立派だということをよく聞く。ソーキにも粗いのと細かいのがあり、細かい方を一般にフブシゾーキというが、これをユンヌ（与論）と呼ぶ地方もあったそうである。

九州から台湾までのたとえばミーゾーキー（九州のバラ）が、形態上どれほどの差異があるかは知らないが、八重山の店頭で売られている台湾産のものは、われわれ素人には全く見分けがつかない。民具調査でうっかりするとひどい目に合わされる好例である。

沖縄の竹細工の中でウーバーラー（国頭地方ではウンゾーキ）が最も手のこんだものと云えよう。ティル（ティール）にも形態の上で発達した所とそうでない所があるが、まず名称からふれてみることにする。

ティル（ティール）は前述の通り、手かごである。奄美も含めた琉球一帯に用いられ、あるいは九州のテゴとも通じるものかもしれない。カサギ運搬の行なわれていない中南部や先島にも広くつかわれている語である。ティールは、これらの地方では小型の籠を呼ぶことがふつうで、広く海や野良仕事につかうが、これがかならずしも竹かごとはかぎらない。粟国では繩であんだ漁具運搬のものをアンディルというし、与那国でも石垣でのアンツクと称する弁当入れかごをアンディルという。さらに煮いも保管用のとうづるもどきで編んだ籠も、さらに小さな弁当かごも同様にイーディルと呼んでいる。「イー」は「飯（いい）」であろうと想像するが、イーを上げて呼ぶか下げて呼ぶかで二つのものを区別している。このほかとうづるもどきで作った円いかごをツヤンシルーと呼ぶのも腰に下げるのをコンキディルと呼ぶのもティル（ティール）に類する呼称であると考える。また、石垣市川平の主婦たちが海へ持つ背の低い、口縁に二本の把手のついたかご、これもとうづるもどきであるが、やはりティルであった。宮古のアンディー、アンディラも繩で編んだかごだが、ティルに類する語であろう。

しかし、私がここで述べたいのは、沖縄全般に行なわれているティル、あるいはティールのことではない。カサギ運搬をしている地方のカサギディルのことに焦点をあててながめてみたい。

カサギ運搬に使うかごの名称には、大別して５つあると思う。（第３図参照）

1. ティル（ティール）
2. バーキ（バキ）
3. シル（シール）
4. イビラフ
5. ピャーギ

このうち1.の例は、大宜味村全域・久志村や東村に分布している。（分類表参照）この中でもティルという呼び方とティールと長く引っぱる呼び方に分けられるが、これはバキとバーキのばあいもそうで、同系統なので分けないことにするが、参考までに書き添えるならば、大宜味一帯は短かく、久志村や東村のは引っぱる例が多い。

2.のバーキは、今帰仁村呉我山・湧川・羽地村呉我から仲尾次までの一帯に広く行なわれている。国頭村安田・東村有銘でもそうである。屋我地村饒平名はティルとバキが併用されているようである。

3.のシルは、国頭村謝敷・辺野喜・宇嘉一帯に用いられている語で、ティルの転訛であるように思う。これは久志村の大浦や瀬嵩・汀間一帯でナリディルと呼び、時にナレージルと訛るのからも察しられる。したがって、これはティルの中に入れてもさしつかえないと考える。竹富島のガイジル、与那国



① ティール（高45 口径37）奥

のツアンシルーがティルであると判断する根拠もそこにある。

4.のイビラフは、辺土名を中心とする一帯と、今帰仁村玉城以西の部落で呼ばれている。イビラフは奄美のイビラク、イビロクと同様で、奄美の側からすればどうやら海でつかう籠を言うらしい。(註6) 語源はわかりかねるが、宮古でビラフと呼んでいるかごの名称とは関係ないものか。（大宜味村喜如嘉では、野菜取りや海へ持つ小籠をイビラフという。）

5.のピャーギは、羽地村だけに分布しており、源河と大宜味村津波ははっきり分れている。これは後に述べる形態の面でも一つの境になっている。羽地は古くはピャーギを多く用いたと言われ、バーキになったのもそう古い話ではないらしい。ピャーギがバーキの古い形か、あるいは逆に訛ったものかとも考えられようが、とにかく全く無縁の語ではなさそうである。名護町や屋部村でピラギと呼んでいるのともまた大いに関係がありそうである。ただ、ピラギは背の低いもので、運搬法も形態的にもピャーギとは同一ではない。

ピラギをピラグと呼ぶ地方はないか、そしてつきつめていけばビラフと同系統になりはしないかと想像するが、確かではない。そしてピラギという語のもつ感じから、低めの（平たい）かごを連想し、バーキまでそれを及ぼすことはできないものかと考えたりするが、これも確かではない。

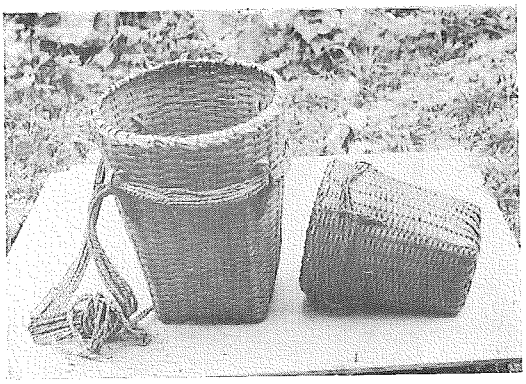
大宜味村の例をとってみれば、女性のカサギ運搬用はティル、男性用の背の低いかごをバーキと呼んで区別している。羽地村の一部地域にもピャーギとバーキを区別している傾向があるのからすると、元来、やはり何らかの区別があったことを示すものであろう。

それではここで形態についてふれてみたい。ティル、ティールの呼称は広く分布していることは前にも述べてきた。ここでも先と同様にカサギ運搬地帯を中心に述べることにする。石川以南のバーキは大小の差はあれ全体的に低く、口縁が大きく開いている。これは頭上運搬につごうよいせいもあってのことだろう。口縁部がしっかりしている点は見ての格好ばかりでなく、持ち上げる時、腰に抱く（クイジキーンという）時など使用の便利さも考えてのことだろう。佐敷村の小谷、新里はこういう形態を最も忠実に守ってしかも発展させた所である。この形態はそのまま中頭一帯でも行なっていることではある。宜野座村の惣慶・漢那はあの一帯の竹細工の本場であったようだが、中頭・島尻とは異なったものを多く作ったに違いない。

カサギ運搬用のかごは、①背の高さ、②胴まわり、③口縁部がきれいに編まれているか、あるいはそこに二つの把手があるかなどから考えて三つに分類することができる。その一つは「国頭系」である（写真1～5）。国頭村と大宜味村、東村がこれに該当すると思う。これはすらっと高く、線の形がはっきりしており、今帰仁村あたりではそれを「国頭バーキ」と呼んで、自分たちのイビラフとは区別している。東村では少し形は違うが、口縁部がきれいにあまれ、大宜味と共に国頭系とすること



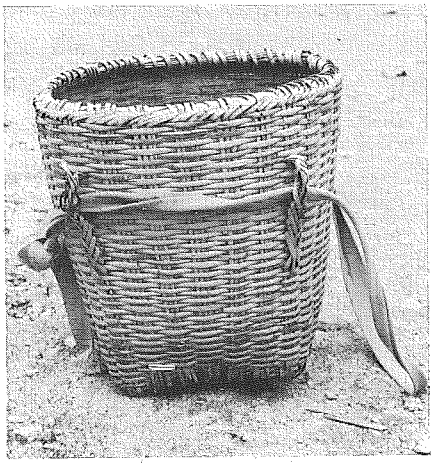
② ティールを持つ女たち（国頭村奥）



③ ティル（左）とクイジキ伊平屋より
（琉大民俗研究クラブ蔵）



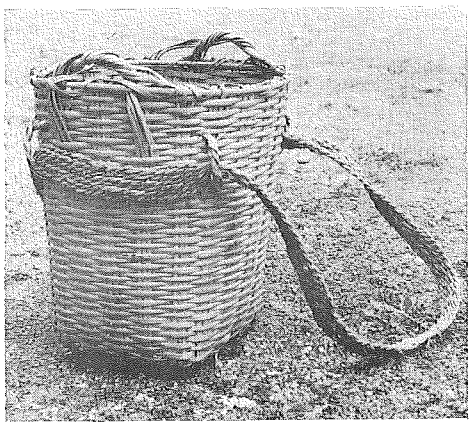
④ ティル 大宜味村塩屋



⑤ ティール（高46 口径44）東村平良



⑥ バーキ（高43 口径48）今帰仁村湧川



⑦ ピャーギ（高42口径39）羽地村源河より
（政府立博物館蔵）



⑧ バキ（高 42 口径 37 ）屋我地村餅平名



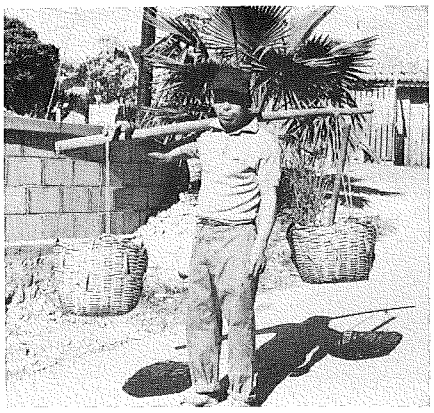
⑨　バーキ（高 4 4　口径 3 9 ）久志村瀬嵩



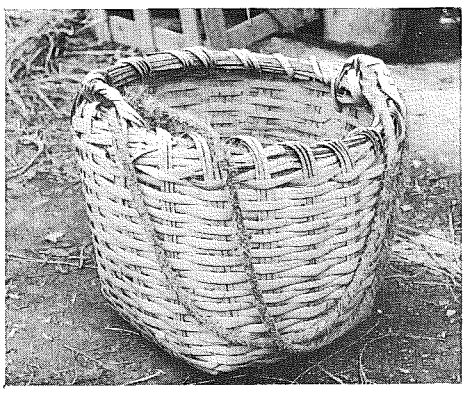
⑩　バーキ　恩納村名嘉真



⑪　バーキ　久志村嘉陽



⑫　バーキ　金武村金武



⑬　ピラギ（高 3 3　口径 4 0 ）屋部村屋部

ができると思う。また伊平屋島ののもこれに類している。

つぎは「今帰仁系である（写真６）。これは一見国頭系に似ているが、口縁部が高さに比べて広い。したがってまるっこい感じで、背負うための工夫は国頭系に劣るが、大きいので物を多く入れることができる。今帰仁村全域と上本部村具志堅・屋我地村運天原あたりに分布している。久米島はカンミ運搬であるが、ティールは紐をつけて片方の肩にかけるようになっている。今帰仁系よりひとまわり小さいが、形態的にはこれに極似している。

最後の一つは「羽地系」である（写真７～９）。これは羽地村全域と屋我地村・久志村に分布し、今帰仁村や大宜味村の村境を境界としてはっきり区別できる。これのいちじるしい特徴は、口縁部がうまく編まれておらず、しかも両手で持ち上げられるように口縁部に二つの把手があることである。

これと類似するものが他にもある。口縁部に二つ、あるいは四つの耳（把手）のついたもので、背は低く、紐をつけて片方の肩に担う。あるいは棒にかつぐものである（写真１０～１３）耳（把手）の二つついたものは女性用、四つついたものは耳ユーチャーと呼んで、紐を２本つけて棒で運ぶ男性用である。これらは金武・恩納・宜野座・久志・名護・羽地・大宜味・屋部・本部あたりまで分布している。これを名護・屋部ではピラギと呼び、他の地方ではバキ・バーキと呼んでいる。羽地・久志・大宜味以外はカンミ運搬で、これを頭上に載せて運ぶこともあるが、軽いものはすべて肩にかけている。この例も石川・読谷以南にはあまり見られない例である。口縁部につけた二つないし四つの把手は、底から伸びた竹の軸をうまくからませて作る。これは紐を結ぶという機能上の工夫からのものであろうが、これが羽地でのピャーギの縁については、もはや紐をかけることではなく、手で取って持ち上げ、近距離ならそのまま運べるし、背負わせてやるためのものでもある。縁のきれいに編まれている今帰仁系・国頭系では、特に把手をつける必要もなかったのであろう。

ここに述べた低いバーキ（バキ）は金武村や恩納村でよく発達しており、またよく利用されている。四つ手にしろ底からの心になる竹をあますことなく組み合わせたやり方はみごとである。同じ把手のあるものでも、国頭村でパイン入れに利用しているものは、縁をきれいに編み、手は別につけるやり方で、羽地以南の方法と異なっている。

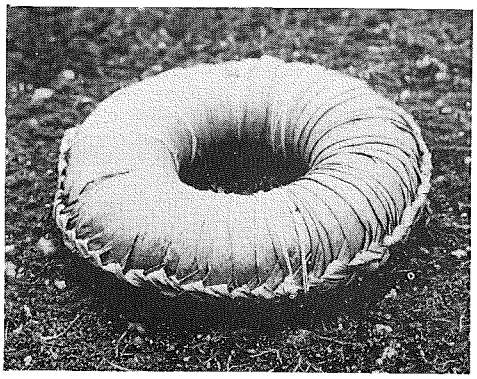
カサギ運搬用のティルの紐をかける耳は四つ胴部に竹でつけるが、大宜味村謝名城では、シュロ縄でかけている。これは紐をいためないための工夫であるらしい。紐は数本並べてつづったもので、これをカサギンナと呼び、馬鞍の腹帯と同様のつくり方であった。しかし今ではそれを用いている例は少なく、てごろなベルトに変っている。また補強のために底がもう一つついており、これだけはほとんどの型にも共通している。

竹はおおかた若竹であるが、大宜味村謝名城では元来、ヤンバル竹（琉球竹）を用いたという。その方が丈夫だというのである。（久志村嘉陽でも同様のティルを見ることができた。）

4. ガンシナの名称の分布

カンミ運搬になくてはならないのが、物を敷く輪である。これはガンシナ系とカブシ系、シチキ系に大別できると思う。（第４図参照）

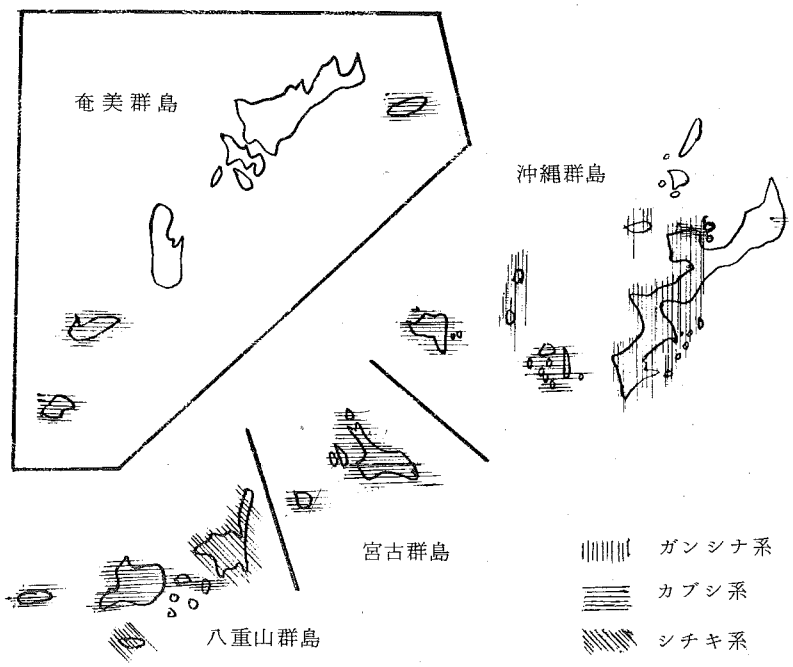
藁をまるめて作るが、麦わらを心にクバの葉でていねいに巻いたものやアダン葉で周囲を編んだものなどある。（写真１４）しかし、ごくていねいに作り、常備する人は几帳面な方で、その場で藁や



⑭　ガンシナ（粟国村）

草を曲げて作る例も少なくない。重箱などの類は、ふろしきやてぬぐいを曲げて載せることも行なわれている。要するに荷を安定させ、頭をいためないためのものから出発していることだけは確かである。形の上であまり地域差はないので、名称の分布を述べるが、今帰仁・羽地の接触地点までこれが見られ、羽地村真喜屋あたりから以北はこれがない。

沖縄は一円にガンシナで、ただ国頭村安波でハブシの名が聞けた。山から屋根ふき材料のフクを運搬する時だけ女性はこれを用いるのである。いわゆるカブシ系で、今帰仁親泊でハブサリ・宮古一帯はカウス、カブスであり、与那国のカブチ、小浜島でカプス、竹富島のカブシ、西表の西部一帯でもカブシ、慶良間でも同様で、久米島ではカブシリ（具志川）とカブシナ（仲里）といっている。これは与論・沖永良部でハーブシといい(註7)、喜界島のハブシリー、鹿児島のカンブシ、カンメブシへととびとびに連なっているようである。シチキは八重山に広く行なわれ、石垣市川平でシチキ、大浜ではスケ、石垣ではツケ・波照間ではスシキである。カブシ系がもっとも広い分布を占めている。



第４図　頭上運搬用輪の名称分布図

糸満の女性は百斤の魚も頭上で運んだという。小走りの体で歩き、両の手をふるのはよく知られている。これは重い荷を運ぶための一つの方法で、それを両の手をあげて荷をささえ、ゆっくり歩くと

なると、荷の重みにたえられなくなるものらしい。

鮮魚店というのが、どこにもある現在までも、魚売り行商の姿は見られるものである。毎朝、泊港北岸の魚市場から魚たらいを頭にのせて（カンミて）行く女の数は３０～４０名は下るまいと思う。彼女たちだけは、輪を布や藁できれいに結い、ぬらさぬためにポリエチレンで巻いて大切にしている。（写真１５）



⑮　頭上運搬（泊港にて）

5. おわりに

粟国の「神里真牛口説（ガイー　モウシー　グドゥチ）」という歌の中に「潮の干りばど海すがい、ウジンくしじきティルかさぎ」という一節がある。「ティルかさぎ」がどうも気になる。このティルは海ディルだろうか、「カサギ」は単に背に、あるいは肩にかけるぐらいの意味だろうか。この原稿を一応書きあげてから、久米島の仲原善秀先生に問合わせてみた。その結果、この歌の主語は「久米の若者」で、つまり男性なので、単に持つというぐらいの意味らしいということがわかった。そして、妊娠することを、前に述べた通り久米島でもカサギトーンといい、さらになかば揶揄の気持ちで「ムッチョン」ともいうことがわかった。「カサギ」と「モツ」は単に持つことの同義語であるらしい。人の背と腹では方角がちがうが、たとえば、子どもをおんぶすることをウファあるいはウーファというが、背のばあいだけでなく、ふところに抱くことまでもそう呼んでいる。もっとも背のばあいは「ヤマト・ウファ」、前は「フチュクル・ウファ」と呼んで区別している。

さらに後の歌に「きばし波路におりたりばウジン引ぬぢティルくひつぎ、一サデおろしば面白や」というのがあって、ここでは「ティルくひつぎ」になっている。くひつぎは「クイジキ」で、腰にくくりつけることである。中南部でティールグワーと呼ぶのを国頭方面ではクイジキと呼ぶのがふつうで、腰に下げることからきた名称のようである。アサンザニ ―― つまり細いへらを用いて大きい芋だけをえらんで掘ってクイジキに入れ、それを大ティルに移すということはよく行なわれたが、とくに段畑地帯に多かったようだ。

ティルの形態もパイン栽培の影響を受けて、紐を通す耳が三つに改良されたもの、大型化したところなどもある。しかし、カサギ系の地方で女性のこの籠への愛着は大きい。ふだん畑で使うのと、買い物などにつかうよそ行きとは別っこになっている。多少小型化し、よりこまかにできていて、これを大宜味村あたりではフンディルと呼んでいる。辺土名あたりでも、まだよく見かける風景である。先年、徳之島の北部へ行った時、一日調査を休んで田植えにかり出されたことがあったが、頼まれてやって来た村の女たちは例外なく皆ティルを持っていた。空っぽのティルを持ち、帰りも同じ空っぽ同様のティルを持って帰る。要するにこの人たちにはティルを持つことが習慣化しているのである。そこではたまに男性でもこのティルを持つことがある。

たいていの村か字にはティル作りを専業にしている人がいるものだが、自家製も少なくはない。羽地一帯は我部祖河へ注文するといい、伊差川一帯は自作も多く、大宜味村では喜如嘉や謝名城で専業

の人がいる。しかしこの辺にも専業ではないが、自給の分は充分に美しく作れる人を幾人かはいるものである。

ただ一つふしぎなのは、羽地村北端の源河と大宜味村の南端津波の間で名称と製法が分れていることである。たまたま訪れた家の女主人が津波の人であった。昔は津波から源河の米を求めてよくやって来たという。津波から嫁に来たのが多かったのもそのせいだろうというが、運搬具や名称を統一するまでにはいたっていなかったものらしい。

民具の研究は、広く他民族との比較まで及ぼすべきだろう。しかしわれわれにできることは、南は波照間までの沖縄内をくまなく調べることであるが、せめて奄美の島々も琉球文化圏内のものとしてぜひ含めたいものである。幸いに奄美は鹿児島の研究者たちの種々の調査で成果が出ている。民具によらず、民俗全般にわたっての調査を沖縄の方でも組織的に行なう必要がありそうである。

「琉球」という語の持つ概念がどのようなものか吟味したことはないが、せめて琉球弧にある島々のつながりだけは大切にしなければと思う。残念ながら、沖縄の研究者はややもすれば、辺戸岬と与論との境に一線を画しがちだし、鹿児島の方でも、２７度線を越えることをいかにもタブーのごとく思われるほど、奄美止まりになっている。

この小論は、しかしながら今述べた上に立ってのものではない。まだまだ不充分なもので、後日の研究をあいまちたい。

註１　柳田国男「村と学童」中の「棒の歴史」

註２　「民具入門」（宮本馨太郎）Ｐ１３６

註３　「民具入門」（宮本馨太郎）Ｐ１３７

註４　「民俗学辞典」（民俗学研究所論）Ｐ３０６

註５　「南九州の民具」（小野重朗）Ｐ２７

註６　「奄美諸島・種子島・屋久島民俗資料調査報告書」（鹿児島県明治百年記念事業事務局）Ｐ２４　Ｐ４９

註７　「南九州の民具」（小野重朗）Ｐ２４０

戦後沖縄空手古武術の推移

宮　城　篤　正

はじめに

戦後、間もない混乱した中で空地や掘っ建て小屋など道場というイメージには程遠いお粗末な場所で空手の稽古が細々と始められた。

アメリカの沖縄統治も一段落し、人々の生活もしだいに安定の方向に進み、少しずつ余裕が出てくると本格的な町道場を開設して空手の指導を始める人が増えていった。

あれから２５年、沖縄にも４０余の道場が出来、空手人口も増えたが、しかし空手界の統一はなく、各地に群雄割拠してますます細分化の様相を示しつつあった。その間に、沖縄で発達した空手は本土は勿論のこと、いまや世界の空手道として急激に広まり、今日ではむしろ、地元を凌ぐ勢いで全くお株を奪われたと見られ、あるいは、沖縄の空手は世界の空手から完全にとり残され本場の権威は失墜したと評する人々もいる。

しかし、乱立状態のままでは今後の空手普及、育成に支障をきたすものとして、沖縄空手の四派が話し合い、５７年に「沖縄空手道連盟」を結成したがその後の活動がうまくいかず停滞気味であった。そこで前組織を発展的解消して、６７年本場の空手道を推進しようという目的で各流派が大局的立場に立って再統一を図り「全沖縄空手道連盟」が結成された。その第１回目から去年の第３回目までの「空手、古武術演武大会」から筆者は演武者と観衆の息がピッタリ合っていて、本場沖縄の空手の意気盛んなところを遺憾なく発揮したとみている。

本土復帰も７２年と決まり、この辺で戦後の沖縄空手古武術の推移をながめてみることも意義深いものと思い、まとめることにした。他に筆者は琉球大学空手道研究会発行「空手道」（第４号）掲載「転換期に立つ今日の空手」の中でも古い時代から戦前に到るまでの空手の推移について若干ふれておいたので、併せて参考になれば幸甚に思う。

１９５５年以前

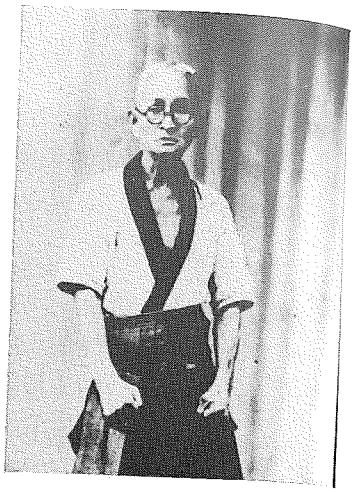
終戦後のどさくさの中にあって、まだ人々の生活も落着かない頃に生きのびた人たちの中の数人はただちに空手指導にのりだした。道場とはいうものの空地を整地したり、民家を借りたり、庭など稽古場として使用するなど道場のイメージとはかなりかけ離れたものであった。

終戦直後、空手を指導された人々をあげると、まず宮城長順氏が具志川で（その後、姫百合橋近くに移る）、比嘉佑直氏が与那原で（その後、壺屋に移る）、比嘉世幸氏が糸満で（その後、与儀に移る）、長嶺将真氏が現在牧志伊東肛門科の北側で（その後、美栄橋に移る）、知花朝信氏が最初儀保の民家から那覇市場の民家の庭で、そして１０区の安里クラブに移り、その後首里で指導、兼島信助氏が与那原で各々指導しておられた。

その当時の稽古の様子は上半身裸か、ＨＢＴのそでを短かく切ったものをつけて練習していたが、後にメリケン袋などで空手着が作られるようになった。

また、食糧難でもあったし、体力も衰えていることなどから稽古中、貧血、目まいなどで倒れる者もそう珍らしいことではなかった。そういった事情もあって当時は、激しい稽古は出来なかったようである。

演武会も現在のように都市集中したものではなく、各地を巡回して催している。一例をあげると、小林流は首里や那覇、知花、糸満などで開いているが、人心が落ち着かなかった関係もあり、当時、露天の巡回興行芝居や映画などの娯楽の方に人気が集中して誰一人として空手の演武会には興味関心を示さず、地方で行なう際には殆んど赤字が多かったという。そういう経済的理由もあって、それ以後、今日のように那覇中心に催すようになりまた、当時は演武会プログラムなど作ってないので、その記録も殆んど残っていない。



① 故喜屋武朝徳氏



② 故宮城長順氏

さて、戦争中多くの空手関係の人々が戦死をとげ、終戦後においても栄養不良などで死亡したりした。例えば、剛柔流の新里仁安氏は戦争中、金武の壕で直撃弾を受けて戦死、終戦後は、首里手の花城長茂氏が羽地で、喜屋武朝徳氏が石川で、城間真繁氏が首里汀良で、宮平政英氏が首里赤平で各々逝去され、更に、５３年１０月８日には沖縄空手界の逸材といわれた剛柔流の宮城長順氏が逝去されている。

戦中から戦後にかけて多くの空手人を失ったことは沖縄空手界にとっては大きな損失であったといわざるを得ない。その後、人々の生活も安定して来ると、各地に町道場が増え空手人口も多くなって来た反面、逆に流派の多様化を生みだす結果になった。

１９５６年

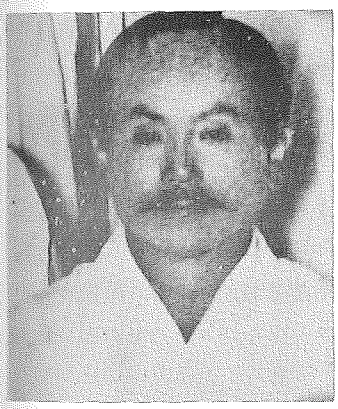
もうこの頃になると各地にかなり多くの道場が出来ており、お互い流派を名乗り群雄割拠の状態にあった。そこで、現状では本場沖縄の空手道を正しく普及発展させることは望めないとして、５月に那覇市松尾にある長嶺道場「興道館」において、小林流、剛柔流、上地流、松林流の４派に属する約１９の道場が参加して「沖縄空手道連盟」（以下「沖空連」と略す。）が結成され、初代会長に知花朝信氏が選任された。それ以後、沖空連としての活動が始まり、空手界も新しい局面を迎えることになった。



③　首里高校空手部（１９５６年３月１７日）

１９５７年

大正１１年に上京し、以来沖縄の空手を日本全国に広めた空手の船越義珍氏が４月２６日東京の自宅で逝去され、空手界をはじめ各方面から惜まれた。享年８８才。（注１）そこで、本土の空手界においては６月２２日国際スタジアムで盛大に「追悼空手道演武大会」を挙行し、その功績を偲んだ。船越氏は日本全国ひいては諸外国にまで空手を広めた空手界の大御所だけに演武大会もかってみられないほどの豪華版だったと当時の新聞は伝えている。（注２）



④　故船越義珍氏

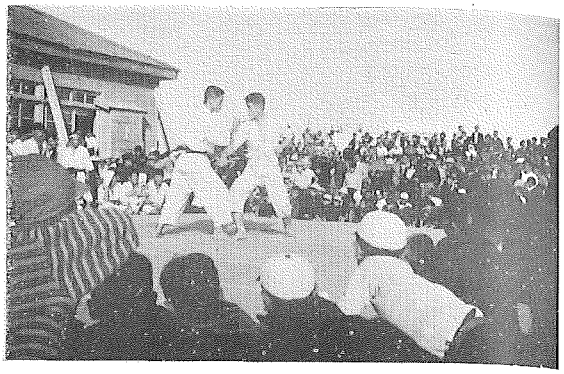
さて、前年結成された沖空連では８月に第１回「各流派合同演武大会」をコザ市において開催して大成功を納めている。その他、空手関係の記事をみると９月２４日の沖縄タイムス（以下「タイムス」と略す。）に知花朝信氏（当時７３才）と長嶺将真氏（当時５２才）の対談が上下２回にわたって大々的に掲載され一般大衆に空手の認識を深めた。他に長嶺氏の「演武線と演舞線」（注３）の記事がある。その他省略す。（注４）

１９５８年

大学という立場から空手を学問的に研究して行こうと４月１日に「琉球大学空手道研究会」（以下「琉空研」と略す。）が正式に発足、その会則を作り同時に学内空手道段級審査規程を設け本格的に空手の研究に取り組む方向づけをしている。

７月１３日には石川市で行なわれた第９回「全沖縄体育祭」に沖空連、琉空研も参加、空手古武術を披露し、万余の観衆の拍手喝采をあびた。以後、沖空連は毎年参加しているので省略す。更に月刊

空手道発行責任者の金城氏を囲み「空手座談会」（８月３１日）を真和志の料亭新風荘で開き、衰微の一途をたどっている本場の空手振興策について話し合っている。その席上、沖空連を中心として年内に段級制度を設け学校の正課に空手をとり入れるよう働きかけることなどについて話し合いがまとまった。



⑤　琉球大学大学祭における空手組手
（１９５８．１２．７）

１０月１１日、長嶺道場で緊急理事会が開かれ、称号制度に就いて協議された。その結果、称号段級制度を実施し、武術空手に新しい息吹きを与えられるので、これまで門外不出といわれた空手もますます一般大衆に開放される方向づけがなされた。なお、知花朝信氏の「空手道について」の投稿がある。（１１月２６日タイムス）

演武会をみると１１月には剛柔流の「総合演武大会」が糸満で、小林流が同じく演武大会を那覇で各々行なっている。１２月初旬の大学祭において第２回「空手道演武大会」が琉空研主催で開らかれた。以後、毎年演武会が開らかれている。その他の記事省略す。（注５）

１９５９年

２月２６日（タイムス）から６回にわたって「空手物語」シリーズが連載され、空手の形の解説、武勇伝、古武術に到るまでの内容で広く一般に知らしめたことは有意義であった。更に文春講演班として来島された写真家の樋口進氏の「沖縄の印象」④、⑤（タイムス）では美しいカメラワークによる空手が紹介されていたのは非常に印象的であった。

一方、６０年度版中学校体育教科書の資料編として沖縄の体育が１６頁にわたって掲載され、その中に空手古武術の項目も含まれ、執筆は文教局保健体育課が中心となっている。

５月１０日沖空連総会が長嶺道場で開らかれ「沖空連規約」と「沖空連表彰並びに称号段級審査規程」が審議され、可決された。沖空連もこれにより新しく本格的なスタートを切ったのである。なお、称号段級審査を受ける際の申込書の様式も規定されている。

また、教育手帳欄には「空手と体育科教材」と題し、剛柔流が中心となって体育科として空手を教える方法について検討を加えている。それには生徒の身体の発育状況や機微さなどをみて基準を作り、段階的に教えていくことなどが話し合われたとのことが報道されていたが、その後、どのようにそれが具体化され、現場で指導されたかに就いては、まだなにも聞いていない。

筆者も学校現場で空手の指導にたずさわっていた頃は、小学校、中学校、高等学校、大学と段階をふまえて系統的に指導することを主張し、さしあたっては中学校に於ける形の指導、組手、予備運動、安全衛生等各学年別に基準を設けて指導したことがある。学校体育としての空手はそういった段階指導、系統指導、の方が望ましいものと考えている。

また、６月２６日（タイムス）にはコザの尚礼館が子ども達に空手を教え、悪い遊びなどを追放し

て父兄から喜ばれている話題にひきつづいて、小林流の知花、仲里両氏が空手指導のため鹿児島に発ち（９月８日）一方、武道と音楽芸術を組み合わせて、いわゆる「リズム空手」（９月２２日タイムス）をつくりあげたニュース等があり、空手関係者の注目をひいた。発案者は在京の山内盛彬氏（６９才）である。

１０月には古武術を一般に普及するために沖縄古武術保存研究所（会長平氏）が松川区に道場開きをしたが、経営上の不振から長続きはしなかった。なお、守礼の光、７月号に「最も平和的な武技空手道」と題した山原三良氏の記事が見えることを付け加えその他は省略す。（注６）

１９６０年

この年から空手界の動きも活発化の様相を示してくる。まず１月３日には全日本空手道連盟沖縄地区本部（以下「沖縄本部」と略す。）の結成会が北谷村の島袋道場において行なわれた。これは全日本空手道連盟理事の保氏が同連盟より派遣され、産婆役をつとめてできたものである。

次に第４回沖縄タイムス賞が発表され（６月２４日）知花朝信氏が空手普及の功績で体育賞受賞に輝いているが、このことは沖縄空手界をはじめ、各方面から喜ばれた。なお、その人と功績については７月１日の朝刊に大々的に報道されたのは周知の通りである。

一方、先きに空手を体育科教材として教えようとの話し合いが一部で進められていたが１０月１２日、沖空連は中教委に近く小中高校の体育課程に空手の基本形をとり入れるよう要請することになった。その空手の基本形には、①受ける、②突く、③ける、④体をさばくの４つの動作を各流派からとり入れ新しく作られた普及形①、②を指定する。なお、体育科での指導対象は小学校４年以上とし、その際、①空手の特色を失わないようにする。②全身運動であるので体育的にとり扱う。③躾を重視する。④気魄を養うなどの点に留意する必要があるとされている。それに関連して教育手帳（１０月１２日）に空手に熱あげる喜屋武氏をとりあげている。しかし、その後、学校体育としての空手が現場で正式に指導されていないのはなんとしても残念である。

また、沖空連では１２月３０日付で空手の段級制実施にふみきり、３段２５人、２段２３人、初段４０人を発表した。これまで統制のとれなかった各流派を統一し普及と発展を図ることになった。このことは関係者の間で２、３年前から話し合われてきたものだけにその実施は快挙として賞賛に価いする。

その他、中山第１７代尚灝王が王位を退き、浦添村港川部落の別荘に隠居した時、武士松村が護身役として拝命した頃の武勇伝が港川の嘉陽氏の話として紹介されている。（注７）

沖縄の空手も年々盛んになると同時に国際的になって来ているが、基地の街の空手道場では外人の稽古する姿が圧倒的に多いという。（注８）更にタイムス連載中の「私のスポーツ歴」⑬に喜屋武真栄氏、㊺に比嘉佑直氏、㊿に上地完英氏、(52)に八木明徳氏等の空手人の履歴とエピソード、今後の抱負など大いに語って貰い、空手を稽古している多くの若人達に深い感銘を与えた。

空手に関する論文及び意見についてみると先きに結成をみた沖縄本部の段位と自由組手について久志助恵氏は「空手の発展のために」（注９）で痛烈に批判を加えた。それに対し大村基全氏が「空手道について」―― 久志氏の見解に対する声明書 ――で反論している。（注１０）

一方、井上秀雄氏は「空手の起源と発達」―― 挙聖松村翁の祖先について ――の論文を発表

（注１１）、更に小林流空手道場「究道館」師範の比嘉佑直氏は「空手雑感」と題し、その内容は①空手の固有名称「て一」の本質的考察、②防具組手についての私見、③空手に構えなしを三本柱として発表（注１２）実技、理論両面においても沖縄空手界の実力者として自他共にゆるしているだけあって、ずっしりと重みのある論文であった。

演武会などを２、３列挙してみると、沖縄本部は九州空手道選手権大会への派遣選手選抜を兼ねて「空手の試合」（２月２１日）を名護で、小林流の「空手演武大会」（６月２７日）が那覇で各々開らかれた。１０月８日には故宮城長順先生７周忌「追善空手道演武大会」が空手道剛柔流振興会主催、沖空連後援で開らかれ賑わった。

その後１２月３日には沖縄ライオンズ・クラブ主催で「空手、柔道、相撲、古武術大会」がＲＢＣホールにおいて開らかれ、テレビ放送を通して全琉の茶の間に演武会の模様を伝えている。一方、琉空研は１２月２５日から３泊４日の日程で国頭村与那において第１回冬期合宿訓練を行ない、練習のかたわら、与那部落公民館において、演武会を開いた。この計画は筆者の小林流部長時代に実施しているが、おそらく、沖縄空手界はじまって以来初の合宿訓練であったかと思うし、与那部落民もはじめての空手演武に目をみはっていた。合宿の帰途、屋我地の愛楽園に立寄り、慰問演武会を行なった。（注１３）

本土から沖縄空手視察のため来島された人も６０年は多く、その２、３をあげると、３月に林氏、４月に木崎、多田、慎野の三氏、６月に鈴木氏、７月に早稲田大学空手道部一行６人、同じく川内氏他６人が空手修業に来島している。なかでも早大空手部は本場の空手を観るため戦後はじめて来島した大学だと記憶する。琉空研との交歓会など実に真剣そのものであった。その他記事省略す。(注１４)



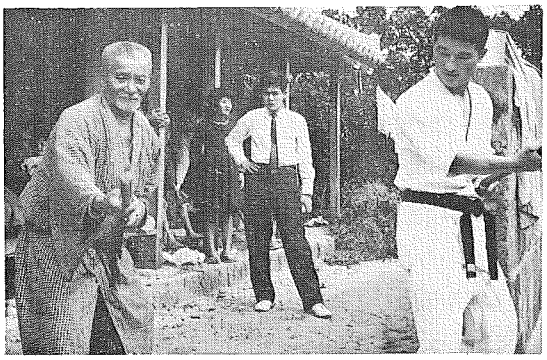
⑥　早大空手道部と琉大空手道研究会の交歓風景（1960. 7. 8）

１９６１年

沖縄で空手を習得して帰米し、ボストンで剛柔流空手道場を開設して、その指導にあたっているミ

ラーケンさんからこのほど八木師範のもとに届いた手紙が紹介され、その後、恩師をアメリカ旅行に招待している。（注１５）

４月６日には筆者が津堅島を訪ずれ、津堅ハンタ小武士の三代目仲村亀さん（８２才）から棒術の指導を受けている写真入りの記事があり、現在では仲村じいさんも他界され、島では津堅棒のひとつである「オーイグゥサン」、「砂掛け」など継承する人がないことを聞き、残念でならない。各地に残る古武術保存の必要性を痛感したしだいである。



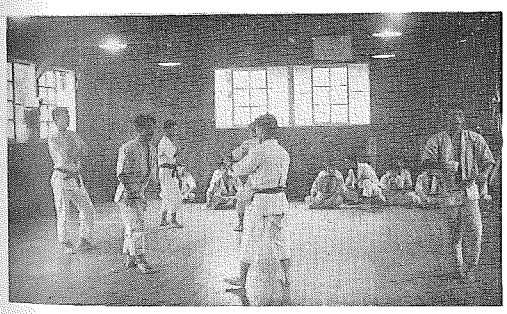
⑦ 津堅ハンタグゥー武士三代目
故仲村亀氏（左）（１９６１．３．１１）

一方、古武術の正しい形の継承と保存を目的とした沖縄古武道協会（以下「古武道協」と略す。）が４月２２日首里の知念氏宅で第１回準備委員会を開き、協会設立準備方針等について協議している。そして６月１７日、八汐荘に於いて各地から集まった古武術関係者によって規約審議などのあと、古武術の保存と普及発展をはかる目的で満場一致で協会設立を決定、初代会長に比嘉清徳氏が選らばれた。

その他、基地の街角（６月１５日タイムス）と題し、外人で賑わう基地の街の空手道場が紹介され、帰国後、道場を開設する者もかなりいるという。そのことから考えても在沖米人により沖縄の空手も米国に普及しつつあることが分かるし、他面英文の空手関係の本も多く出版されていることからも、それが裏付けられよう。

次に長嶺道場で空手を稽古しているワックス君（初段）がオハイオ州で３つの道場を開いている話題（注１６）や福岡のミッションスクールを空手の名門校に育て上げた上原三郎氏（注１７）をはじめ、「はるばる空手を学びに」（８月１９日タイムス）の見出しでオハイオ大学生ティキティン君が長嶺道場に弟子入り、空手修業を終えて帰る同君の招待を受けて同道場の有段者三人が空手指導に渡米する等々、いよいよ空手界は海外との交流が頻繁になって来た。

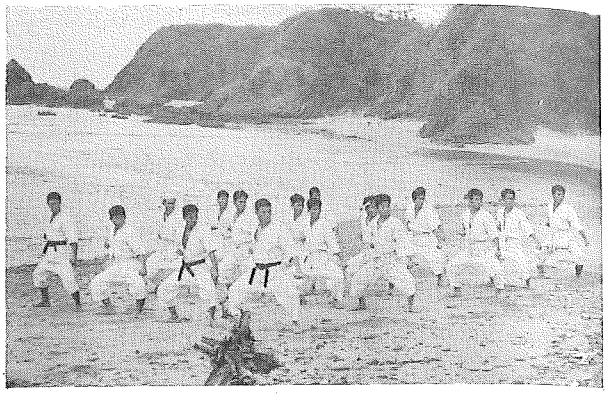
論文意見関係では、筆者の「本土大学の空手」（１０月２６日タイムス）と題し書いた他見あたらない。これは筆者他三人が琉空研派遣で７月２５日から８月９日までの１５日間、本土の各大学空手道部との交歓の様子や感想を書いたもの。なお、「今日の琉球」（第５巻１０号）に徳田氏の「沖縄千一夜」㉖ —— 空手の巻 —— と「守礼の光」（１１月号）に外間氏の「琉球空手道」の記事がみえることを付加しておく。



⑧ 同志社大における同大空手部と琉大
空手部の交歓風景（１９６１．７．３０）

先きに結成された古武道協の演武会を前に９回にわたって１８人の古武術発表メンバーが紹介され（注１８）１１月２６日には「古武道発表会」

が開催されている。その他演武会は小林流の第１６回目の空手演武会（４月１７日）、沖空連の合同演武会（１０月）などである。また琉空研では国頭村奥部落において第２回目の冬期合宿訓練を実施、その帰り２回目の愛楽園における慰問演武会を催している。琉空研は５月にも与那原の愛隣園を訪ずれ慰問演武会を実施している。



⑨　琉大空手研究会の合宿訓練（国頭村奥海岸）
（１９６１．１．１２）

本土からは京都の鈴木氏以下門下生５人が空手修業のため来島（５月２６日）安里にある宮里氏の道場で指導を受けている。

その他省略す。（注１９）

１９６２年

沖空連では１０月３日長嶺道場に観光関係業者を集め懇談し、去る１７日理事会で決めた「料亭での空手演武はしない」ことを伝え、観光関係者の再考を求めた。その結果、最初の原案通り料亭での演武会をとりやめ、そのかわり観光客には道場その他の施設で空手演武を見て貰うことになった。その他の一般記事をみていくと「愛蔵品拝見」㉗（７月３日タイムス）で「武士松村の空手の巻き物」（又吉氏所蔵）が紹介されている。内容は"武は暴を禁じる"ことなどの文武の道を説いている。

更に望遠レンズ「ニュー、スタイルの空手」（１１月７日）の記事が出ている。筆者はまだそのような空手をみたことはないが、説明によるとボクシングプラス空手というもののようで、中途半端なものだけに今後の研究が必要とのこと。なお芸能マガジン（３月２１日）に小林流「究道館」の比嘉師範、上地流「修武館」の上地師範の記事がみえるので付加しておこう。

論文意見についてみると、奥里将建氏の「民間の古武芸」（注２０）、川平朝申氏の「空手修業の思い出」（７月１日タイムス）、井上秀雄氏の「空手の歴史」（注２１）、伊良波氏の「空手道」（１２月１日公聴欄）等がある。

更に琉空研機関誌「空手道」第１号（３月発行）に筆者の「琉球古武術に関する考察」がある。なおこの「空手道」は筆者の会長時代に出版したもので戦後沖縄空手界ではじめての研究誌であり特筆に価いする。その後今日まで続刊している。

演武関係をみると小林流の第１７回目の演武大会（３月２６日）、琉球政府創立１０周年記念体育大会（４月１日）が琉球政府主催、沖縄体育協会後援で警察体育館において開らかれている。その他１２月には琉空研の演武会と第３回目の冬期合宿訓練が久米島において１週間実施、その間演武大会を催し空手の紹介に努めてきた。

１９６３年

５６年に結成されて以来、統一のもとに活動して来た沖空連は昨年１１月小林流空手協会から脱退

届けが提出きれていたのを１月２１日、小川荘で有段者協議会を開らき、脱退問題について話し合い小林流の脱退を承認した。脱退の理由は小林流から連盟規約の改正の申し入れがあったが、それが認められなかった為である。沖縄空手界の育成を図る目的でようやく軌道に乗った矢先だけに小林流の脱退は非常に残念でならない。その他の記事では「米国の大学に空手部」ー心身の訓練に好適ー（１月２３日タイムス）や京都の空手仲間たちが樹令２００年の檜で「戦跡に慰霊の鳥居」建立（２月１９日タイムス）、「空手は禅に通ずる」（注３２）更に「空手の神随は道」（９月１６日タイムス）の見出しで沖縄の４師範が佐世保において空手のスポーツ化を批判したこと、また、女性が上手にサイを使いこなして「究道館」の比嘉師範も感心した話題（注２３）の他、宮崎に空手ブームが起り県内の５つの道場で２千人が修業中（１２月２２日タイムス）、スポーツ豆辞典「空手の組み手」（１２月１６日）などがある。

一方、５３年に逝去された剛柔流空手の創始者である故宮城長順氏の胸像建立趣意書が６月１日付で発起人によって作成され、具体的に活動が進められ胸像建立と十年祭を祝う空手演武会も予定されている。

空手に関する論文意見等についてみて、一口にいうならば、この年は沖縄空手界はじまって以来、空手論争が活発に展開された。

まず、論争以外のものからあげると、版画風土記⑫「カラ手帝国」（え、儀間比呂志、文、徳田安周）に続いて琉空研発行「空手道」第２号。その内容には「空手雑感」一稽古について一筆者、「琉大空手道研究会への希望」上地完英、「無形文化の空手を守るには」長嶺将真、「空手の誕生と発達の考察」比嘉佑直、「空手修業の模範生」八木明徳などが掲載されている。



⑩ 琉大空手道研究会誌「空手道」
（創刊号から第５号まで）

更に宮里栄一氏のスポーツ随想「空手もいつかは五輪に」（３月７日タイムス）や筆者の「女の護身術について」（６月２６～２８日タイムス）がある。空手は形や組手の練習の他に補助運動による体力つくりの重要性を分かりやすく説明した宮里栄一氏の「空手の段練法」一補助運動で体力つくりを一（１１月２７日タイムス）や立派な環境、美しい土地に武術が発達することに着目した春野孫八氏の「現代沖縄の武術家」（注２４）、更に喜屋武真栄は「力道山と空手」（注２５）と題して書いておられる。

さて、１１月にはいると井上秀雄氏の「空手の歴史」ーその発生から現在までー（注２６）を発表それをきっかけに空手論争が巻き起った。まず、上原文一氏は「武道の本質を掌握せよ」ー井上氏の「空手の歴史」に反論ーと題し批判を加えた。（１１月２４日タイムス）、それに対し井上氏は１２月４日から４回にわたって「空手の歴史」について一上原氏の反論に答えるーを掲載した。そこで筆者は両者の論に異見を持った点について「空手道発展のために」ー空手論争によせてー（注２７）を発表した。更に井上氏は筆者の意見に対して「空手と中国拳法」ーその源流を探るー（注２８）で答

えたが、けりがつかないまゝ、この空手論争はいよいよ年を越すことになった。

また、この年の演武会等は小林流の第１８回目の演武大会（３月１６日）に引き続いて沖空連では小林流脱退でやゝ規模は小さくなったが、例年通り「合同演武大会」を７月に開いている。１０月には故宮城長順先生の「１０周忌胸像建立記念演武大会」を剛柔流空手振興会主催で盛大に行ない、また１２月には「拳聖糸洲安恒先生５０年祭空手道演武大会」を小林流空手道協会主催で開らき、更に１２月の大学祭における空手演武大会（琉空研主催）が催されている。

本土からは３月に武蔵工大、８月に法政大空手道部が各々来島している。（注２９）

１９６４年

まず、この年の空手古武術に関する一般記事をみると、小林流協会の昇段審査を実施し、初段から６段までの発表（４月１０日）に始まり、本土の空手師範の林氏が沖縄の古武道である「二丁鎌」、「団牌（テンペー」の技を習得し（７月４日タイムス）西日本空手道選手権大会で披露するという。また、「唐時代に伝えられた唐手」（注３０）の記事がみえる。

一方、１８２９年首里山川町に生まれ、武士松村に空手の指導を受け、明治３９年頃から師範や中学校で空手を教え、幾多の秀れた門弟を育成し、沖縄空手道の発展のために尽した故糸洲安恒先生の顕彰碑除幕式が８月３０日、那覇市真嘉比の糸洲家墓地内で行なわれ、小林流協会長の知花氏をはじめ門下生、関係者約１００人が出席し、空手演武など披露して師の遺徳をしのんだ。

「空手がとりもつ琉米親善」（９月１６日タイムス）という見出しでアメリカの方で空手道場を開いている門弟たちから招待を受けた島袋氏は３ケ月のアメリカの旅に出発、帰沖後、次のような感想を述べている。「アメリカ、カナダの空手熱はたいしたものだ。空手試合を将来オリンピック種目に入れようと意気込んでいる。いまや沖縄の空手ではなく国際的な空手となっている。（中略）沖縄の空手界もいまのまゝではとり残されてしまう。」と強調したという。（１２月１０日タイムス）

一方、郵政庁では、沖縄独特の空手をテーマに空手切手シリーズ第１集「ナイハンチ」を発売することになった。この企画は空手愛好家をはじめ、多方面から喜ばれており、発売の日までには広く海外からも注文が殺到して１０月５日の発売当日の郵便局窓口は切手収集家や一般の人達で賑わったという。

また、早朝空手道場で若人に混って寒げいこをする７２才の宮城老人がおり話題を呼んだ。（１２月５日タイムス）この人は会社重役で３年後（６７年）には見事空手初段を獲得し念願の黒帯を果している。

沖空連では称号審査会（１２月３日）を開らき、９日同連盟では範士３人、教士８人、練士１６人を発表、これまで沖縄空手道界には教士の称号しかなかったのが、今度はじめて長嶺氏ら三人の範士が誕生している。

さて、６３年から続いている井上氏と筆者の空手論争は年を越してしまったが、引き続き筆者は「空手の流派」ー再び空手道発展のためにー（注３１）と題して反論した。ところが、新聞社の学芸部の方から突然「空手論争」を打ち切ってしまったこの論争も一応終止符がうたれた。更に筆者は琉空研発行「空手道」第３号に「空手のかた」の小論を発表、続いて「空手の鍛練器具」をタイムスに連載（注３２）また先きに発売された空手切手第１集について「空手切手のデザイン」（１０月１２日）

と題し意見を述べておいた。その他比嘉氏の「台湾の空手」（８月２１日）と嘉手川氏の空手についての随想（注３３）がある。



⑪　糸洲安恒氏顕彰碑除幕式（１９６４．８．３０）

演武会は「空手古武道大会」（５月２６日）、小林流第１９回目の演武大会（１１月１日）、文化財保護法実施１０周年記念で「空手、古武術の演武会」が那覇商業高校体育館で各々行なわれている。更に琉空研の演武大会（１２月６日）、沖空連主催の第２回「空手道演武大会」（１２月１３日）、そして第三海兵師団主催による「空手選手権大会（１２月２５日）が金武キャンプ内体育館で開らかれている。

この年の空手関係の来島をみると大阪工大（７月２９日）、近畿大（８月１３日）、鹿児島大（８月１７～２０日）各々の空手道部が来島し、琉空研との交歓会をはじめ沖縄の空手を勉強して帰った

１９６５年

この年は一口にいって沖縄空手界に対して内外からきびしい批判が加えられた年といえよう。例えば、１月１０日タイムス紙に「岐路に立つ沖縄の空手」の見出しで大々的に報道されており、その内容をみると沖縄は空手の本場といわれながら将来に対する方向づけもなされないまま「武道」という殻にとじこもっている。その間に本土や海外ではスポーツ空手として試合中心に発展し、いまや「世界の空手道」としてお株を奪われ、沖縄の空手界は完全に権威を失墜していると指摘した。このことは武術としての空手とスポーツとしての空手について真剣に考えさせ、もしくは空手の大衆化や不統一な空手界の大同団結の必要性を説いたことなど関係者に刺激を与えたものと見て間違いない。そのことは論文、意見をはじめ、その後の空手界の微妙な動きをみても察せられることである。

去年の１０月に発行された空手切手第１集にひき続いて今年は第２集「巻藁」（２月５日）と第３集「組み手」（６月５日）が各々発売され人気を呼んだ。その他、一般記事に目を移すと、小林流では称号審査委員会（１月２日）を開らき、範士２人、教士４人に称号を授与している。その他（注３４）省略す。

また、小林流の伊波氏が比国に空手指導に出掛け（６月３日）翌年３月４日に帰沖している。ハワイの森田氏が本場の空手修業のため来沖（７月７日）一方沖縄の空手を紹介するため４人の有段者が台湾へ出発（１１月８８日）している。このように空手の交流が頻繁に行なわれているが、新聞に出るのはその中のほんの一例に過ぎないことを付け加えておく。

段級審査も各流派毎に行なわれ、新聞紙上に発表されているが、例えば小林流昇段発表（９月２３

日）、国際空手古武道連盟の称号段級審査発表（１２月１６日）等がある。

また、沖縄相撲協会長の久志助恵氏が沖縄体育協会から「スポーツ功労者」として表彰（１０月１０日）された。久志氏は相撲のかたわら、空手界でも指導者として活躍している。以上が一般的な出来事であるが、そこで論文意見等をみると先きの「岐路に立つ沖縄の空手」に対して、久志助恵氏は「空手道の方向」（２月４日）と題し沖縄空手界の実情とスポーツ空手に対する批判と合わせて主張しておられる。また琉空研でも今日の沖縄空手の問題点と将来の空手道について特集したのが「空手道」（第４号）である。

その内容は「転換期に立つ今日の空手」筆者、「空手のスポーツ化について」仲村茂、「空手道への期待」宮里栄一、「武技を求めて三十余年」比嘉清徳、「私の空手観」仲里周五郎、「自由組手について」八木明徳、「空手道は試合中心にもっていくべきか」長嶺将真、「スポーツ空手と武術空手」比嘉佑直氏等である。

一方、西日本空手道連合会会長の保勇氏は「新たな道標を」（注３５）－沖縄空手界の統合を望む－のサブタイトルで投稿を寄せておられ、また、長嶺将真氏は「空手道の将来」－試合中心主義への批判－（注３６）を書いておられる。この年は直接の論争こそなかったが、沖縄空手界も翌６６年から６７年にかけて再統一した大組織作りの方へ活発に動き出して行くのである。

次に東恩納氏の「日本空手道の歩み」（８月４日タイムス）や筆者の「空手演武会にのぞむ」（１１月２５日タイムス）で旧態依然とした空手演武会のあり方に対してきびしく批判を加え、再考を求めた。

演武会関係では、高校生だけを対象とした第１回「高校空手道選手権大会」（７月１７日）が尚礼館主催で行なわれたのにひき続いて来島中の全日本学生空手道連盟による「空手の公開試合」（注３７）がタイムスホールに於いて行なわれた。基本形、形などが披露されたあと選手たちは紅白に分かれて試合に移った。試合は学連ルールによって試合場を設置し、有効打、わざあり、判定などで勝敗がきめられた。更に８月１日には尚礼館主催による選手権試合と演武を組み合わせた「１９６５年空手道選手権演武大会」がコザ市において行なわれた。このように一部ではあるが、沖縄空手界において一連の試合形式がとられるようになったことはこれまでと大きく違う点である。

なお、第２０回小林流の演武会（１１月２１日）と琉空研の演武会（１２月５日）等が行なわれている。

本土からは関西大の空手道部が来島し、琉空研ならびに「空道館」などで交歓会を持っている。

１９６６年

６６年は空手界が統一の方向へ具体的に話し合いを進めた年であった。これまで各流派を一本にまとめた強固な団体を作ろうと部分的な話し合いが持たれていたが、８月２７日、料亭幸楽において各流派代表１４人が集まり、第１回の統合懇談会が開らかれた。座長役には長嶺将真、比嘉佑直両氏がまわった。これを契機に沖縄空手界も大同団結の方向へ動いていった。そういう時期にあって戦前戦後を通して剛柔流空手を指導して来られた比嘉世幸が逝去され、斯道から惜まれた。告別式は大典寺において挙行された（４月１８日）その他、空手関係記事を列挙すると小林流の宮平氏は７月２０日空手指導のため比国へ出発、私の職業欄（７月２４日新報）に「から手師範」の長嶺氏が少年少女向

けに紹介され、一方「究道館」の具志堅氏が「００７」出演のため９月１７日上京し、映画を通して広く沖縄空手をピーアルした。

更に小林流では１８日昇段審査を開らき、その結果昇段者発表（９月１９日）また本場の空手修業のため、はるばるアフリカから青い目のジユームスさんが来島し、安里の順道館で練習に励んでいる。（１２月３日）

空手は諸外国まで広く普及したとはいうもののその反面、批難されている面も多いと考えられる。例えば海外小話「空手を取り締まれ」（１１月２０日）と題し「日本のから手がならず者や犯罪人の間でも野放しで大流行しているのは困ると１８日英国の議会で政府に取り締まりを要望する声が出た（以下省略）」面白いことには「日本」の空手と指摘していることである。

沖空連では第４回「空手道演武大会」を新報ホールにおいて催し、その純益を社会福　のため役立てたいと沖縄精薄児協会に寄付している。（１２月１０日新報）

一方、論文意見などをみると筆者の「沖縄空手界に望む」ー正しい現状分析をー（注３８）に続いて琉空研発行「空手道」（第５号）がある。その内容は、「空手道統合について」仲村茂、アンケートに見る「中学生と空手」筆者、「空手を観る」比嘉清徳、「空手道の沿革について」長嶺将真等で



⑫　東京オリンピック体操選手団と「究道館」幹部の懇親会（１９６６、1.２０）

ある。更に知花朝信氏の「空手と私」ー糸洲安恒先生に師事（３月２５日タイムス）や筆者の「空手の実技と表現」（６月４日）、長嶺氏の「空手道の沿革について」（注３９）がある。なお、この年から空手関係を中心にした「沖縄スポーツ」新聞を嘉手川氏が発行している。

６６年は演武会等のプログラムが筆者の手許にないので１２月４日、大学祭に於いて琉空研の「空手演武会」があったことを記してあとは省略する。６４年アジアではじめて開催された東京オリンピックのゴールドメダリストの日本体操選手団が来沖し、その美しい演技を琉大体育館や奥武山陸上競技場で披露し、万雷の拍手をあびた。その選手達と「究道館」幹部との交歓会が１月２０日晩７時から那覇料亭に於いて開らかれた。最初は私達の空手演武を披露したが、日体大の栗本団長をはじめ、小野、鶴見、遠藤、中村、渋谷の各選手達は熱心に空手を見学、空手と体操の共通点などお互い楽し

い雰囲気で話し合いが持たれ有意義だった。

１９６７年

前年の８月２７日各流派の代表者が集まり、統合問題についての準備委員会を開らきこれまであった沖空連を発展的解消し乱立状態にある空手界を拡大統一「全沖縄空手道連盟」（以下全沖空連と略す）を結成しようとその準備を進めていた。（注４０）

長嶺将真、比嘉佑直両準備委員の他に各流派から５人の委員が出席して２月２６日には「全沖空連規約」もまとめ上げた。そこで全沖空連の結成大会が２６日、午後2時より警察体育館で開らかれ、正式に発足した。大会は規約審議のあと役員選挙を行ない、初代会長に長嶺将真氏、副会長に八木明徳氏、上地完英氏、島袋善良氏、理事長に比嘉佑直氏が選ばれた。後日全沖空連では理事会を開らいて、具体的な活動計画を協議することになったが今後の活躍が大いに期待されている。

ところが小異を捨てて団結し、本場の空手を正しく育てようとする目的で結成された全沖空連に小林流協会や沖縄拳法、全古武道連等が加入していないのはなんとしても残念である。一方、比嘉佑直氏が全沖空連理事長になったことで小林流協会では理事会（２月２８日）を開らき協議した結果、これまで副会長をつとめた比嘉佑直氏を除名することを決め、３月１日付で新聞広告を出している。また、その日、役員改選、昇段審査会も行なった。

先きに結成された全沖空連の大組織をどのように運営して行くかについて理事長の比嘉佑直氏に今後の空手道界の育成、抱負などについてのインタビューがある。（３月３日タイムス）その後、全沖空連に於いては「表彰並びに段級審査規定」を４月１１日に制定し、統一した称号及び段級審査の作業にとりかかり、このほどそれがまとまり５月２０日警察体育館において称号授与式が行なわれた。授与されたのは範士正１人、範士５人、教士２４人、錬士２９人でひき続き５段以下の段級審査にとりかかる方針という。なお、全沖空連では実力段を５段までとしている。

このように各流派をまとめ、大きな組織を運営することはむつかしいことではあるが、しかし、「和」をもって団結を図ることが出来れば沖縄の空手の将来も大きく開らけることだろう。他方、文教局でも空手は体育的にみてすばらしいので、体育教材としても最適であると認めている。そこで全沖空連でもバックアップして中学校、高校の体育の正科に組み入れようとする動きがあるといわれる。

学校現場で沖縄伝統の空手を正しく指導し郷土文化の向上と青少年の健全育成をはかる目的が達成されれば、この上もない喜ぶべきことであるが、しかしその後どのように指導されたかはつまびらかではない。

その他、新報に連載された沖縄百年（人物編）㊻に宮城長順氏、㊽に船越義珍氏が各々空手普及の功績でとりあげくわしく説明され、更に空手有段者の三青年が招かれ各々比国と米国へ出発している。（注４１）外国では空手人口の多い反面指導者が少ないとのことで、沖縄の空手指導者が普及宣伝に出掛けることは非常に意義深いものと考えている。

この年から、空手古武術に関する論文意見等は急に減って寂しい感じがする。

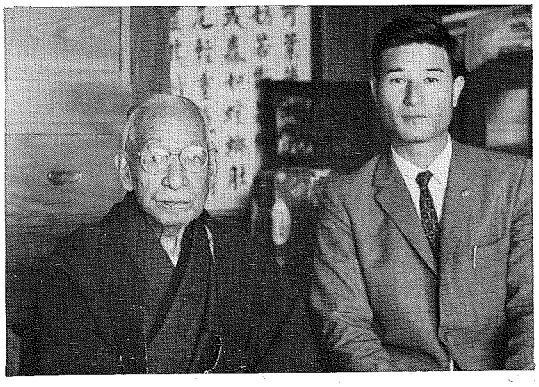
まず筆者の「津堅棒の消滅を憂う」（沖縄スポーツ第６号）や宮里栄一氏の「武道の段位と称号」（注４２）に続いて友寄隆光氏の「アメリカの空手道」（１２月１日タイムス）と題して、実際にアメリカでの見聞をもとに感想を書いておられる。その他、比嘉氏が「から手演武会をみて」（６月１４日）で先きに琉大体育館で行なわれた全古武道連の演武会について批判を加え、会長の比嘉清徳氏は

「から手へのご意見に感謝」（６月１６日）で答えている。また、石川正通氏は「納涼つれづれ歌」中、空手の船越義珍、本部サールー、宮城長順について詩歌を作られた。

演武会等では、全古武道連主催による「空手、古武道の演武と試合大会」と銘打って６月１１日琉大体育館において行なわれた。それにひきつづき、１２月１０日、コザの琉米文化会館に多数の観客をあつめて盛大におこなわれたのだが全沖空連主催第１回「空手古武術大会」で大成功を納め力強い第１歩を踏み出した。その他の演武会は省略す。

１９６８年

この年はまずなんとしても知花朝信氏の功績を真先にあげなければならない。４月２９日の天皇誕生日に恒例の春の叙勲の発表があり、その中の１人として空手の知花朝信氏（８２才）が勲四等瑞宝章を受章しておられる。これは沖縄空手界にとって実に喜びであり、同時に空手の真価が対外的に認められたものであり大いに誇りとするものである。



⑬　知花朝信氏（左）と筆者（１９６８．１２．１９）

知花氏は明治１８年６月５日首里に生まれ明治３２年８月に糸洲安恒氏の空手道場に入門、大正７年に鳥堀町において空手道場を開設、戦後になって昭和２３年沖縄小林流空手道協会長に就任、首里警察署空手道師範、沖縄空手道連盟初代会長を歴任し空手の普及、指導に大きく貢献された。

その他については、戦後３回目の帰郷である金城氏は本場の空手界に２、３意見を述べておられるが、それについては省略す。（注４３）一方空手は予防医学の面からみてもすばらしいので是非学校の正課にとり入れてほしいと感想を述べ、自分も普天間にある上地流空手道場「修武館」で若人にまじって連日汗を流して稽古に励んでいるハワイからきた知念医師が話題をふりまいた。

また、ブラジルで道場を持っている新里氏が技術研修のため帰郷し南米の空手ブームについて次のように語った。（注４４）それによるとブラジルでは女性を含めて２千５百人の愛好者がおり、空手ブームは今後ますますふえる傾向にあるという。新里氏は早速知花氏の道場に通って稽古に励んでいる。

９月３１日、許田重発氏が別府市で亡くなられた。許田氏は宮城長順氏等と那覇手の東恩納先生の指導を受けたとのことであるが、その点については神村氏の「許田重発先生を思う」（１０月１６日タイムス）と伊良波長幸氏の「わが師を語る」（１２月４日新報）で３回にわたって書かれているので参考にされたし。

全沖空連では１２月２７日称号、段級審査会を開らきその結果を発表、更に同連盟では第２回目の空手古武術大会をタイムスホールにおいて盛大に開催している。なお、この年１２月に多田正剛氏が沖縄の空手視察のため来島されている。

１９６９年

６９年は新年早々に「盛んな海外の空手熱」（１月４日タイムス）のタイトルでアメリカ各地の空手の状況を写真入りで大々的に報道しており、地元沖縄空手界のなお一層の奮起をうながしている。

そういう中にあってアメリカの空手指導に松林旅の長嶺氏が渡米（１月１１日）しており、これは米国各地にある支部の招きによるものである。沖縄の空手（各流派）もこゝ数年来米国その他に支部を結成するようになった。

また、米国をはじめ、諸外国では空手人口に比べて、指導者が少ないのに目をつけ、先きにアメリカの空手視察を終えて帰った友寄氏は再び空手の海外普及に意欲を燃やして渡米した。（１月２６日）今後沖縄の若い空手指導者が、諸外国に出て行って普及することを大いに期待したいものである。

一方、「究道館」では、これまで有段者会を組織して道場の発展のため、活動してきたが、それを成文化することになり、２月１日有段者会を開らき、会則を審議のあとに役員選出に移り、組織内部の強化を図った。

明治３２年、空手の糸洲安恒氏に師事し、小林流を創設、以来戦前戦後を通して空手道普及に尽力され、多くの門弟を育成して来られた小林流空手の知花朝信氏が２月２６日逝去された。享年８３才。知花氏は６０年に沖縄タイムス体育賞を受賞され、６８年、勲四等瑞宝章受章するなど戦後沖縄空手界の大御所として活躍された。告別式は２８日、大典寺で行なわれ、斯道関係者をはじめ各界の人々がつめかけ焼香、別れを惜しんだ。

小林流協会では知花前会長の死去にともない、３月３０日、総会を開らき役員改選を行なった結果会長に宮平勝哉氏を選任し、ひき続いて段級審査会に移り８段から初段まで９０人の昇段者を発表している。

更に本土の空手界は大同団結して去る１０月、東京にある日本武道館において初の「全日本空手道選手権大会」が開催されるが、その大会に全空沖連の範士６人が招待を受けている。それに先がけて、２５日タイムスホールにおいて「沖縄公開の夕べ」が開催された。（注４５）その日は悪天候にもかかわらず会場は超満員の盛況で沖縄空手の"神髄"を遺憾なく発揮して深い感銘を与えている。

さて、東京九段にある日本武道館において、第１回「全日本空手道選手権大会」が１０月１０日開らかれ、全沖空連の師範６人が祝賀演武を行ない、会場をうめつくした一万余の観衆の大喝采をあびた。その招待演武の帰途、全沖空連副会長の島袋善良氏が急病のため大阪で突然逝去されている。（１０月１３日）

また、５月１１日全古武道連の第２回空手選手権大会がコザ市で開らかれたのに続いて、６９年のしめくくりにふさわしく全沖空連では１２月２２日国映館において第三回「空手古武術大会」を開らき、多彩なプログラムで二百余人が熱演、超満員の大観衆は演武者の一挙手一投足にかたずをのんで鑑賞していた。

この年の論文意見等をみると八木明徳氏の「知花朝信氏をしのぶ」（２月２８日タイムス）をはじめ、去年から人気を呼んでいるキックボクシングと空手の話題があり、それが新聞の投書にも反映している。例えば、宮本氏の「空手道とキックボクシング」（５月８日）、全沖空連会長の兼島信助氏の「全沖空連のキックボクシングに対する姿勢」及び久志助恵氏の「空手とキックボクシング」（６月１１日）等がある。その他、中田氏の「太極拳について」（６月１４日）、平氏の「富名腰義珍先

生」（９月３０日）などがみえるので付加しておこう。

おわりに

以上、終戦から６９年までの戦後２４年間の沖縄空手古武術の推移を書いてきたが、特に空手に比べて古武術界の動きが沈滞していたが、しかし両者はいつも表裏一体となって発展してきた。紙面の関係もありその点について十分説明することが出来ず、舌足らずの感があったと思う。また、新聞記事を中心に書いているうちに資料不足も痛感したしだいである。

最初は足で多くの資料を集めて「戦後沖縄空手史」というタイトルで書く予定であったが、空手に関する資料となると、どうしても新聞記事にたよる面が大きいので、今回は思い切ってタイトルを表題の如く変更したしだいである。後日、それらのものを集大成してみたいと考えているが、しかし新聞資料以外にもあつめられるものは出来るだけ活用してみた。なお、５７年以後のタイムス、新報両紙の切り抜きを中心にまとめたが、その中でも２、３見落しがあったように思う。

例えば、たしか６０年前後の新報？だと記憶するが、比嘉佑直氏の「沖縄空手のあり方」や八木明徳氏の「？」等である。また、演武会や本土海外からの来島者についても筆者の手許にある資料では貧弱であったことをお断わりして、後日付け加えていきたいと考えている。

この稿をまとめるにあたり５６年以前については、全沖空連理事長の比嘉佑直氏のご教示を賜わったことを記し感謝の意を表します。

激動する日本の空手そして世界の空手界に美しい風土と長い伝統に根ざして発達した沖縄の空手界がどのように対処していくか、今後の沖縄空手古武術の限りない発展と諸先輩のご活躍を期待しつつ、この稿をとじる。

注１　空手の船越翁　４月２８日タイムス
注２　追悼空手道演武会　写真トピック ６月２５日タイムス
注３　茶のみ話　１０月２７日タイムス
注４　イ　本土の空手熱いよいよ盛ん１月２６日タイムス
　　ロ　大阪のオキナワ（空手道場）６月２１日タイムス
　　ハ　度胸もできて商談成功　６月２９日タイムス
　　ニ　めざましい空手の普及　７月　６日タイムス
注５　イ　国場師範空手競技に優勝　　５月２１日タイムス
　　ロ　伝統の棒で体を練る　７月２２日　タイムス
　　ハ　盛んになる空手道　９月１８日タイムス
　　ニ　空手道演武大会　１１月２４日タイムス
　　ホ　久留米大が優勝　１１月２６日タイムス
　　ヘ　韓国で盛んな空手熱　１２月２８日タイムス
注６　イ　民謡と踊りをひろう　４月８日タイムス
　　ロ　沖縄の芸能⑧与那国の棒踊　２月２６日タイムス
　　ハ　関西便り、今や空手ブーム時代　４月２日タイムス
　　ニ　空手練習中死ぬ　４月２３日タイムス
　　ホ　福岡の上原師範　７月１２日　タイムス

ヘ　汗流す女武者①空手　８月１０日　タイムス

ト　関西便り、国場氏聖心館長に　１２月１８日　タイムス

注７　「伝説のある場所」５５　武士松村　１月１３日　タイムス

注８　そぞろ歩る記　７月２２日　タイムス

注９　６月２３日(上)　２４日(下)　タイムス

注１０　７月８日(上)　９日(下)　タイムス

注１１　７月１６日(上)～１８日(下)　タイムス

注１２　９月２０日(上)～２２日(下)　タイムス

注１３　冬期合宿訓練については琉空研の「空手道」を参照されたし

注１４　イ　基本型を重点に　４月１３日　タイムス

ロ　本場の沖縄も参加　４月１０日　タイムス

ハ　鈴木正文館長のみた沖縄の空手　６月１５日　タイムス

ニ　本場の空手をみる　７月５日　タイムス

やはり本場の空手　７月７日　タイムス

ホ　空手修業に７氏　７月２０日　タイムス　その他関連記事２

注１５　「アメリカに渡る空手道場」　２月２６日　タイムスと「海を越えて空手に結ばれた師弟愛」９月２９日　タイムス

注１６　「アメリカに渡る空手」　６月２６日タイムス

注１７　「ミッションスクールの空手先生」　７月１３日　タイムス

注１８　古武道　１１月１５日～２６日　タイムス

注１９　イ　人物地帯　空手修業のため来島した鈴本正文　５月２６日　タイムス

ロ　琉大空手部の充実を５月３０日　タイムス

ハ　若者に負けないぞ　９月２９日　タイムス

注２０　郷土外史　68　１月２１日　タイムス

注２１　空手の歴史、松村宗棍とその弟子たち９月１３日～１５日　タイムス

注２２　臥薪嘗胆で免許皆伝　５月２７日　タイムス

注２３　「古武術に女性が進出」　１１月２４日　新報

注２４　１１月２８日～２９日　新報

注２５　茶のみ話　１２月３０日　タイムス

注２６　１１月１７日から５回にわたって連載　タイムス

注２７　１２月１０日から３回にわたって発表　タイムス

注２８　１２月２７日から３回にわたって答える　タイムス

注２９　本場のから手に学ぶ　８月３日　タイムス

注３０　「もの知り教室」　７月６日　タイムス

注３１　１月８日(上)　９日(下)　タイムス

注３２　６月１６日から５回にわたって連載

注３３　おち穂　２月９日より７日連載　新報

注３４　イ　陰の美をもつ空手　１月１１日　タイムス

ロ　沖縄から初の範士　４月９日　関連記事８日、１３日　タイムス　新報

ハ　「明治、大正、昭和名優伝」⑬　５月１３日　新報

注３５　４月１０日(上)～１３日(下)　タイムス

注３６　木曜論壇　１２月２日　タイムス

注３７　国分団長以下全日本学生選抜による２０人の選手が来島、試合のあと沖空連関係者との話し合いがもたれた。

注３８　２月１５日「沖縄スポーツ」第１号に発表なお、沖縄スポーツの発行者は嘉手川重夫氏である。

注３９　１２月２９日タイムス　なお空手道第５号掲載と全く同じ内容のものである

注４０　「新連盟の結成へ」　２月４日　タイムス

注４１　「沖縄のから手海を渡る」　９月１３日　タイムス

注４２　日曜論壇　６月２５日　タイムス

注４３　「空手もスポーツ時代へ」　２月１４日　タイムス

注４４　「ブラジルで人気呼ぶ空手」　１２月１８日　タイムス　新報

注４５　全国特別招待模範演武「沖縄公開の夕べ」として　タイムス　９月２０日～２３日まで６人の範士の演武種目と横顔が紹介された。

〔編集部注〕

筆者は当館学芸員であるとともに、小林流空手道場「究道館」師範であり、斯道の理論と実技面において造詣が深い。

琉球の屋根獅子

—— 史的立場からみた ——

大城精徳

琉球政府立博物館々報第二号の研究録で「琉球の唐獅子雌雄考」を発表し、その中で琉球の獅子像全般についても多少触れておいたが、今回はその中でも最も興味深い屋根獅子について述べてみたい。

琉球の屋根獅子はそのひとつびとつがそれぞれちがった表情または姿態で表わされ、くめどもつきない面白さを秘めているものである。それは琉球の風物詩の一頁を飾るにふさわしく、また琉球文化を独持のパターンで織りなす素材のひとつに加えることもできる。民俗との結びつきもさることながら、古くは建築装飾としても重要な役割を果していたことが、多くの実例を通して知ることができるその起源は祖形という意味でこれまでの調査結果ではだいたい１４～１５世紀頃までさかのぼるのではないかと考えられる。はじめは貴族の生活と深い結びつきをもって生まれ、後代になって多分に庶民的な性格をおび今日に至っているものである。その最盛期は、琉球における住宅建築と照らし合わしてだいたい昭和の初年代から１０年代にかけてであろう。第二次大戦後は住宅建築の事情ばかりでなく、生活思想の面にも大きな変化がみられ、都市地区ではいくぶん衰退の気配をみせてはいるものの、沖縄の人々はなかなか屋根獅子に対する愛着を捨てることができないようである。否、むしろ農漁村地域では住宅事情の好転に伴って、今日ほど屋根獅子が隆盛をきわめた時期はなかったのではないかと思われるほどである。

この稿を起すにあたって調査した屋根獅子はそのほとんどが戦後の作で、戦前の古いものは写真も含めてわずかに十数例に過ぎない。しかし、戦後のものでもその表現上の様式や形式に大差はなく、伝統的な技術を踏襲していることはいうまでもない。調査の範囲は沖縄本島のみで離島は一部しか入っておらず、したがって資料不備のそしりもまぬかれないが、離島の部は後日奄美大島諸島も含めて改めてまとめてみたいと思っている。

本稿ではこれまでの調査結果をもとに次の四項目について考察を進め、琉球の屋根獅子の全容をできるだけ明確につかんでみようとこころみたものである。

1　琉球の獅子像中屋根獅子の占めている位置
2　屋根獅子の起り
3　屋根獅子の様式、形式、素材
4　屋根獅子のつくり手及び分布と用法

1　琉球の獅子像中屋根獅子の占めている位置

琉球の彫刻史をながめてみると、その主流をなしているのが獅子像彫刻で、獅子像の歴史はそのまま琉球彫刻史におきかえることも可能であるといっても過言ではない。いいかえるとこれは獅子像というものが如何に深く沖縄の人々の生活の中に根をおろしていたかを示す証左にもなるといえよう。

さほどに琉球では多くの獅子像がつくられてきたのであるが、それでは人々の生活の中で、それはどのように用いられてきたのであろうか。その用途の上から具体例をあげながら検討を加えてみよう

獅子像には元来三つの性格乃至は意義があたえられていると考えられる。一は権威の象徴として、二は降魔除災の守護神として、三は装飾としてのそれである。これは洋の東西を問わず獅子像のもつ共通した性格であり、琉球の獅子像もまたその例外ではない。この三つの性格のどちらに大きな比重を置くかということはそれを用いる場所、あるいはその時々の用途によって異なることはいうまでもない。琉球では権威の象徴と装飾性に大きな比重のかかったものは、その殆んどが貴族の生活と深いつながりをもち、一方降魔除災の守護神としての意義にウエイトのかかったものは庶民の生活の中に多くみられる。現存する古い琉球の獅子像の大方は前者に属し、後者は、今日なお盛んに用いられている屋根獅子によってそれを代表させることができる。もっとも屋根獅子もその発生において貴族的なものと密接なつながりをもつもので、単純に割り切れないところもあるが、それが独自の位置を占めるに至った段階で庶民的性格を濃くもつようになったという意味である。

しからば、琉球で貴族の生活の中から派生した獅子像には具体的にどのようなものがあるかというと、まづあげられるのが、建造物、たとえばお城、寺社、それに王族又は上級士族の墓陵、あるいはその中に納められた石棺や厨子ガメ等に附帯して、建築装飾又は権威の象徴として用いられた獅子像であろう。

お城に用いられた獅子像として、首里城を例にとってみると、「歓会門」(大手門)と「瑞泉門」(第一内門)に据えられていた各一対の獅子(砂岩)と正殿屋根の前面と背面下り棟の端に鬼瓦として用いられた二対の獅子面をあげることが出来る。(因みに円覚寺の鬼瓦は獅子面でなく鬼面になっていた。)城門の獅子像は装飾的な意義は勿論、権威の象徴としての性格も強いように思われる。一方正殿屋根下り棟の二対の獅子面はあくまでも建築装飾として用いられたものであろう。この方は屋根に据えられたという形式の上からみて、後代の屋根獅子発生の素因のひとつとして考えることができるものである。

寺社に附随するものとしては、首里では円覚寺(前述の鬼瓦は別)や末吉宮、地方では八重山の権現堂等のものが古いものとして現存している。

円覚寺の獅子像は戦前国宝に指定されていた放生橋欄干羽目左右二対の高肉彫獅子像と同支柱上の彫像が著名である。(素材は閃緑岩)そのほか建物の内部装飾としての木彫浮彫や文珠菩薩の乗ってていた寄木造りの獅子彫刻があったことが知られている。しかしこれらは去った大戦で破壊され、今はその残欠が残されているだけである。この木彫浮彫は牡丹に獅子の組合わせで、いづれも彩色されているものであった。

牡丹に獅子を配する様式は中国や本土ではかなりあるらしいが、琉球ではその例は多くはない。たいていの場合この二者は単独に用いられている。中国にならって牡丹が装飾模様として古くから琉球でも重ぜられたことは多くの実例を通して知ることができる。中国では牡丹は花王、つまり百花の王として特に尊ばれたようで、獅子が百獣の王として尊ばれたのと基を一にするものであろう。この両者の組合わせは調和のよさや完璧を意味するものと解してよいと思う。このように獅子に牡丹を配するという形式をとり入れたと思われる例が、わずかではあるが屋根獅子にもみられる。それは図案化された牡丹模様の花瓦を屋根獅子に配する形式をとっているものである。

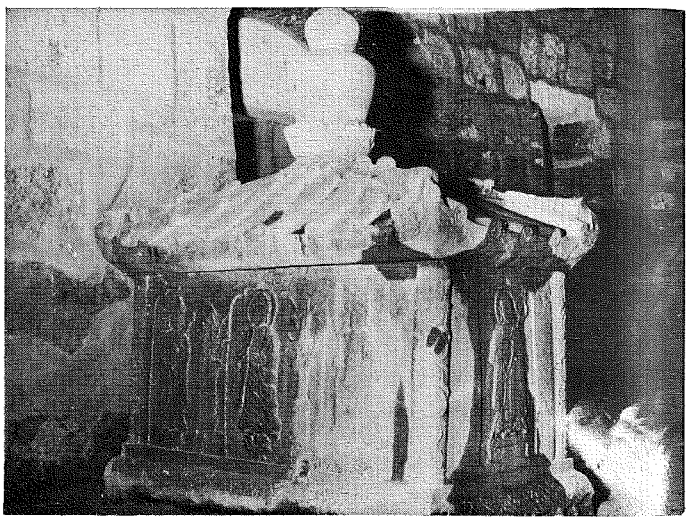
八重山権現堂の獅子というのは本堂正面階段の左右手摺羽目の木彫透彫で、これまた秀逸なものである。

そのほか首里、那覇を中心とした他の寺社にも獅子像があったことは古い写真などから知られるが、現存しないものが多いのでここでは省略したい。

つぎに王族や上級士族の墓陵やその中に納められた石棺あるいは廚子ガメ等に附帯する獅子像をながめてみよう。

琉球の王陵として一般によく知られているのは「浦添ようどれ」と首里の「玉陵」である。このほかに王家に関係した墓陵として、「伊是名玉御殿」、「西の玉御殿」、「天山陵」、「佐敷ようどれ」などがあげられる。これらはいずれも、多かれ少かれ獅子像と関係のあるものであるが、なかでも特に「浦添ようどれ」と首里の「玉陵」には興味深い獅子像が残されている。

「浦添ようどれ」は英祖王（１２６０～１３００）陵と尚寧王（１５８９～１６２１）陵の二陵からなり、その獅子像というのは英祖王陵内に納められた三基と尚寧陵の一基の大石棺に施された浮彫の中に見られる獅子像である。これらの大石棺は寸法や形式に多少の違いは認められるが、総体に同じ様式でつくられたものである（およその寸法は英祖王の大石棺を例にとると横約五尺、奥行約三尺露盤までの高さ約四尺である。）



① 「浦添ようどれ」英祖王陵内の石棺の一つ

素材はすべて閃緑岩を用い、台座棺身、屋根、宝珠それぞれに、仏像や動物、花などの浮彫を施し、屋根はいずれも方桁造りの瓦葺をかたどり、その規模において、また芸術性において、琉球第一であり、その秀逸さは目をみはらせるものがある。（写真１参照）その中で獅子像が彫られた部分は台座（これは英祖王と尚寧王のもの二基だけ）と四基それぞれの屋根の隅棟上である。台座の方には一対の玉取獅子が彫られ、円覚寺放生橋欄干羽目の高肉彫獅子を彷彿させるものがある。屋根は中央に宝珠を乗せ、四隅の隅棟の先端を鳳凰で飾り、その鳳凰と露盤との中間隅棟上に各々二軀宛の獅子彫刻を配してある。この隅陳上の獅子像こそ、これまでに考えられる限りにおいて、琉球の屋根獅子の祖形ではないかとみられるものである。偶然の一致かも知れないが、まったくこれと同じ方法で屋根獅子を据えてある例が、わずかながら今日でもみられるのである。（写真２参照）

これらの石棺屋根と同形式のものが屋根だけ、尚寧王陵の墓庭東側にもうひとつおかれている。またこの種石棺が首里大中の「天山陵」にもあったとのことであるが、現在そのゆくえも知れず、その詳細についても知るすべもない。



② 屋根獅子を隅棟に据えた例
（宜野湾市愛知）

なお「浦添ようどれ」にはこれらの獅子像のほか、同石材で彫られた一対の獅子が尚寧王陵の袖積の上に飾られていたが、戦災で一軀は失われ、残りの一軀が現在政府立博物館に保存されている。

墓陵の中で最も多くの獅子像で飾られたのは首里の玉陵であろう。これは琉球最后の王統、第二尚氏（1470〜1872）の墓陵で、戦災を受ける前は多くの獅子像で飾られていた。著名なものに墓陵全体を守護する形で両袖塔上に据えられた直立形の一対があり、また国王の墓陵のみの守護として蹲距形の一対があったことが古い写真によってわかる。そのほか墓前石欄支柱上の獅子百態もよく知られている。その他の貴族の墓や、その中に納められた厨子等に附随する獅子像については、伊是名玉御殿内の二基の石厨子は勿論、「おろく大やくもい」の石棺やその墓前の石彫獅子像をもって代表させることができよう。

これまで述べてきたこれらの獅子像は、いつれも獅子像のもつ三つの性格を備えていたものとみてよいと思う。

このように建造物に附随する獅子像のほかに、貴族の生活と結びつけられるものにさらに印章等に施された獅子彫刻がかなりあることを附記しておきたい。

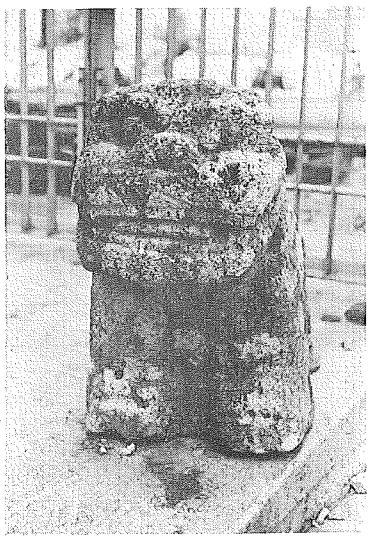
以上が貴族の生活から派生した獅子像として分類できると思う。

ひるがえって庶民の生活の中にみられる獅子像とはどんなものであろうか。これは前にも触れた通り魔除けとしての意義に最も重点がおかれたものに多い。その筆頭を飾るものが屋根獅子と部落全体の魔除けとして祀られている石製の獅子像であろう。

もっとも屋根獅子については、その起源が貴族的なものにつながり、また王朝時代は階級による住宅建築の規制もあって庶民の生活の中にはみられなかったものであるが、道教に因む民間信仰と、その他の民俗との関係からこの部にとりあげたものである。その発生、様式その他についてはさらに後述するので、ここではその位置だけを指摘しておくだけにとどめておきたい。

その発生から純粋に庶民的なものとして考えられる獅子像は地方で部落全体の魔除けとして祀られている前述の獅子像であろう。これは現存する古い具体例に乏しく、その起源や年代についての考証もむづかしいが、かなり古くからつくられたものではないかと考えられる。つまり貴族の生活の中に獅子像がとり入れられたのと平行した時代だと考えられるということである。（写真３４参照）

この種獅子像の古い例が玉城村糸数部落に三軀残されている。

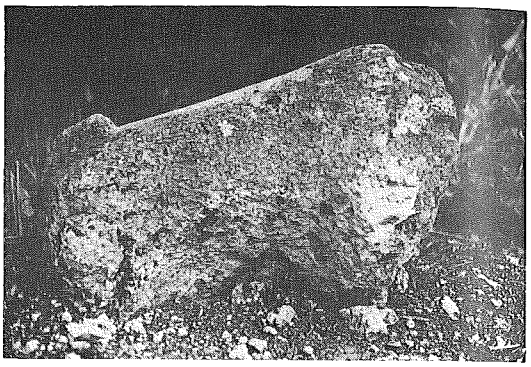


③ 部落共同の魔除獅子
（政府立博物館）

素材は珊瑚石灰岩で、同部落に通ずる三本の道路の、部落に入る手前の片方の土手の上に、外側に向けてそれぞれ一軀宛据えてある。村の古老に聞くと、部落全体のいわゆる「キリチ返し」であるとのことである。

このように部落全体の「キリチ返し」として獅子像をおく慣習が琉球全島にまたがってあったかどうかはなお研究の余地があるが、これまでの調査では、このほか与那原町字与那原、仝当添、豊見城村字仲地、離島では伊計島のものが知られている。戦前の那覇辻奥村渠の「シーサーヤー」の獅子、若狭町の「シーサーモーグワ」の獅子、「シーサーマーツー」(獅子松尾)の獅子などもこの種獅子像と同儀のものであったと思う。

屋根獅子が「キリチ返し」という意義に重点をおいて個人の家屋に用いられている事実からみて、部落共同の「キリチ返し」の獅子像はそれよりも古く発生したものではないだろうか。つまり共同の「キリチ返し」をもつ慣習が住宅事情の好転に伴い、やがて個人の家屋にもとり入れられていったというみかたである。これは屋根獅子の起源を貴族階級が用いた獅子像につながりがあるとする前言と矛盾するかにみえるが、別の意味で屋根獅子発生の一因を成していると考えられるという意味である。別の意味というのは、屋根獅子の形式が貴族的なものからきたとするなら、それを用いる民俗的な素地がすでに部落共同の獅子像にみられるということなのである。



④　部落共同の魔除獅子(玉城村字糸数)

この種獅子像の形態は琉球の獅子像中最も単純で、素材も大方荒々しい珊瑚石灰岩を用い、その素朴さにおいて、また力強さにおいてまったく独自の位置を占めてものである。それはこれらの獅子像をつくった人達が獅子造りの専門の職人でなく、したがって細かい技術にながれず気概だけでつくりあげたことによるものであろう。

庶民的なものとして、ほかに民俗芸能の中にみられる獅子舞の獅子や、つな引きの時などに用いられる旗がしらの獅子絵などもあげられる。獅子舞の獅子は魔除けであるが、旗がしらの獅子は庶民的なものとしては装飾的性格をもつ数少ない例の一つである。

以上用途やそれを用いた階層の面から琉球の獅子像をながめ、屋根獅子の位置を探ってみたが、これについてはさらに琉球の獅子像全体の様式や形式の面からの位置付けも必要だと思いながら紙面の都合もあって省略したことをことわっておきたい。

これで結論としていえることは、琉球の獅子像を用途の上からみると、1、もっぱら魔除けを目的としてつくられたもの、2、もっぱら装飾を目的としたもの、3、魔除けと装飾に重点をおきながらさらに権威の象徴としての意義も含まれたものの三つに分類できると思う。また、これを用いた階層と上記の分類とのつながりの面からみると、1は庶民の生活と深くつながり、2、3は貴族階層の間で多く用いられたものであるということができる。その中で屋根獅子は1に属するものであるという結論が得られよう。

2. 屋根獅子の起り

今日ではブロック建ての家屋にも屋根獅子を据えてあるのをたまたまみうけるが、元来は瓦葺と不離一体の形をとるものであり、また茅葺にそれを用いた例はこれまで知られていない。それで屋根獅子の起りを探るにあたって最も大切なことは琉球における瓦葺建築の歴史であろう。

これまでの歴史記録や古城址などから発掘又は彩集された資料等によると、瓦葺に改められていく過程は城棲や寺社がその先駆をなし、ついで貴族の住宅、それから一般士族と進んでいったことがわかる。王朝時代には住居に関するきびしい制限があったため、平民の家に瓦葺が現われるのは明治以降になってからである。とはいっても第二次大戦までの農漁村地域における住宅事情から推して、たとえ瓦葺がゆるされたとしてもなかなかできなかったのが実情ではなかっただろうか。

反面瓦葺にする財力は充分持っていながらこの制限のためできなかった豪農たちがいたことも事実であろう。たとえば王朝時代琉球の豪農として知れわたっていた玉城村字船越の「上門」や、現在文化財に指定されている中城村字大城の「仲村家」などがそれで、いずれも瓦葺に改めたのは明治の 10 年頃らしい。このような事実から、それまでは農漁村では屋根獅子は用いられなかったということが出来る。しかし、那覇は琉球王国の門戸としての体面上、住居についての厳重な制限はなかったとのことで、したがって財力のあるものは平民でも瓦葺の住居を構えていたであろうことは十分想像される。

このような住居に関する制限が出されたのは１５３３年のことで尚清王六年にあたる。この頃の建築状態についてその翌年、つまり１５３４年に尚清王の冊封使として来琉した明国の陳侃の「使録」によると民家の瓦葺はわずかで、あとは皆粗悪な茅葺だったらしい。その民家の瓦葺というのもおそらく顕貴の家屋をさしたものであろう。それからおよそ２世紀後の１７１９年に尚敬王の冊封副使として来琉した徐葆光は久米村の大夫でも茅葺に住む者が多いと、その著「中山伝信録」に記述しているという。（沖縄一千年史 P.300）

また球陽によると首里城を瓦葺に改めたのは尚貞王時代の１６７０年で、それまでは国殿や官室棲台すべて板葺であったことがわかる。もっとも、首里城の瓦葺建築については、古瓦研究家によって、１４世紀頃琉球に導入されたと考えられている高麗瓦が西のアザナ附近から採集されていることからみると、その一角にはそれ以前にすでに瓦葺があったとも考えられる。

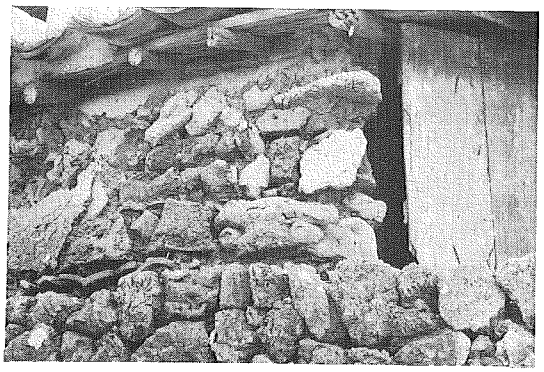
尚貞時代（１６６９年～１７１０年）には首里城のほか臨海寺や崇元寺、宮古、八重山の公蔵及び桃林寺も瓦葺にあらためられている。

琉球で最も古い瓦葺があったと知られているのは浦添城である。これは尚思紹王統（１４０６～１４７０）が起った以前の王城で、その古城址から多量の高麗瓦が発掘又は収集されている。前述の首里城出土の瓦と同種のものである

浦添城に瓦葺の城棲が現われたのは、いろいろな史実からみて察度王代（1350～1396）ではないかと考えられる。この時代に始めて朝鮮と通交したことが史実にみえるからである。（1389）察度王代というのは、また別の意味でも琉球文化に大きな転機をもたらした時代で、1372年に始めて明朝にも入貢し、1385 年には琉球三山に海舟が与えられ、1392年には閩人三十六姓の渡来があった。

察度王代はこのように積極的な外交政策を展開し、朝鮮、中国の文物がとり入れられ、在来の琉球文化に多くの刺激をあたえた時代であった。後代の琉球文化隆盛の基礎は疑いもなくこの時代に固められたともいえる。なかでも閩人三十六姓の渡来はその意味できわめて重大な意義をもっもので、中国の文物はほとんど彼等を通じてもたらされたといっても過言ではない。獅子彫刻にしても例外ではなかろう。

さて、以上述べてきた瓦葺よりも更に古いものがあるかどうかであるが、これについては依然製作年代に疑問を残している前述の英祖王陵内の石棺屋根の瓦葺をかたどった彫刻がある。これをいま仮に英祖王が墓を造った年代と同じだとすれば1264年で察度王代から約一世紀も古いことになる。



⑤　石壁に利用された漆喰製獅子頭
残欠（那覇市壺屋　新垣栄世氏宅）

以上瓦葺の歴史の概略を述べてきたが、これは瓦葺の建物が現われたからといって直ちに屋根獅子が用いられたとする意味ではない。反面瓦葺に先行する板葺の時代もあったことが史実に明らかであるので、この時代に屋根獅子とつながるものが全くなかったともいいきれない。

そこで、今日の屋根獅子を起点にしてそれに至るまでの過程を逆に辿りながら、その起源を追ってみたいと思う。

屋根獅子は素材の面からみると二種に分類できる。ひとつは屋根瓦の破片などを骨組にしながら漆喰で肉付けされた塑像で、今一つは陶製のものである。屋根獅子の大部分は前者、つまり漆喰製塑像で、陶製のものは土地がら壺屋で多く用いられ、地方ではまれにしかみられない。また陶製のものは釉薬のかかったものはわずかで、素焼のものが圧倒的に多い。

現存する屋根獅子の中で最も古いと思われるものが現在壺屋に二例残されている。ひとつは壺屋町131番地の新垣栄世氏の「前の屋」の石垣にはめ込まれた屋根獅子の残欠で、もうひとつは同じく壺屋町130番地の小橋川永仁氏宅の屋根獅子がそれである。

新垣氏宅の「前の屋」の石垣というのは石壁を兼ねたもので、その上に屋根を乗せたものである。この石壁は石と土とで積み上げられ、当初は表面に漆喰塗装が施てされていたとのことだが、最近になって風雨でそれが剥落し、獅子頭の残欠が石代わりに用いられていることがわかったとのことである。この残欠は焼物ではなく漆喰製の塑像で、下アゴは失われ、顔面の上半分が外部に露呈し、目や鼻や耳の一部がみられ、一見して獅子頭の残欠とみとめられるものである。（写真5参照）新垣氏によるとその石壁の建物は少なくとも120年から150年はへており、この獅子像残欠も建物と共に古いものとみてよいとのことである。これは素材が漆喰であるところからみても屋根獅子として用いられたことに間違いはないであろう。

小橋川氏宅のものはいわゆる「チブルシーサー」で寸分の損傷もなく、よくその原形をとどめ、小橋川氏宅の屋根に今でも据えられている。これは小橋川氏の親戚で、戦前からこの種獅子づくりの専門陶工としてよく知られていた国場真一氏（先年亡くなられた）が、この屋根獅子を百年以上の古いものであるとの鑑定をしたという。この鑑定のよりどころは、小橋川氏によると、壺屋で古くからこ

の種獅子像と南蛮ガメを専門にしていた屋号「ミーシチ小」（新屋敷小）の窯から出たものであるということにあったらしい。（写真6参照）

博物館にも戦前のものが数例あつめられているが、年代についてはまだ明らかにされていない。



⑥　素焼チブルシーサ（那覇市慌屋小橋川氏宅）

ここで、上記の二例によって、明治以前にも今日の屋根獅子に類するものがあったことが明らかになると思う。もっともこれはきびしい住宅制限のない那覇や、首里の士族の家屋に限られていたものと想像される。

では、さらに古いものに目を転じてみよう。さらにふるいものというのは、これらの屋根獅子と同形式のものという意味でなく、それとつながりのある。いいかえると屋根獅子が派生したと思われる獅子像ということである。それは端的にいって、厨子ガメ類に附帯する装飾獅子群である。琉球の厨子ガメ（骨壺）は屋根獅子とならんで、琉球の文化を特色づけるもうひとつの素因をなすものである

琉球における墳墓構築と厨子製作の歴史はそのまま琉球の人々の先祖の霊に対する信仰の深さを物語るものであるが、反面それは琉球における貧困な住宅事情を微妙に反映させたところもあるように感じられる。それは厨子のほとんどが御殿や寺院を型どったものであるということにみられる。つまり生存中は粗悪な住居にあっても、後生は御殿のような立派なものに入りたいという願望のあらわれとしてとれぬこともないということである。

また墳墓についてもそのことわざに「かーらかやぶちや　かりやどゞやゆる、ふんしまちがねやいちむいちまでん」というのがある。瓦、茅葺の家屋は仮の宿でしかない、お墓こそはいついつまでもという意味である。お墓は立派に建造すべきことをさとしたものであろうが、強調のため瓦葺までも軽んぜられているような印象も受ける。しかし本音は逆であろう。つまり住宅などは貧困のため一人の力ではどうにもならないという諦観がみられるのである。　その点墳墓は門中あるいは友人などが寄合って共同で造営出来るという、より現実的で、実現の可能性のあるものであったためではないかと考えられる。もっとも首里、那覇、あるいは地方によっては家族単位で墓をもっているところもあるが、これは後代になってから現われたものではあるまいか。

さて、この辺でまた厨子にもどろう。

琉球の厨子は、わずかな特例 — たとえば運天港古墳内の木棺等 — を除いて、材質の上から大きく二種に分けられる。石厨子と焼物の厨子である。

これは形の上からみると、石厨子には方桁造りと入母屋造りがある。しかし、方桁造りは前に述べ

た「浦添ようどれ」のわずか数例に過ぎず、他はすべて入母屋造りでまたほとんど装飾は施こされていない。これらの石厨子は一般に「イレジーシ」又は「ヤカタージーシ」とも呼ばれ、年代は相対的に焼物の厨子に先行するものと考えられる。ただこれら石厨子と併行して外来のルソン南蛮と呼ばれる焼物の壺が厨子ガメに代用された形跡は古墳などにみとめられるが、これはしかし、あくまでも代用であって、分類の上からは問題にさるべきものではなかろう。

焼物の厨子も形や焼方の上からまた数種に分類できる。これは一般に総括して「ジーシガーミ」と呼ばれているもので、ほとんど壺屋で焼かれたものである。古我地窯でもかなり焼かれたらしいことは、その窯跡から出る破片で知られるが現物に接する機会は少ない。

壺屋で焼かれたものは、素焼のものと釉薬のかかったものの二種があり、壺屋では焼方の上から素焼を「荒焼」、釉薬を施こしたものを「上焼」と呼んでいる。これらを総括して形の上からみると「家型」と「壺型」に大別される。家型は御殿又は寺院をかたどったもので「ウドウングワジーシ」又は「ヤカタージーシ」と呼ばれ、その屋根は入母屋造り又はその変形が大部分を占めている。

壺型は、装飾の施こされたものを「カーラジーシ」、装飾のないものを「ボージヤージーシ」と壺屋では呼んでいる。カラジーシの名称はその質感から、ボージヤージーンの呼称はその装飾のないところから出たものであろう。

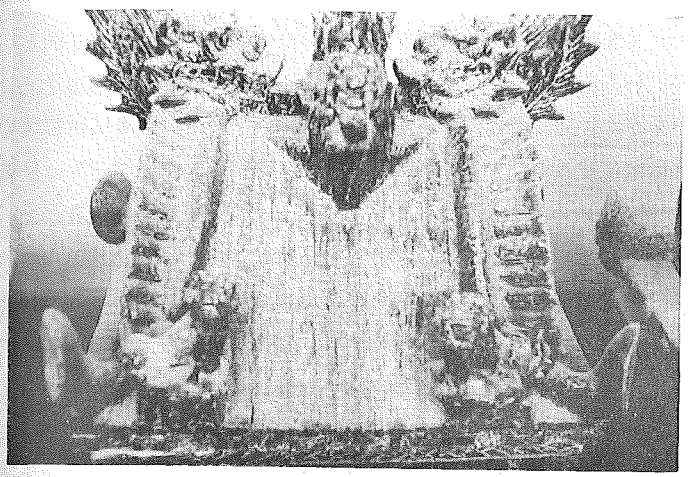
これらの厨子ガメの中で屋根獅子と関係があると思われるのは「ウドウングワージーシ」と「カーラジーシ」である。石厨子も潜在的にはつながりがあるとみられるが、ここではとりあげないことにした。

琉球では厨子に卒去年月日と洗骨年月日をしるす慣習があり、これは研究家にとって都合のよいことである。それを通してその厨子の製作年がほぼ推定できるからである。



⑦　素焼ウドウングウージーシ　（糸満町字糸満）

いま、琉球政府立博物館に各地から集められた厨子が７０余点あるが、石厨子を別にしてウドウングワジーシと呼ばれているものを調べてみると、上焼よりも荒焼のものが比較的に年代が古い。しかも、年代の古いものは総体的に装飾が簡素であるという共通した特徴っていることがわかる。同様のことが上焼についてもいえる。さらにその屋根の装飾の方法にも共通した点が二つみられる。ひとつは屋根を鴟尾をもって飾ってあるということと、今一つは前面、背面の下り陳の先端に鬼瓦をかたどった獅子面を配してあることである。その古い例の一つに「乾隆甲申」（１７６４）洗骨の記録のある親方部（上級士族）の素焼の厨子がある。逆算してみると今から２０６年前のもので、これまでみてきた厨子ガメから推して、このあたりがこの種厨子ガメがつられはじめた年代ではないかと考えられる。その屋根は入母屋造りを象徴的にあらわし、前面、背面に各一対の獅子面を配してあるのは、やはり首里城正殿からヒントを得たものと推測される（写真７参照）



⑧　上焼ウドウングウージーシ屋根獅子（中央と隅棟左右）

これから時代がやや下ると釉薬のかかった上焼が現われ、その形態も屋根を二層にするとか、瓦葺を表わす刻紋を入れるとかいくらか変化をもたしてある。しかし、棟の両端を鴟尾で飾り、下り棟に獅子面を配する形式に変わりはない。ただこれらの装飾のほかに、あらたに屋根の前面中央に龍頭を配してあるのが注目される。

これが百年前後のものになるとこれまでの形式を基礎にしながらも、屋根の形態も複雑になり、装飾もやたらと増えてくる。たとえば厨子ガメ全体を三層に型どり、その１２の隅棟先端にそれぞれ獅子面を配するだけでなく、胴部の中央上部にも獅子面を置くなどである。これらの獅子面の数は、最上部の下り棟上対のほかにである

このあたりからはっきりと厨子ガメにおける獅子面が装飾としてばかりでなく、魔除けとして強く意識されながら用いられたことがうかがえると思う。すなわち、今日的屋根獅子への転身の過程の一端がのぞかれるというわけである。

ここで想起されるのは壺屋で焼かれた前述の屋根獅子であろう。

壺屋の陶工達の話によると、屋根獅子の古いものは「チブルシーサー」と呼ばれ、胴体はなく、頭部だけのものだったとのことである。胴体のついたものがつくられるようになったのは後代になってからしい。このチブルシーサーの形式は、それがつくられた地域が壺屋であり、厨子ガメがつくられたのと一致するところから、おそらくこれらの厨子ガメにみられる獅子面からの発想であろうと考えられる。

このことを裏付けるかのように厨子ガメの屋根の形態や装飾が更に変化していくことが注目されるそれは明治の末期から大正、昭和の初期頃につくられた厨子ガメの屋根前面中央には蹲踞形の獅子像を据えてあることである。（写真８参照）これはチブルシーサーでなく、今日の屋根獅子と同形のも

ので、明らかに今日の屋根獅子につながる形態を意識してつくったものと考えられる。その形態はおそらく、前に述べた城門や寺社の門前等に据えられた獅子像からきたものであろう。因みにこの頃は、今日壺屋で盛んにつくられている置獅子は、まだ多くはつくられていなかったようで、これが大量につくられるようになったのは昭和の初め頃らしいということは、この頃の厨子ガメの獅子が、厨子ガメから独立して今日の置獅子に変っていったという見方も成り立つということである。

カーラジーシの場合は、形が壺型であるため、屋根を写実的にかたどることは出来ないが、象徴的に方桁造りの瓦葺をあしらった陰刻が蓋に施こされている。その蓋の周囲に四乃至は六つの獅子面を配し、前面中央に龍頭を据える形式である。身の方もその九分目位のところで襞裙を出し、それに瓦葺屋根の陰刻を施こし、四方に向けて獅子面を配してある。博物館にはこの種のカーラジーシで1850年代のものが四、五基あつめられている。

このように厨子ガメに獅子面（ここでちよっと留意していただきたいことは、これまで獅子面という表現をとってきたが、これは普通にいう面の概念ではなく、獅子頭ともとれる半立体的なものであるということである）を配するというのは、前にも述べた通り王宮や寺院にならったことは自明であり、その形式上の具体的な発想は首里城正殿によるものであろう。それはさらにさかのぼって、首里の「玉陵」の塔上獅子一対にもつながるものと考えられる。

また「浦添ようどれ」の石棺屋根獅子群もみのがせない。これについては前にもふれてあるのでここでは省略するが、ただ、この石棺の屋根獅子配置の様式は古いものには例がなく、まったく独自の位置を占めているということだけを指摘しておきたい。屋根獅子とのつながりもまだまだ究明する余地があり、またこれらの石棺全体についても多くの研究課題が残されている。

さて、屋根獅子の起源について、これまで述べてきたものをまとめると、屋根獅子の起源と形式の上でつながりをもつものとして、王宮や寺院又はそれを型どった厨子ガメに附帯する獅子面があるということと、今日の屋根獅子の様式が現われたのはそう古くはなく、大体１８世紀後期から１９世紀初期にかけてではないかと推定されるということである。また、それを生む民俗的な素地は、察度王代（１４世紀後期）に渡来した閩人三十六姓によってもたらされたとみなされる中国の文物（特に道教と獅子像）と沖縄個有の民俗との結合にすでにその芽生えがみられ、部落共同の「キリチ返し」の獅子像などその好例の一つにあげることができるということである。

なお、ここで漆喰塑像についても触れるべきであるが、その発生は焼物のあとだとみられる点があり、つぎの「様式」や「つくり手」の項でその都度とりあげていきたいと思う。

3　屋根獅子の様式、形式、素材

これまでの調査結果から、屋根獅子には大きく分けてふたつの様式があることがわかる。
ひとつは頭部だけのいわゆる「チブルシーサー」とその系統のもので、のちに胴体がついて蹲踞形にかわっていく焼物にみる様式である。この様式の特徴は、とくに彫が深く、形も精緻をきわめ、勇猛な表情をもっているところにある。

これは屋根獅子の起源の項でもみてきた通り、貴族の生活の中に派生した獅子像からきた様式で、依然その面影を豊富に残こしたものである。その面影は顔面におけるそれも勿論だが、とくに鬣の表現に顕著にあらわれている。

琉球の古い獅子像にみる鬣は、様式の如何にかかわらず、おしなべて様式化された捲回の形で表現されるのを常としているが、それがこの焼物の屋根獅子にも及んでいるということである。因みに漆喰製の屋根獅子では、この様式はくずれ、つくり手の個性又は技術に応じて、まちまちの表現形式をとるようになるのである。

胴体をつけるようになってからも顔面にみられるこの様式の特徴は消えず、胴及び四肢の表現も力動感があり、俊敏な感じを甚えているものである。

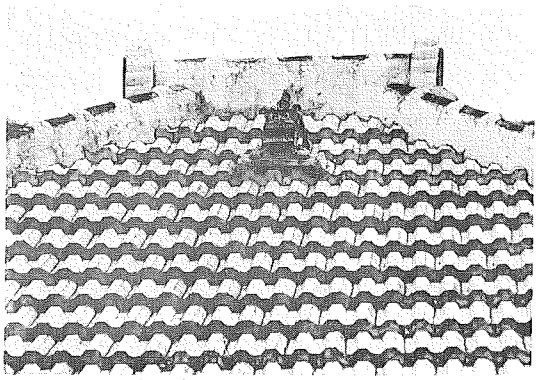
屋根獅子におけるもうひとつの様式というのは漆喰製の塑像にみられる様式である。漆喰製の塑像というのは、前にも触れておいた通り屋根瓦の破片等を心に用いて漆喰で肉付し、単彩を施こしたものである。ここでその様式について述べる前に、その発生の素因にしばらく目をむけてみよう。そうすれば自らその様式のおよその輪郭が明らかになってくると思うからである。

まづ、その発生に因んで、明治以降瓦葺の家屋が増加するにつれ、壺屋の荒焼窯の職人達の中から瓦工へ転業するものがあった（小橋川永仁氏談）ということに注目したい。というのは、この職人達が瓦葺のムチゼーク（漆喰左官）を兼ねて、各地で漆喰製塑像をつくりはじめたと考えられるからである。

これらの職人達は、壺屋では必らずしも獅子づくりの専門ではなかっただろうが、少なくとも身近にそれを見聞し、その形に対する概念は一般の人達より明確にもっていたものと考えられる。しかし概念はあくまでも概念であって、具体的な経験や技術を伴わないと、いざ自分でつくるという段階に出あうとその原形はかなり狂ってくる。しかもそれは職人が変れば変ったなりに出てくるものなのである。このような事情を反映させたところが漆喰製の塑像にはみられるのである。しかもそれがこの屋根獅子における特徴になっているようにみうけられるから愉快である。こうみると、漆喰製の塑像は前述の焼物の蹲踞形の屋根獅子の後を追ってあらわれてきたことが明らかになろう。つまり、この様式は新らしい社会現象に見合う職人の転業の段階であらわれてきたものとすることができるということである。

この推定を裏付けるものとして、それをつくる場合の技術の一つをあげることができる。それは、漆喰で肉付けして塑像が出来上ったあと、瓦片と瓦片を摺って瓦粉をつくり、これで胴や四肢の白い漆喰の部分を赤く彩色し、いかにも焼物らしくみせようとする努力がなされているということであるこのことは同時に、これが焼物獅子の即製的代用品的性格をもつものであることを裏付けるものでもあろう。

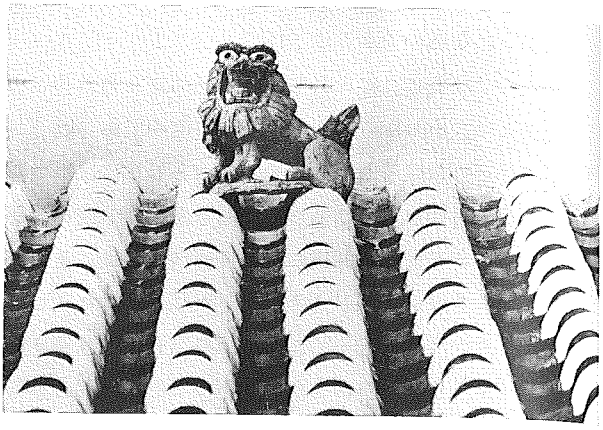
さきに屋根獅子の起源の項で、壺屋の新垣栄世氏の「前の屋」の石壁の漆喰製の獅子頭残欠について触れたが、その様式は外に露呈している部分から推してチブルシーサーの系統に属するもので、ここでいう漆喰塑像の様式には入れられないものである。しかし、素材が同一だということは注目に値しよう。というのは漆喰を素材にして塑像をつくるとい



⑨　漆喰製屋根獅子

う技術が明治以降ではなく古くからあったという事実をみせているからである。

ではこの辺で漆喰製屋根獅子の様式上の特徴とはどんなものであるかを眺めてみよう。全体的な形は前に述べた焼物で四肢のついたものに順じ蹲踞正面又は横向きの形式をとり、頭部の彫の深さも焼物の様式にならうが顔面の表情は勇猛というよりユーモラスなものを感じさせるところに特徴がある。一見勇猛な感じをあたえるが、ゆっくりながめていると次第にユーモラスな面が浮かび上ってくるのである。たとえば大きく開けた口は下駄の歯を思わせたり、（写真９参照）不均衡にとび出した両眼は眼球が大きいためサングラスをかけているように見えたりするのである。（写真１０参照）いいかえると統一された様式らしいものはみられず、ひとつびとつが違った表情をもっているということである。つくった本人は獅子のつもりでありながら、犬や狼になったり、はては人面にみまがうものもとび出してくるしまつである。（写真１１参照）この様式の屋根獅子の特徴は、一口にいえば稚拙の美、というより面白さであり、不均衡からくるたのしさである。



⑩　漆喰製屋根獅子

また、頭部がこのように変化に富むにもかかわらず、胴や四肢に動きが乏しく、概して平面的なものであることや鬣もこれまでの様式とはちがい、捲回せず、不定の直線又は曲線の交錯によって表わしているのもこの様式の特徴としてあげられる。

以上、屋根獅子におけるふたつの様式について述べてきたが、つぎにこのふたつの様式にみられる共通点をあげながら、その形式等を追ってみよう。

この両者にみられる第一の共通点は、すべて開口の形式をとり、しかも他の獅子像に比較して特に大きく、他の部分との比率が不均衡であるということである。これは魔除けとして威嚇を目的としたところから必然的に生まれた形態であろう。（琉球の獅子像における開口、閉口の形態については、前号の館報、研究録掲載の拙論「琉球の唐獅子雌雄考」を参照されたし。）

第二は、開口した形態でありながら球を配してある場合が多いということである。獅子像に球を配する形式は他の琉球の獅子像では閉口のものに限られたもので、開口の形態に球を配してあるのは、これまでの調査では皆無に等しい。

獅子像のもつ球には、普通紐がついており、また、技術の細かいものになると花模様の浮彫などを施こしたのもある。

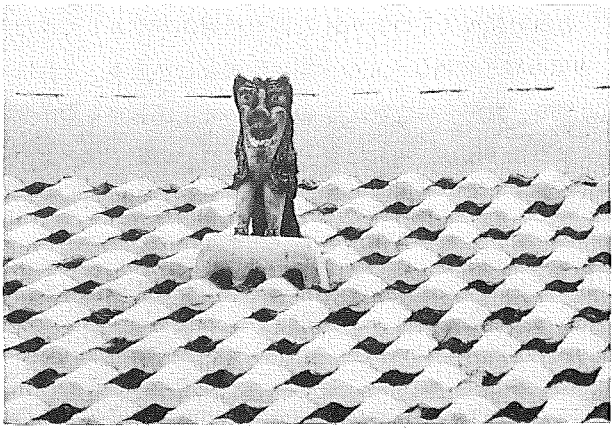
これから推して、それは明らかに毬をかたどったものであるということができる。この毬と龍に配される珠と、時に混同されやすいが、これは明らかに区別さるべき性質のものであろう。なぜなら、龍に配される珠には花模様などを付すことはないからである。

この龍の珠について、中国の学者（杜而未著「鳳麟亀龍考釈」、中国古装建築師陳哲雄氏の訳による）によると、それは元来月を表わし、月は風雨を生むと信じられ、龍神がそれをのむとその神通力

が得られるところから宝珠とみなされるようになったとのことである。つまり龍に配される珠は月をかたどった宝珠であり、風雨を生む神通力をそなえたものと解釈されるということである。

屋根獅子における珠は、はじめは毬のつもりであっただろうが、いつしかそれが混同されるようになったのではあるまいか、なぜかというと屋根獅子に配されるこの球体の形を一般に「タマ」と呼び「マリ」とは呼んでいないからである。屋根獅子が手毬とじゃれるという形式より、龍の珠を配して神通力をあたえるという発想が、より屋根獅子的であり、また実利的ではあるまいか。

しかし、そうはいっても、今日でも依然として毬を象徴するような形式がないわけではない。例えば、瓦葺の軒に使われる「花瓦」を「タマ」の代わりに配する形式があるが、これなど、毬の表面に施こされた模様を意識して代用したものととれぬこともないということである。（写真１２参照）なおまた、その花瓦の模様が牡丹の花であれば（この例は多い）、これを前に述べた「獅子に牡丹」の形式と毬とを抱き合わすという着想もあったのではないかと思われる。これをただ単に、あるいは偶然に、その家の「花瓦」が牡丹模様だったからというだけで片付けるのはちと乱暴であろう。莫然としながらもそれをつくった職人には、少なくともこれような古い形式に対する意識が働いていたと考えるのが妥当であろう。



⑪　漆喰製屋根獅子（宜野湾市愛知）

4　屋根獅子のつくり手、及び分布と用法

古い屋根獅子のつくり手が壺屋の陶工たちであったことは前に述べた通りである。これについて、古い様式の屋根獅子（チブルシーサー）を現在でも専門につくっている壺屋の島常賀氏（６８才）やその他の陶工達の談をまとめながら記録の意味も含めて述べてみたい。

壺屋の村は、他の沖縄の村々と同じように、戦前西（イリ）東（アガリ）に分かれ、東は上焼専門で、西は荒焼専門であった。そして壺屋には四つの種類の窯があって、所有している窯の種類によって、上焼屋（ジョウヤチヤー）、荒焼屋（アラヤチヤー）、窯小焼（カマグワーヤチ）、赤物（アカムヌー）という呼称で陶工たちは呼ばれていた。この四種類の窯は、それぞれ規模や形式の違うもので、上焼屋の窯は登窯様式の袋窯で、荒焼屋のそれは登窯様式のトンネル窯、窯小焼は荒焼窯の規模も小さくしたもの、また、アカムヌーの窯は今日の石灰を焼く窯の結構に以たものであったという。

上焼窯はいうまでもなく釉薬のかかったものを焼き、今日でもその伝統は連綿として続いている

また荒焼窯は、今では一基だけしか残っていないが、明治３６、７年頃にはその窯数およそ４０にも及び隆盛をきわめていたとのことである。この窯で焼かれたものは、方言で「カーミ」と呼ばれ

ている穀物や酒、味噌などの貯蔵に用いられた素焼の壺類、水ガメ類等が主であった。ここで注目すべき点は、この窯こそ屋根獅子やお獄用の魔除獅子等が、注文によって、焼かれた窯であったということと、いまひとつは、時には屋根瓦を焼くこともあった（小橋川永仁氏談）という事実である。これに関連さして、前に壺屋の陶工たちから瓦工に転業するものが出たと述べておいたことを想起していただきたい。

窯小焼では、「ミジクブサー」（一種の手洗鉢）一人用の「ボージヤージーシ」など比較的小さい品物が焼かれたが、この窯でも獅子はつくられたらしい。

アカムヌーの窯では、「サークー」（土釜）、「ヤックワン」（土瓶）、「フイールー」（火炉）など、いわゆる小物が焼かれたという。くりかえしていうまでもないが、これらはすべて素焼である

これで屋根獅子の焼かれた窯の位置が判然としてきたと思う。

壺屋の獅子焼物は大正の末期に転機をむかえる。それは本土より陶芸研究のために来島したといわれる黒田、益田、二之宮氏等のすすめで上焼窯でも獅子像が焼かれるようになったということである。上焼の獅子像は、それ以来今日に及び、いまではどこの上焼窯でも立派なものがつくられ、装飾用の置獅子としてだけでなく、屋根獅子にも用いられている。

それ以前、つまり明治から大正にかけて、獅子像（主に屋根獅子とお獄用獅子）をつくったものとして壺屋の陶工達の間で記憶されているものに、カマニーグワ（窯根小）とか、クシンヤーグワのジラー（次郎二姓高江洲）、ミーシチグワ（新屋敷小二姓島袋）、メーデークグワ（姓高江洲）などがある。

その中で「窯根小」は壺屋の窯元である「窯根」の分家で、小橋川永仁氏の記憶によると、この家の主人は花瓶類に盛付（方言で「タックワサー」）で獅子や牡丹、龍などもよくつくっていたように憶えているという。小橋川氏の小さい頃というから大正の末期であろう。

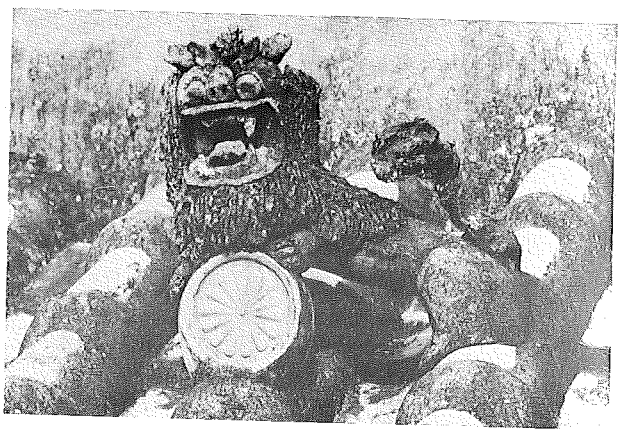
また、島常賀氏の話によると、メーデークグワの主人は屋根獅子やお獄用の獅子を専門につくるかたわら、よく詩歌を詠み、首里人士とのつき合いも深い才人であったが、尚泰王崩御の際妻と共に殉死した変り種であったらしい。

それ以後獅子づくりの名工として知られた人々に屋号安里の主人（姓高江洲）や国場真一氏（共に故人）があり、今日では、荒焼の屋根獅子を専門にしておられる島常賀氏、また上焼では各工房で働いている若手の陶工達があげられる。

ひるがえって、漆喰製の屋根獅子をつくって人達に目をむけてみよう

これについては前にも部分的に触れておいたので多くを述べる資料はないが、首里山川町３の３１番地の翁長良昌氏（６３才）の話をもとにいま少しつけくわえてみたい。

（翁長氏はムチゼーク（左官）とし



１２　漆喰製屋根獅子　（大里村目取真）

て４０余年の経歴をもつこの道のベテランで、自ら屋号を「観音堂からやー」とし、この仕事に誠意と誇りをもちつづけてきた生粋の職人である。同氏の想い出話の一つに、戦前の左官は自分がやった仕事は、２、３年は責任をもち、大雨や暴風などのあとは必らず検分にでかけていったのだという。）

沖縄では古くから瓦をつくり、瓦屋根を葺き、それを漆喰で固めていく職人及び大方これ等の人々で構成されていた部落を、総括的に、又は個別に「からやー」と呼んでいた。

戦前は、その中で「那覇からやー」と「首里からやー」がよく知られていた。那覇からやーは、今の那覇高等学校グラウンド西側にあった部落をさしているが、ほかに牧志部落にもあったらしい

首里からやーというのは、元来観音堂北側の大通り下の部落のことで、行政区画上は山川町になっている。首里にも、もう一つ鳥堀にからやーがあったらしく、どちらも首里からやーと呼ばれ、まぎらわしいのでこれと区別するため、翁長氏は自ら「観音堂からやー」と呼びならしているという。

観音堂からやーは近年（戦後も含めて）まで部落のほとんどがこれらの職人で占められていたが、今では本職の職人は二、三名しか残っていない。この部落には、翁長氏が七八才の頃まで、部落東端に瓦焼窯も残っていたという。年数にして今から５５年位前だということで、大正の初期にあたる。この事実からみて、この時期を前後する頃から「からやー」というこれまでの総合的な性格から、はっきりと職業的に瓦づくりと左官の分業がはじまったのではないかと考えられる。

したがって、漆喰製屋根獅子づくりのにない手は、それ以前は「からやー」と呼ばれた職人達で、それ以後は「ムチゼーク」と呼ばれている瓦葺屋根左官達であるといえる。勿論このニ者は本質的には同一の職人なのである。

これらの職人のなかでも実際に屋根獅子をつくった人達は、大方棟梁で、屋根葺の最后の仕上げとして、一、二時間の短時間でつくりあげてしまうのである。屋根獅子を据えるかどうかは家主の希望にもとづくが、その方角については、家主の希望によるときもあり、またつくり手にまかされる場合もあるという。

翁長氏によると、屋根獅子を向ける方角はだいたい三ケ所になっているという。すなわち、「キリチ返し」のための方角と、艮（東北）、午（真南）の方角である。

この中で最も多いのが「キリチ返し」のための方角で、これはその屋敷に突きあたる道とか、その家の門に向けたり、あるいは周辺の「風水」をみて向けるものだという。屋敷に突きあたる道に向けるのは「石敢当」に順ずるし、門に向けるのは「ヒンプン」と同義であろう。「風水」というのは、元来墓地を決める際の吉凶をみるもので、屋敷には用いられないものだが、いつしか屋敷にも適用されるようになったものであろう。

つぎは艮と午（東北と真南）の方角である。艮は「うし、とら」の方角ともいわれるが、沖縄では「カジヌニー」（悪風の根？）と呼ばれ、いわゆる「鬼門」である。鬼門について講談社の大辞典によると、「萬の鬼のあつまるところ、東北の隅。隋書に、「廻風従昆地鬼門来」とあり、陰陽家にて萬事につけ忌み避くべき方向．．．」と説明されている。また、易断の家相の説明によると、この方角に門を構えると「病人が絶えず子孫断絶す」とある。けだし鬼門と関係するものであろう。

艮（真南）に向けるというのはどういう理由によるものか、明確な説明は得られなかったが、これまた易断の家相の説明によってみると、この方角に門を構えれば「火難」にかかりやすいと説明

されている。あるいはこれとつながりがあるのではないか。つまり、屋根獅子を「火伏」としてこの方角に向けるという解釈である。

このように、屋根獅子の向く方角については、道教や易などがからまり、その方面（民間信仰）からのアプローチも必要であるが、浅学菲才のいたすところ深く触れ得ないのを残念に思うものである。この道の専門の方々の研究に期待したい。

さて、最后にその分布を眺めてみよう。

これまでの調査では、屋根獅子は南部に集中して多く見られ、中部、北部にいくにしたがって少なくなる。たとえば南部の真壁村などは、屋敷内にある棟違いの瓦葺全部に獅子を据えるとか、また、一棟に二体据えるという例が多く、屋根獅子の置かれていない瓦葺をみつけだすのに苦労するくらいである。それにひきかえ、北部、例えば、金武村の金武、並里部落を例にとると両部落の瓦葺棟数二、三百棟ありながら、屋根獅子はわずか四、五体しかみられない状況である。もっとも古老の話によると、戦前はかなり屋根獅子は用いられていたというから、これは戦後の現象らしい。

戦前は、さきの翁長氏の話によると、屋根獅子が最も盛んに用いられたのは、都市地区では垣之花、泊、地方では漁村が多かったという。漁村に屋根獅子が多かったというのは、農村に比較して瓦葺が多かった事情にもよると思われるが、戦前戦後を通じ、このようにその分布に濃淡がみられるのは、明らかにいろいろな社会的乃至は民俗的要因が潜在するためだと考えられる。この面についてはさらに調査を続けていく計画をもっているので、この辺でこの稿を一応閉じたいと思う。

以上、琉球の屋根獅子を史的な立場から眺めてきたが、前でも折にふれ述べてきたように、これで琉球の屋根獅子を語りつくしたとはさらさら考えていない。まだまだ多くの面でいい足りないこともあれば、また、記述や推定に誤謬もあろうと思う。その点諸彦の御教示を望んでやまないものである。

当館所蔵石器の紹介

玉　城　盛　勝

◎　屋良城採集石器

屋良城は、沖縄本島の嘉手納村字屋良にあり米軍嘉手納飛行場の北方にある。
琉球国由来記によると、その城内に屋良城之嶽があり神名「笑司ノ御イベ」が祭られている。（注1）
この採集石器は上江洲均氏が御嶽内で採集したものである。

図1　小形の石斧で全面研摩がほどこされている。上部には破損痕がある。刃部は両面から研ぎ合わせた蛤刃状になっている。

図2　石斧で全面研摩がほどこされている。上部は使用中に折れたと思われる。刃部は両面から研ぎ合わせたきれいな蛤刃状であったと思われるが使用によって摩滅して厚刃状になっている。

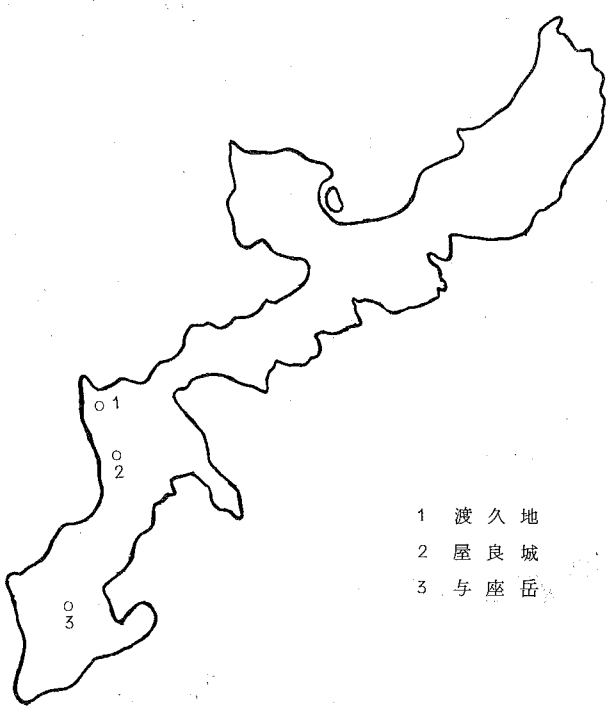
◎　読谷村渡具地採集石器

読谷村字渡具地で採集した石器である。
現在の字渡具地は戦後米軍基地設営のため移転させられた村落で以前は海岸に面していた。
発見は１９５５年１０月２３日多和田真淳氏によってなされ、同氏の調査は「読谷山村渡口の海浜にある貝塚で川田原式尖底土器が出土する。」旨報告している。（注２）
この石器は同貝塚地域から池原和夫氏が採集したもので上江洲均氏を経て寄贈されたものである。

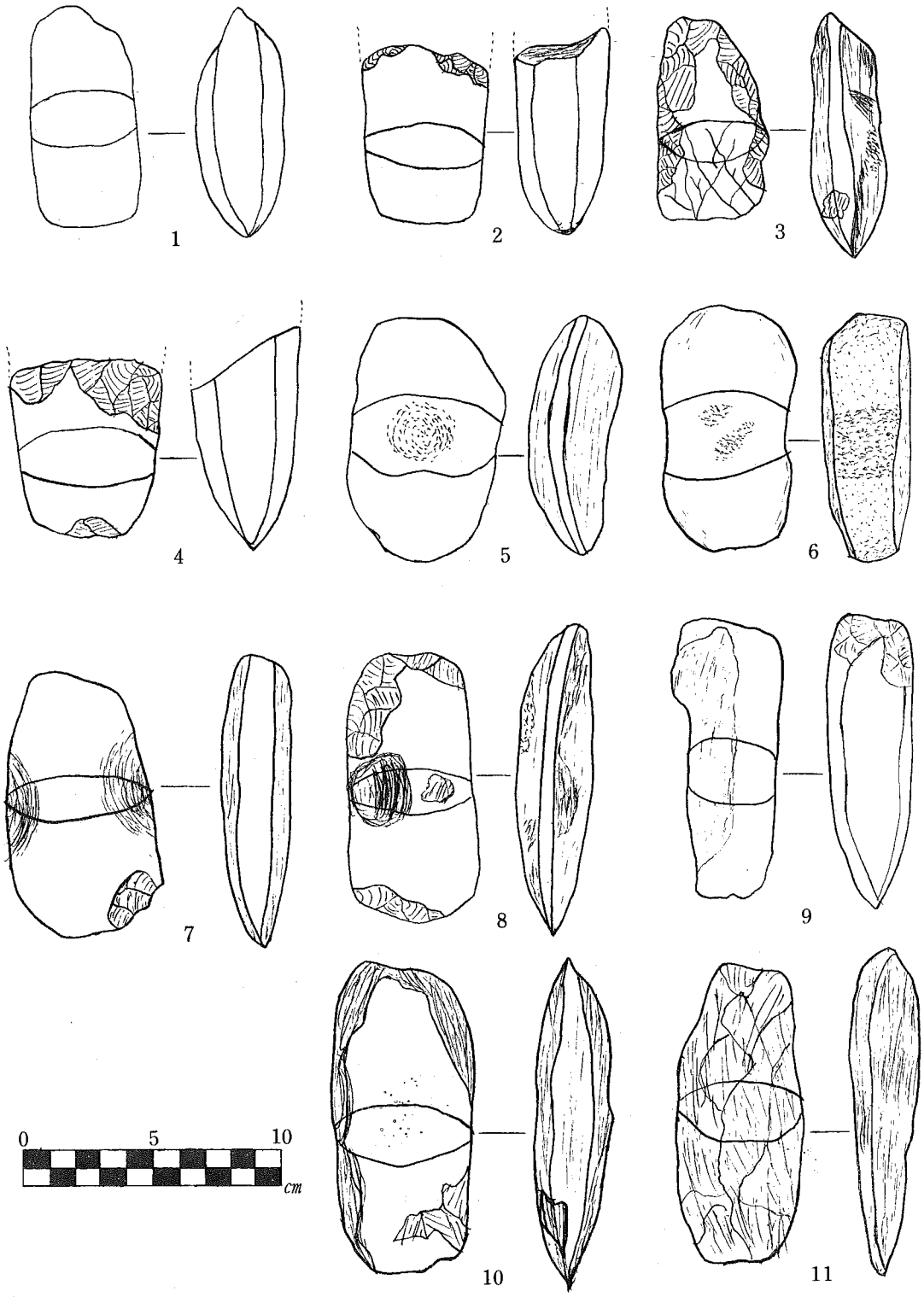
図3　石質がもろいためか両面とも粗雑な面のまま簡単な研摩がなされている。刃部は両面から研ぎよせてはいるが裏側からはあまり研いでなく片刃状を呈している。

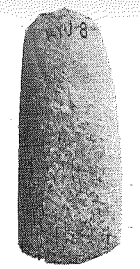
図4　全面研摩された石斧の刃部である。
刃部は両面から研ぎ合わせた蛤刃状を呈し、使用の破痕が認められる。
上部が欠落しているため、その全体の形は推測することができない。

図5　砂岩質の凹石で小形のものである。自然に風化された小石をたたき石として使用したものと考えられる。



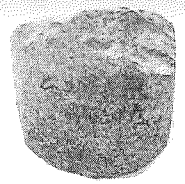
1　渡久地
2　屋良城
3　与座岳

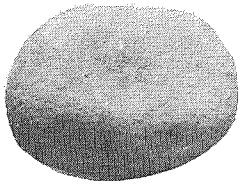

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
5
10
cm

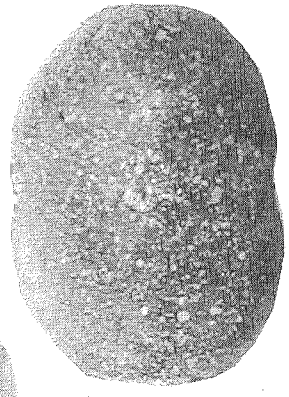

A


B


C

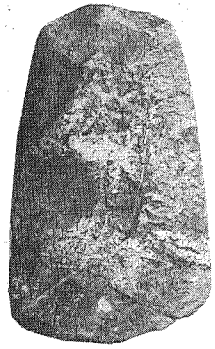

D


E


F

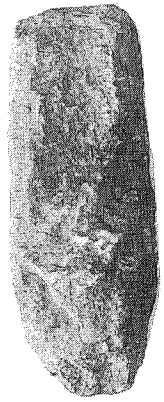


G


H


I


J


K

全全面とも割りに滑らかではあるが石質のせいであろう。

◎ 与座岳採集石器

糸満町字与座の丘陵上にある与座岳で採集された石器である。

与座岳遺跡は、現在米軍のミサイルレーダー基地となりレーダーロームが遺跡の上にできたため湮滅している。

当時　調査にあたった多和田真淳氏は「高嶺村与座たけ（注３）拝所は穴居（琉球石灰岩自然洞）住居趾で数個の石器が工事中出土して土器片も伴ったらしいが惜しい事に数個の石斧が首里博物館に蔵せられたのみで鳥有に帰した」と報告し（注４）その後の同氏の調査で土器の伴出を確認している。（注５）

この遺跡は１９５３年７月１８日野原重善・野原善太郎両氏によって発見され、採集石器は多和田氏をとおして当博物館に寄贈されたものである。

図６　整形のわるい粗面の石に研摩をほどこした石斧である。

研ぎはしてあるが全体的に欠傷の多い粗雑なできである。上部は打ち欠いてととのえただけで研摩がなされていない。刃部は両面から研ぎ合わせた鋭い刃で、使用中の欠落と思われる損傷がみられる。

図７　比較的大形のたたき石である。

全面研摩がなされているが、上部と下部を主として利用したための痕跡がある。また、面の中央部もわずかながら利用している。

重い石器のためか掌握をたやすくするため両側面に切り込みをつくっている。

図	写真	最大長	最大幅	最大厚	採集年月日
1	A	81㎜	25 ㎜	16㎜	１９６２年
2	B	65	43	21	〃
3	C	91	41	13	１９６２年４月１７日
4	D	50	48	25	〃
5	E	73	51	22	〃
6	F	123	83	40	〃
7	G	139	75	14	１９５３年７月１８日
8	H	112	59	15	〃
9	I	134	29	25	〃
10	J	123	42	12	〃
11	K	132	40	22	〃

図８　全面研摩の石製鏃と思われる。反った形をしており、刃部は反った内側はゆるく外側は大部研かれて内側よりの鋭い刃をつくっている。

反った内側には柄をとりつけやすくするためか両側面がえぐられている。刃部の欠損部は採集時

か、それ以後のものと思われる。

図9　三面研摩された石器で船型をした工具と思われる。

図10　板岩質の石斧で全体的に研摩は簡単である。

刃部は反った内側から大きく研ぎを入れ外側からの研ぎで鋭い刃をつくって、片刃状を呈している。また両側面には全然研摩がなされていない。

図11　打ち欠いて石斧をつくる工程のもので研摩がなく刃部も研かれてない。

おわりに

本資料は考古資料として当館に収蔵されているもので長い間報告されていないため今回紹介することにした。

この小稿を書くに琉球文化財保護委員会文化財指導官多和田真淳氏には多くの御教示をいただきました。

注1　琉球国由来記巻十四

注2
注3　文化財要覧　1956年版　「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」　多和田　真　淳

注4
注5　多和田氏から教示された。

1970年3月15日　印刷
1970年3月20日　発行

琉球政府博物館館報

第　3　号

編集発行　琉球政府立博物館
印　刷　松本タイプ
電話　(8)—5445・1845

沖縄県立博物館

正　誤　表

頁	行	誤	正
9	左35	大　里　村	玉　城　村
10	右22	島袋中学校	島袋小学校
16	左13	玉城　朝輩	玉城　朝薫
16	右　4	八重山民謡史	八重山民謡誌
16	左25	沖縄大学学生文化研会	沖縄大学学生文化研究会
17	右　8	近江の消像画	近江の肖像画
20	27・28	守礼之門	守　礼　門
20	35	本覚山壊文	本覚山碑文
20	38	金　魁	全　魁
21	右31	通　福　書	通　禧　書
29	33	持つはずなのに	持つはずはないのに
30	2・4	西　方	両　方
34	5	奄美の側	奄美の例
34	35	線の形が	線　が
37	29	ほとんどの型	ほとんどどの型
37	30	若　竹	苦　竹
39	13	海ディルだろうか	海ディルだろうが
39	21	区別している	区別してはいるが
40	1	作れる人を	作れる人が
40	5	運搬具や名称	運搬具の製法や名称
40	20	民俗学研究所論	民俗学研究所編
49	24	八木明徳など	八木明徳氏等
49	30	喜屋武真栄は	喜屋武真栄氏は
50	33	打ち切ってしまったこの	打ち切ってしまったのでこの
51	23	殻にとじこもって	殻にとじこもって
52	16	(8月4日 タイムス)や筆者	(8月4日タイムス)、筆者

頁	行	誤	正
52	33	比嘉世幸が	比嘉世幸氏が
53	7～8	「日本のから手……」	アンダーラインは抹消す
53	10	社会福の	社会福祉の
53	14	長嶺将真等	長嶺将真氏等
54	28	船越義玲氏が	船越義珍氏を
55	5	おこなわれたのだが	おこなわれのが
56	3	松　林　旅	松　林　流
56	10	会則を審議	会則審議
56	21	開催されるが	開催されたが
58	37	7目連載	7回連載
63	16	いつれも	いずれも
65	5	城　棲	城　楼
65	21	官室棲台	官室楼台
65	30	城　棲	城　楼
67	写真説明	（那覇市慌屋）	（那覇市壺屋）
68	2	「イレジーン」	「イシジーシ」
68	写真説明	「ウドゥングゥージーシ」	「ウドゥングワージーシ」
69	8	「厨子ガメがつられ」	「厨子ガメがつくられ」
69	写真説明	「ウドゥングゥージーシ」	「ウドゥングワージーシ」
69	25	「下り棟上対の……」	「下り棟上二対の……」
70	4	初め頃らしいということは	初め頃らしい。ということは
73	7	今目でも	今日でも
73	20	少なくともこれような	少なくともこのような
73	30	～も小さくしたもの	～を小さくしたもの
80	1	全全面	全面